

鹿児島県史料集 (45)

鹿児島県布達(上)

刊行のことば

鹿児島県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第四十五集として「鹿児島県布達（上）」を刊行することになりました。布達とは、明治十九年二月以前に行政官庁がその官庁の内部または下級の行政官庁を指揮するために発した命令であり、当館に所蔵する鹿児島県布達のうち、「明治五年より九年に至る」、「明治五年六月より六年十二月に至る」、「明治拾年壺」及び「明治拾年弐」を収録したもので、当時の行政官庁がどのような仕事をしていたかを知ることができる貴重な史料となっております。

なお、来年度も引き続き「鹿児島県布達（下）」を発行する予定です。

本書は、鹿児島市文化財審議会委員の宮下満郎氏によって、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなったものであります。長期間にわたる同氏の御苦労に対し心からお礼を申し上げますとともに、この史料が郷土史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成十八年三月

鹿児島県立図書館長

田 中 昌 平

解題

鹿児島県立図書館所蔵の「鹿児島県布達」は、別表のとおり明治五年から同一六年まで、五七冊の冊子にまとめられている。同一〇年以後の布達は宮崎県立図書館の旧蔵であったが、現在は宮崎県文書センターの所蔵である。

No.	年次・巻数	No.	年次・巻数
1	目次 明治5～11年	30	明治12年 11
2	目次 明治12～13年	31	明治13年 1
3	目次 明治14～16年	32	2
4	明治5年より9年に至る	33	3
5	明治5年6月より6年12月迄	34	4
6	明治10年 1	35	5
7	2	36	6
8	3	37	7
9	明治11年 1	38	明治14年 1
10	2	39	2
11	3	40	3
12	4	41	4
13	5	42	5
14	6	43	6
15	7	44	7
16	8	45	8
17	9	46	明治15年 1
18	10	47	2
19	11	48	3
20	明治12年 1	49	4
21	2	50	5
22	3	51	6
23	4	52	明治16年 1
24	5	53	2
25	6	54	3
26	7	55	4
27	8	56	5
28	9	57	6
29	10		

鹿児島県の布達が、なぜ宮崎県立図書館に旧蔵されていたのであろうか。伝承の経緯は明らかでないが、同史料に宮崎支庁発行の布達も多く含まれていることから考えると、明治九年八月二日宮崎県を廃して鹿児島県にあわせ、宮崎支庁を置き、同一六年五月九日ふたたび宮崎県を分置したことにかかわりがあると思われる、この間に出された布達類が宮崎支庁で保管され、ある時機に分類編さんされて冊子にまとめられ、のちに宮崎県立図書館へ保管が移されたものであろう。

鹿児島県立図書館の「鹿児島県布達」と宮崎県立図書館旧蔵の「鹿児島県布達」には若干の違いがある。宮崎県立図書館の布達は別表No 6の明治拾年沓から始まる。同書の図書ラベルは、拾年沓はA、

A	M3182 5 8-1-1
B	M3182 5 8-1-2
C	M3182 5 8-2-1
D	112 1 33 九四
E	112 1 33 九三

拾年式はB、拾壹年沓はCである。これに対して明治九年以前の二冊は、後述するように所蔵や成立を異にし、鹿児島県立図書館本の成立時に、同種のものとして追加補充されたものと考えられよう。

以下別表の巻数順に内容を見ると、No 1～3は目次集である。その目次は各冊の巻頭にあるものと同じである。つまり鹿児島県立図書館が複写製本するのを機に、目次だけのコピーを三冊にまとめたものである。新しい独自の目次を作成したものではないが、利用者にとって、各冊を検索する手間が省けて便利である。

鹿児島県布達 明治五年ヨリ九年ニ至ル

No 4の表紙に張られた「鹿児島県布達 明治五年ヨリ九年ニ至ル」の題箋は毛筆の手書きである。宮崎県立図書館の蔵書印とラベルはない。同書のラベルはDであり、別に九四が墨書で追加されている。中扉には横長で随凹形の蔵書印がある。中段に算用数字の番号（読みとれず）があり、上段に右から「島津家編輯所図書」、下段に「大正一二年二月二〇日受入」とあるので、島津家編輯所旧蔵本の一部であったことがわかる。

明治五年から九年の布達はほぼ年代順に写されているが、一部前

後する部分もある。末尾に同一〇年のものが一通ある。それは二月一九日付で、西郷隆盛の出兵に随行した者の調査を戸長に命じた布達である。布達の大部分は『旧記雑録追録』と同文のものであるから、伊地知季通が同書の編さんに利用した史料の可能性もあるが、重複しない布達もみられるので、異なる史料綴とも考えられる。

鹿児島県布達 壬申六月ヨリ癸酉十二月迄

No 5のこの冊も、同じく宮崎県立図書館の蔵書印のラベルはない。表紙に張られた「鹿児島県布達 壬申六月ヨリ癸酉十二月迄」の題箋は墨書で、同じように島津家編輯所の受入印があり、ラベルはEであるので、同所ではこの冊の番号が若いことがわかる。また表紙に鹿児島県維新史料編さん所の蔵書印もみられ、同所の所蔵目録では昭和四八年度に収集した史料である。布達の年次は五年と六年が多いが、末尾に七年分が四通みられる。前書と同じく旧記雑録と重複するが、未収分があるのも同じである。

以上のことから、この二冊は宮崎県立図書館旧蔵の、明治十年以後の鹿児島県布達とは、成立課程や旧蔵を異にすることがわかる。

鹿児島県布達 明治拾年迄

No 6の表紙には、「宮崎県^{古公文書}鹿児島県布達 明治拾年迄」と活字で印刷された題箋が張られている。うち拾と迄はゴム印らしいもので押されており、No 7以下もそれぞれ年次と巻数は印字されている。分類ラベルは前掲Aであるから、宮崎県立図書館旧蔵のものである。

本書には明治一〇年一月から六月までの布達が含まれ、大きく二つに分けられる。前半は大山綱良県令時代のものであり、巻頭に文書題の目次がある。後半は岩村通俊県令着任以後の布達で、同じく頭部に目次がある。ただし印刷にあたって、巻頭の目次は所在を示

すにとどめ、本史料集の巻末に移して全体の文書目録とした。

前半の一月四日から五月五日まで大山県令時代の七七通の布達は、中央に宮崎県と印刷された罫紙に墨書されたものである。甲号や乙号には番号があるが、ほかに番号のない番外と無号がある。甲・乙ともに発行人は大山県令、番外は県令と県令代理などである。これらの違いは布達の形式や内容からは判別できない。無号の布達は宮崎支庁発行のものが多く、旧宮崎県域を対象にした布達と考えられよう。一部に『丁丑日誌』（鹿児島県史料集Ⅱ）と内容の文書があるが、月日に若干の違いがあるので、いずれかが転写の際に誤ったものと考えられる。

後半の岩村県令着任後の布達は、第一号（五月二日）から第四二号（六月一五日）までと、番外（五月二八日）一通の計四三通となり、発行人は岩村県令である。活字印刷と墨書が半々である。印刷物の紙に特色はないが、墨書の場合は前半と同じく宮崎県の罫紙が使用され、楷書である。このうち手書きの拾号布達は、No 8「鹿児島県布達 明治拾年参」の末尾に再録された一七通の中に、文字に若干の違いはあるものの活字のものがあるので、岩村県令以後の布達は活字で印刷されたものと考えられ、手書きの分は原文書が散逸、その後布達集を作成した時点で写本が収集されたのであろう。ここには宮崎支庁の布達はみられず、岩村県令だけの布達であり、対象は県内全域というよりは、旧鹿児島城下に関するものが多いといえよう。

この時期は西南戦争中のことであるから、内容が戦争に関することが多いのは当然であるが、戦況を知らせる布達は少なく、五月に入ると鹿児島も戦場になって兵火の被害者が多くなり、貧民救済

に関するものが増えてくる。また出兵者に反省帰順をうながし、傷病兵や一般病者のために病院の設置などに注目したい。

前半に、一般にあまり知られていないのだが、一月二三日付の違式註違条例がある。森田貴子氏の「違式註違条例」(山川出版社、「日本史の研究」二〇八号)によると、同条例は現在の軽犯罪法の前身にあたり、違式とは慎むべきことに故意に反することであり、註違とは過失で他人の迷惑となることである。明治政府は六年(一八七三)年七月一九日に、各府県に対して「各地方違式註違条例」全九〇条を公布した。その後各府県では、九年から一〇年にかけて違式註違条例の罪目を改編し施行したという。布達の但書に「元宮崎県ヨリ揭示ノ条例ハ大区扱所ヘ引揚置クヘシ」とあるので、今回が初めての施行ではなく、改正であったことがわかる。

その布達によると、

第一条で、違式の犯罪者は七五銭から一五〇銭までの罰金を課す。第二条で、註式の犯罪者は五銭から七〇銭までの罰金を課す。として、罪目には第一条、男女混浴の浴場、第二六条、勝手に自分の田へ水を引くこと、第三六条、他人の墓碑を毀損などがあり、当時の鹿児島県の世相を反映するであろうか。第五一条、旅籠屋が旅人の氏名を記入させ届出ることなどがある。なおこの条例は、同一年にも数回改正されている。

鹿児島県布達 明治拾年式

六月一八日の甲第一号から一〇月三十一日の往第三六三号まで、計一五九通の布達集である。表紙は拾年壱と同じように活字印刷されたもので、拾と式がゴム印と思われる。中表紙に宮崎県立図書館の蔵書印と分類ラベルがある。巻頭の目次には月日の記入がある。

布達には、甲・乙・番外・往・出・支などの別があり、それぞれに番号が付く。その発行人は殆んどが鹿児島県令岩村通俊である。支は宮崎支庁の発行であり、ほかに無号も宮崎支庁の発行で旧宮崎県下に布達したものが多く、それぞれの番号は必ずしも全部が揃っているわけではなく、欠番は布達集が編さんされた以前に既に散逸したものである。そのうち甲号の八通は『丁丑日誌』から補充したが、以後は連続補充できなかった。

拾年式の布達のうち、活字は甲号が一二通と無号一通の計一三通だけで、以外は手書きである。活字の布達は、中央に鹿児島県と印刷された用紙が使用され、手書きの分は宮崎県と印刷された罫紙である。

前半は同じく戦争中であるが、やがて西郷軍が降伏するなど戦況を伝えるものが増えてくる。さらに出兵者へ反省帰順を説く諭達や戦時中の諸対策、貧民救済に関するものが多い。後半は出兵者の戦死・不明者の調査、焼失家屋や踏み荒された農地の調査、戦時中に政府軍の兵舎に使用された民家の調査などや、海陸交通網の平時化、学校の再開など、戦後復興に関するものが多い。

注目すべきものに、往第十九号以下、コレラ病の予防や対策などがある。西南戦争中にコレラが万延し、従軍した屯田兵が持ち帰ったコレラ菌で、北海道ではアイヌの一集落が壊滅した事が広く知られているが、鹿児島でコレラの猛威に言及することはあまりない。本史料でも具体的に南九州で病気が流行したことを伝える史料はないが、予防法はきわめて詳細に説かれている。

目次

一、鹿児島県布達	1
明治五年より九年に至る	
二、鹿児島県布達	21
明治五年六月より六年十二月に至る	
三、鹿児島県布達	45
明治拾年迄	
四、鹿児島県布達	75
明治拾年式	
五、文書目録	125

例 言

- 一・本史料集には、鹿児島県立図書館所蔵「鹿児島県布達」のうち、明治五年より九年に至る 明治五年六月より六年十二月に至る 明治拾年弐 明治拾年弐 の四冊を収録した。
- 一・原稿作成に際しては、できるだけ底本の体裁に従ったが、一部書式を整えた文書もある。
- 一・印刷に際して、原則として常用漢字に改めた。また変体仮名はすべて通用体の平がなに改めた。ただし、江・者・茂・而・与などについては、活字を小さくしてそのまま使用した。
- 一・虫喰いなど不明か所は、字数によって□□で示した。
- 一・本文には適宜、読点や並列点などを付した。
- 一・底本の巻頭にある目次は、印刷に際して巻末に移し、通し番号を付けて本書の文書目録に利用した。その際、底本に目次や月日を欠く場合は、編者が新たに文書題や月日を追加した。
- 一・本史料集の原稿作成と校訂は、宮下満郎が担当した。

鹿
児
島
県
布
達

明治五年より九年に至る

(表紙)

鹿児島県布達 明治五年ヨリ
九年ニ至ル

鹿児島県布達 明治五年ヨリ九年ニ至ル

1 戊辰以来重創之面々、切斷等いたし又老疵口等再発之者、療医診察之上癩人被仰付、一世限り別段之御取扱も有之来候得共、今般大蔵省江人員御届相成、以来於当県定額外之儀ハ取扱不相成様、屹与御達相成候間、此段為心得及布告候事、

壬申十月

鹿児島県庁

別紙之通相達候条、可及布告事、

壬申十月五日

庶務課

戸長

別紙之通御布告相成候間致順達候、無滞被相廻、留より此返達^(御カ)可給候、以上、

但皇大神宮大麻県庁より被相渡候ニ付、御渡可申候間、取ニ御出可給候事、

2 其県下四民之内、歩兵望之者三十人、別紙召集兵概則照準致精撰、鎮西鎮台本营ニ差出可申事、

但行程老日六里積、旅費老人ニ付永三百文ツ、其県ニ於テ取替置、追而當省江可申出事、

壬申九月廿日

鹿児島県

山県陸軍大輔

(別紙)

一年令ハ二拾歳以上、三拾歳以下タルヘシ、
一身ノ丈曲六ニテ五尺以上之者タルヘシ、
一自家之産業ニ於テ故障ナキ者、
右者、鎮西鎮台召集兵卒精撰差出候様、前代之通被仰渡候ニ付、
士族・卒・平民ニ至迄、右ヶ条ニ適當者望之者、当月中当県江可願出候、此旨無違漏可致布告候事、

壬申十月

鹿児島県庁

3 此節朝廷江当県内高御届相成儀ニ付御用相成候間、別紙案紙通銘々持高勾才迄も無間違相認、同案式通にして可差出候、万一欠数間違有之儀者持主迷惑相成誤ニ付、其心得可有之事、

右之通致布告、当月十二日限取米可差出事、

申十一月

租税課

4 県下旧御軍役高所務米渡方ニ付而手形及数百通、銘々当人江渡付方別而混雜之手数ニ、下代万一渡違等も難計候ニ付、区々戸長江右之手形引渡、夫より区内高持人別江引渡候様被仰付候事、

申十一月十五日

出納課

別紙之通致承知候間、早々致順達候、無滞被次渡、留より御返し可給候也、

但手形請取ニ被參候人者、請取書持參可有之候、
申十一月十四日 高山一郎

5 旧御軍役高所務米手形被相渡候ニ付御渡可申候間、請取ニ御出可給候、此旨早々致順達候間無滞被相廻、留より御返却可有之候也、

十一月廿日

高山一郎

6 都城県被廢、大隅国之内従前所轄之分老県管轄ニ被仰付候条、物成

・郷村等可受取事、

但物成ハ壬申歳ヨリ可受取事、

明治六年一月十五日

太政官

別紙之通被 仰渡候条、及布告候也、

鹿児島県庁

明治六年一月三十日

庶務課

7 人力車之儀、諸人為便宜追々相開、殊之外車相殖候処、間ニ老夜中無桃灯又老不相当之賃錢貰受候者有之由、旁不締之廉も不少候ニ付、以来運送会社支配申付候条、諸事於会社商議を尽し、聊不締之廉無之様可致候、左候而車屋等設度者、同会社江相付可願出候也、

二月廿七日

鹿児島県庁

此節人力車之儀、会社支配申付候而者、至当之税納取建、月々租税課江届可申出事、

二月廿七日

鹿児島県庁

別紙之通申付候条、相達候也、

二月廿七日

庶務課

8 一吏宅人

右、当県内人馬賃錢、宅里五百拾式文ツ、払渡米候得共、錢相場

替ニ付而者、宅里貳百五拾文ツ、払渡候様被仰渡、吟味候也、

三月八日

出納課

右之通申付候条、及布告候也、

明治六年三月八日

鹿児島県庁

9 一諸人所持之銃炮改方等之儀別紙之通被仰渡、就而者免許銃類を除く之外、御法式之通都而県庁より改割印可渡置候条、銘々所持之人名・銃号等相記、県下老県庁江、諸郷ハ郡治所江持出検査可受候、尤米月十日限取揃早々可届出候、此旨申達候事、

但諸郷改割印之儀ハ、第何大区何番与銘々一郷ツ、相分可渡置候条、銃炮取揃之上何分可申出候、

明治六年三月十九日

鹿児島県庁

(別紙)

第二則

一免許商人タリトモ、軍用ノ銃砲彈藥類ヲ窃ニ売買不相成、売渡節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取、其員數ヲ照シ売渡可申、又買入ノ節ハ、其管庁へ願出免手形ヲ受、其員數ヲ以テ買取可申事、
但東京・大坂ノ儀ハ武庫司へ可願出事、

第五則

一華族ヨリ平民ニ至ル迄、免許銃炮類ヲ除クノ外、軍用ノ銃炮并彈藥類、ヒストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成、就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃炮ハ、一々其管庁ニ持出、東京・大坂ハ武庫司へ持出、別紙銃炮改割印式ノ通号官印ヲ受可申、他人へ譲与候節ハ、第二則ノ手續ニ従フヘシ、

但彈藥買入致シ度者モ、亦二則ノ通りタルヘシ、

銃炮改印ノ式

干支何番、武庫司或ハ何府県

右、所持ノ古番号并逐一書記シ置、管轄鎮台へ届出、鎮台ヨリ東京武庫司へ差送可申事、

免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下

一各国諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀、其玉目稍大ナレトモ、霰彈ヲ用ユルモノハ之ヲ許ス、

右獵用銃所持ノ者ハ、其銃名・員数等巨細附記シ其管庁へ届出、其庁ヨリ東京武庫司へ差出可申、
東京・大坂ハ所持ノ者ヨリ直ニ武庫司へ届出ヘシ万一軍用・獵用ノ差別難相弁者官へ尋出候得ハ、検査ノ上免許証印ヲ据へ可相渡事、

別紙之通御布告相成候間、早々致順達候、左候而銃炮御所持之面々ハ、御法式之通羽書を以有無之訳、米月五日限拙者方江可被申出候、無滞被相廻、留より御返投可有之候也、

三月廿一日

高山一郎

10

管内紙札式貫文以上引換方被仰付、追々濟寄候ニ付、県下引換来ル十日限ニ而一切無御取揚候間、到其期後悔致間敷旨、早々御布告相成度吟味候事、

西四月二日

出納課

右之通申付候条、可及布告候也、

明治六年四月三日

鹿児島県庁

11

諸区并市中諸取引之儀ハ、旧十二月迄ハ旧曆を以引結取扱候様被仰渡置候得共、右者旧十二月迄之事ニ而、其後ハ新曆を以諸事取扱当然之事候処、間ニ者心得違之向も有之哉ニ相聞得候間、已後新曆を一統引結可取計旨被仰渡度事、

当九月より軍功賞典祿并俸祿御養御扶持米等ニ至迄、都而切手形ニ而、年中六度手形相渡候様被仰渡置候ニ付、別冊割通出納課より米藏出張方へ可差廻ニ付、賞典祿其外定祿被成下置候人者、都而別紙案文通明細書一帳ニ取仕建、戸長前ニ而取揃当課へ可差出候事、

西六月廿五日

出納課

別紙明細書一帳取仕建、米月十日限可差出旨承知いたし候間、案文ニ基キ拙者方江、無間違右日限ニ不取後候様御遣可給候、此旨致順達候間、無滞被相廻、留より御返投可有之候也、
但別冊月割之帳面ハ追而可相廻候、

六月廿五日

高山一郎

12

県庁令廃止候条、官員之儀者追而何分可相達候事、

明治六年癸酉七月廿日

大山権令

県庁令廃止候付而ハ、何分申渡迄之間、難差置願伺等之事件者、戸長江相付可差出候事、

明治六年癸酉七月廿一日

大山権令

別紙式通、早々及布告候也、

西七月廿一日

右松典事

県庁廃止之旨相達置候処、米ル廿七日より更ニ開庁いたし候事、

癸酉七月廿四日

鹿児島県権令大山綱良

別紙之通可及布告候也、

癸酉七月廿四日

右松典事

13 県下士族平民、其地所ニ相係候願書又者届書、区内戸長承届、継書を以地券方江申出候様、左候而諸会社之儀も、地方ニ相係候事件者、戸長より内々致布達、願書等も前件同様取計候様、尤願人大小区号・士族平民之訳可致片書旨、不洩様御布告相成度事、

西七月

地券方

右之通申付候条、致布告候也、

明治六年七月十九日

鹿児島県庁

14 第一号

諸人俸禄米八月皆済、半米当分御買入米取扱ニ而直様出来兼候ニ付、九月二日より銘々請取書を以、是迄渡定日ニ可被相渡候ニ付、右之趣戸長江御布達被仰渡度事、

西七月三十一日

出納課

右之通候条、此旨可及布告候也、

癸酉七月三十一日

鹿児島県庁

15 下士官以下現役之内、戊辰之政傷疾を請、其疾再発兵役ニ難堪、有做ニ是迄扶助賜候儀も有之候處、其節已ニ賞典被下置候儀ニ付、自今右旧傷再発之者者通常病を取扱、一切扶助不賜儀与可相心得、此旨相達候事、

明治六年七月十九日

陸軍卿山県有朋

熊本鎮台

別紙之通相達候条、此段及布告候也、

八月九日

鹿児島県庁

戸長

16 米貳万七千五百九拾五石六斗

右、戦功人数五千貳百貳拾六人

同四千九百五拾四石八斗

右、戦死人数五百三拾人

癈人 内九拾九人

右者、去ル戊辰之役奥州・北越諸所江致出軍、戦功且戦死・癈人と罷成候者共ニ而、旧藩管轄高内を以夫々等級ニ応し致賞典置候處、其后旧知事江為御賞典拾万石下賜候儀共、内外御多端之折からニ付奉還仕度候間、及再度奉願候得共御採用無之、然ル処去年廢藩立県被仰出、事務改革之御沙汰ニ付取調中、嶋津久光江御賞典高之内五万石を以分家被仰出候ニ付、右人数江賞典之儀者従前之通被据置候様奉願、尤戦功之者ハ十五ヶ年、戦死三拾ヶ年、癈人と罷成候者共江者一生限遣置候訳ニ而御座候間、旧藩中適宜之処分ニ者御座候得共、為 王事戦死又者癈人と罷成ニ付而者、今日ニ至り候而ハ廢止候場合ニ至兼、勿論大ニ人心ニも致關係、事務・旅行ニおひても官員一統悉苦慮被成候ニ付、右等之事実御洞察被下候而、速ニ御許下被成下候様偏ニ奉懇頼候、以上、

壬申九月十八日

井上大蔵大輔殿

鹿児島県権参事

椎原国幹

17 書面戦功有之者并癈人之内、夫卒を除賞典米ハ従前之通可据置、戦死之者四百六拾八人江者、祭資料とシテ是迄之給米三ヶ年分、合算米壹万九百貳拾三石貳斗一時ニ被下候間、給典米ハ壬申年限渡方可相廢、因テ右米為替を以相渡候条、壬申第百七拾四号当省布達候通切手差出請納可取計、旦元兵部省ニ於調済之通、夫卒之内癈人四人江者一人ニ付金百匁ツ、戦死之者六拾二人江者妻子江金百五拾匁ツ、下賜候間、従前給米者相廢止之儀と心得、初年より渡方取計候分合算致シ、壬申貢納相場を代金ニ積り、右賜金之内ニ而引去、残金請取方更ニ可申出候事、

明治六年四月五日

大藏大輔井上馨印

18 大崎 加久藤 高崎 吉田 松山 野尻
都城 高原 馬関田 飯野 庄内 高岡
志布志 山之口 穆佐 小林 須木 三俣
倉岡 諸原郡 高城 綾 旧勝岡

諸人給地高之内別紙之郷候間、致所持居面々御用見合相成候条、高員數ハ勿論郷村浮免等之次第詳細相記、帳面相仕立名印相居中出候様致布告、米ル十五日限取揃可申出候也、

但高員數等若間違申出候而ハ別而不都合相成候条、其領分ニ而可相達事、

西十月四日

地券方

19 今般戸長役所之儀、県下三天区江宅ヶ所ツ、上・下・西田町江宅ヶ所ツ、設立ニ付、取扱向之儀左之通可相心得候、
一戸長之儀者、銘々請持区内之事件当任之事候間、万端心を用、深

切ニ可致取扱事、

一諸布達書至急之事件者、時々雇人直持を以可致順達候事、

但雇人直持之節者、其時々可及沙汰候、

一常舁之布達書者各戸順次ニ為繼渡、尤幾日限と相極め、其備日通り役所江無間違為致返納、布達皆済之届時々県庁江可申出事、
但布達等閑ニ心得、順達遷延ニ及候者も候ハ、不差置可申出候、

一行状衆ニ勝れ并鰥寡孤独之者者、情実を誘明し不差置可申出事、

一戸籍出生生死等之儀者、日々帳簿加除し、時々可届出候事、

一口事争論等之儀者、戸長前より可成諭解せしめ、大事ニ不及様精々可致注意候事、

一願意・訴訟等之書付類者、戸長中吟味遂、願人之区内戸長連印を以、定日ニ可申出候、至急之儀者定日ニ不拘候事、

一通路・渡川等不取荒様致注意、万一屋敷掛之者不頓着ニ召置候向も候ハ、戸主を相諭し、清潔ニ致取扱候様、尤洪水等ニ而及大破候場所者速ニ可届出事、

右之通定置候条、諸事無緩怠可取扱事、

明治六年 癸酉八月

鹿児島県庁

20

第十六号

(通)

一今般東京駅途寮役員当地江出張相成、郵便方法尚又盛大被取行候様取扱相成積ニ而、其郵便之儀者人民便宜之為ニ、政府莫太之御失費を不被為厭、低価之税金を以全國一般不通之儀無之様、厚ク御世話被為在候儀ニ付而者、規即を守り不税之信書等取遣不致儀ハ勿論ニ候得共、未タ不并舁之者有之、万一夜中限外之幸便江相

託シ、無税之信書往復為致儀有之候而ハ、郵便犯罪罰則ニ照シ過分之罰金差出候様立到リ、遂以身上ヲ苦め候様之儀於有之者、実ニ愍然之至候条、区内無遺漏懇切ニ説諭いたし、無税之信書取遣候儀無之様取締可有之候也、

癸酉五月

鹿児島県庁

21

第十七号

一今般庁下取締組を設ケ、一大区毎ニ屯所一ヶ所を置き、昼夜相詰時々為致巡邏候条、此旨布告候事、

癸酉九月廿九日

鹿児島県庁

22

大島外四島之儀、今日之売買米粟其他之品物を以致交換、日用相并候得共、方今之時勢ニ立到リ甚無便利成立、嶋民共追々難渋之段相聞得候ニ付、此節県下同様金錢致融通候様中渡置候条、諸人為心得相達候也、

癸酉十月廿二日

鹿児島県庁

23

佐賀県賊徒征討蓮池迄進入候処、昨廿八日降伏之状申出候、然ルニ賊魁江藤新平脱走致候趣ニ付、兼而相達置候通手配相付候事ニ可有之と存共、聊無漏徹遂探索、至急召捕可差出候、此旨相達候事、

明治七年三月一日

内務卿大久保利通

別紙相達候条、早々着手尽力可有之、此旨相達候也、

明治七年三月一日

内務卿大久保利通

別紙之通相達候条、至急及布告候事、

鹿児島県権令参事中

甲戌三月七日

24

いろはにほへと ちりをわかよた
右、来ル十七日 右、同十八日

そつねなむの

くやまけふこえて
右、同廿日

右、十九日

あさきゆめみ

しひもせず

右、同廿二日

右、同廿三日

右者、士族持高所務半米払、本行日割を以当日朝五ツ時より九ツ時迄之間、来ル十七日より請取持越、御米相請取候様御布告有御座度吟味仕候、此段申上候、以上、

戊四月七日

米蔵詰出仕

25

一甲戌何歳
一住所

但何年何月免職相成候訳、又ハ当分非役之訳、

右者、旧近衛兵役ニ而從前免職相成候伍長已下之者、又者当分非役ニ而帰県相成居候上下士官人員、都而御用見合相成候条、右案文ニ基銘々區別相建、各区戸長より無遺漏明瞭ニ取調、至急可差出候、此段及布告候事、

明治七年五月八日

鹿児島県庁

県下戸長

26

第二十六号

沽券税屋敷地租、年々六月十月両度可致上納成規ニ候条、本年分地

租半金可致上納候、左候而戸長より取揃人可差廻候ニ付、銘々其者江無遅滞可相渡旨、地券所持之面々并学校・病院・諸会社等江可致布告事、

但戸長方江取揃之上、別紙日割之通地券税蔵江可相納候、尤証印税之儀ハ不及上納候、

甲戌五月四日

戸下
戸長

鹿児島県庁

第二大区小三区・四区

右、戌五月廿七日より同廿九日迄、

27 一錢六錢六り一、貳イ
(ママ)

旧錢ニシテ貳貫五百五拾文

別紙之通御布告相成候間致順達候、地租上納帳江税金相付被相渡候得共、請取渡いたし候而ハ却而煩雜ニ相掛候ニ付、別紙代金写相添差廻候ニ付、税金相封し名前書記、印形いたし可被置候、左候而追而請取方ニ可相廻候間、其節無滞可相渡候、無遅滞被相廻留より御遣可有之候也、

戊五月十三日

高山一郎

28 第三十号

先般銅錢之儀、七拾貳文を以便宜之取替致度、三町戸長共より願出趣有之、其通聞届候旨相達置候処、商人共何様心得違候哉、緒色益沸騰殆ト倍增ニ押移候哉ニ相聞得、窮民之者其苦情相成、別而不都合之事候条、尚亦公旨行届候様厳密取締可致旨、乍此上不聞之者者見聞をも掛置候ニ付、屹与可及沙汰候事、

明治七年戊五月廿五日

鹿児島県庁

県下
戸長

29 昨年三月旧藩札曳換之節、表向キ小仕錢不都合之訳を以、壹貫文札以下押印ニ而被残置通用致米候処、以来追々手摺相成文字不分明ニ付、今般手摺之正札を以、不日曳換之儀被仰達候、就而者天保錢并銅貨等同様相心得、万一互ニ便宜ニ任せ割増等ニ而取遣候者者、引換之節屹与迷惑ニ可及候条、聊心得違有之間敷候得共、定価之通可致取遣候、尤其節ニ臨ミ不都合不相成様、分而告諭可致、此旨管下江無遺漏及布告候事、

甲戌五月廿七日

鹿児島県庁

県下
戸長

30 第三百九拾六号

一地券渡方規則中証印税之儀、代替授与并水火盜難より書替候分ハ、今後券面書載之代価ニ不拘、券状壹枚ニ付五錢ツ、收納可致候、此旨布告候事、

明治六年十二月二日

右大臣岩倉具視

31 第三十九号

一癸酉十一号を以相達置候処、管下市外沽券税施行二十二ヶ条之内第三条、地券ハ新規并書替共十円ニ付五錢ツ、十円以上ハ右之割ニ而印税可納掲載候処、別紙第三百九拾六号之通、今般更ニ御

布達相成候ニ付、尔後右通書替之分ハ券面書載之代価ニ不拘、券状壹枚ニ付五錢ツ、收入可致、且又沽券稅地券所持之面々、売買勿論相續等之節、書替名面替規則之通心得違無之様、時々戸長連印を以地券掛江差出、不都合無之様無脫漏区内江可申渡事、

戊五月十九日
鹿兒島県庁

県下
戸長
三町
区長

32 今般海軍省江海兵徵募相成筈候ニ付、右志願之者者各区戸長江相付、年配并居所等記載之明細相添、本月限願書可差出、勿論召集之上者、兼而被仰渡置候規則ニ照準シ検査可相成候条、此段管内一般無遺漏及布告事、

戊五月
県下
戸長
鹿兒島県庁

33 救盲院

地所上築地八町岸岐
病者入院定数七人宛

右者、県下士族関山壮太郎外兩名、県内病者救盲之為、今般願ニ依り設立候、左候而極困窮之病者ハ藥并飯米代等、都而当院より引受療養可致仕法ニ候条、県内病者入院願望之者は、其区之戸長江相付当院江可申出、此旨布告候事、

明治七年甲戌七月廿五日
県下 戸長
鹿兒島県庁

34 此度從三位殿深勘考之訳有之、島津家初代以來慶応三年戊辰以前迄、御家臣戰爭之砌於諸所致戰死候人員、名前取調候様との事候条、其者之俗称・実名且於何方何年月日遂戰死候訳、相知候丈委細相記、当年十一月限り各其子孫共より可申出旨、県下一同江被及布告、右届書取揃御差廻給候様致度御座候也、

戊八月
県下
磯 家令

御中

別紙之通依頼相成候ニ付、無遺漏戸長江相達事、
戊八月
鹿兒島県庁

35 一市街中諸人門明直并小門明願之儀、時々願出許可相成来候得共、以來者假令者東口を西口ニ明直候節ニ限り是迄之通願出、其地表口不相替分又者小門直之儀者、戸長江時々届書差出、戸長より右届書地券方江差出候様可致候事、

一諸人居屋敷四壁垣通曲折有之、并合候様垣相直候儀自似ニ相直候も間々有之、右者第一畦歩増減者勿論、通路之障碍ニも相係不可然儀ニ付、以來絵図面相添時々願出候様可致事、
一地所諸願書差出候節、地所番号不相記混雜之訳も有之候ニ付、片書大小区何番地、又者何番地借地之訳記載、差出候様可致事、右之趣、無遺漏可及布告候事、

七年八月七日
鹿兒島県庁

県下
戸長

36 当戌年中生死出入、一月より十二月迄月々取分ケ出入之訳、且養子

遺又縁与等之出入者、何大区何小区何番屋敷江取遣候訳巨細相記可
被申出候、右者当年中戸籍取調惣計いたし、差出候様庶務課より被
相達候間、無遺漏来ル廿日限可被申出候、依而致順達候ニ付無滞被
相廻、留より御返し可有之也、

但出入無之方者、本文ニ張紙を以、其訳可被申出候、

37 第四十五号

発砲取締之儀、兼而中渡置趣も有之候処、此比於諸所小鳥惣いたし
候者有之哉ニ相聞得、別而如何之至ニ候、右通諸所徘徊、猥ニ致発
砲候而者人民之障碍相成、万一も致輕我候儀共有之候而者、実以不
可然事候条、各区戸長注意稠敷取締可致候、此旨及布告候事、

戊十二月九日

鹿児島県庁

県下
戸長

38 高巻石式斗

国分上小川村

新江口門

右者、第一大区小一区士族藤田幸右衛門持高ニ而、名寄帳紛失之段
申出候ニ付、布告ニ基キ各区偏々探索を経、何分可申出事、

39

いろはにほへとちを

右、十二月廿五日

わかよたそつねなむうのくやまけふこえて

右、十二月廿六日

あさきゆめみしひもせず

右、十二月廿七日

諸人禄高所務米跡残手形、都而前紙日割之通可相渡候間、請取書持
来可有之事、

但五ツ時より七ツ時迄之間可相渡候、尤来ル廿六日休日無之事、

十二月廿日

出納課

40

一名寄帳取扱之儀者、以来新タニ高直シ名面替願出候者ハ、先般致
布達候通可相心得、従前出納課より高直免許相成候分ハ、別段願
出ニ不及、

一宮崎県江掛持之高、当県管轄高同様売買差許候条、高直シ等係り
同様可相心得事、

一従前屢石を以相渡置候券書者都而引揚候条、租税課より可差出旨
相達置候処、名寄帳も可差出筋心得違候向も有之哉ニ付、右者券
書迄可差出儀与可相心得事、

右之通早々及布達候也、

戊十二月廿四日

鹿児島県庁

41 第二号

金巻円ニ付

丁錢拾貫文

右者、是迄金一円ニ付九六錢拾貳貫五百文相場を官庫入払等相成居
候処、太政官壬申十一月三百六拾三号を以御布告相成候通、今十日
より官庫入払等相替候間、此段致布達候也、

八年一月十日

鹿児島県庁

町区長庁下戸長

42 第三号

新紙幣製造ノ事業追々整頓候ニ付、太政官・民部省札并正金兌換証券、悉皆新紙幣ヲ以交換候ニ付、右三種ノ紙幣ハ本年五月三十一日限り通用令停止候条、各人民貢納金等ノ儀ハ、可成丈前三種ノ紙幣相用候様可致、此旨布告候事、

但交換手續等ハ追テ可布告候事、

明治八年一月十五日

太政大臣三条実美

別紙第三号之通交付相成候ニ付、及布告候也、

八年二月三日

鹿児島県庁

43

第二大区小一区士族鮫島幽洞ヨリ、馬捍風并驚風之薬家伝ニ而候処、此節為試三千貼丈戸長役所江差出置候ニ付、右病患之者ハ無代銀ニ而渡付相成度、左候而弥薬効相重、往々望之者同人方江調合致置候ニ付、一貼ニ付一錢ツ、売出方之願も申出令免許候条、望之向者戸長役所江申出、無遅滞様可相渡、此段及布告候也、

明治八年二月

鹿児島県令大山綱良

44

信州桑木白サシ苗売弘候ニ付、御布告之願意

一大桑四ツ目印壺本ニ付

代旧錢六百元ツ、

一九文龍壺本ニ付

代旧錢四百四拾八文ツ、

右者、此節御県租税課より御免許之上、苗元より取下シ置候間、

養蚕有志御望之御方江売弘度奉存候ニ付、近比御手数之程恐入奉存候得共、御県下区内江御布告被下候様、被仰達被下度奉敬願候也、

外ニ菊葉壺本ニ付

代旧錢貳百貳拾八文ツ、

右、大坂迄取下置候ニ付、御望之御方御座候ハ、至急取下シ中度御座候間、此段奉申上置候、

石燈爐通野元安右衛門所滞在

尾州住

亥二月

池田熊七郎印

別紙之通願出開届候条、相對買入不苦候事、

八年二月十九日

鹿児島県令大山綱良

町区長

庁下戸長

45

送第四百三十二号

其県貫属之内より、御親兵として去ル明治四年被召出候諸兵隊之内、同年二月七日より同四月十日迄之内、旧近衛兵解隊之節帰県致候伍長・兵卒、猶二ヶ年間之兵役ヲ帶候様相達置候処、本年二月八日ヲ期シ兵役差免候、此段相達候事、

明治八年一月二十五日

陸軍卿山県有朋

46

証券印税規則御発行ニ付、帳簿調査トシテ来ル八日下町、九日上町、十日西田町

区長役所江

印税掛官員出張候条、其区内人民帳簿之儀ハ、三町之内最寄便宜

之町ニ於テ調査を遂候条、於規則面懇切ニ教諭を加へ、当日不都合無之様可致候、因テ心得方左ニ相違ス、

一証券印紙貼用之帳簿ハ、前条日割之当日午前第九時より正午十二時迄之間、人々便宜之町区^(戸カ)長役所江持参、調査を可受候

一他管之者、寄留或ハ一時滞在之者共、当地ニ於テ調査を相受度候ハ、右同断調査を可受候事、

一帳簿持参之儀、戸主旅行或ハ病氣其他事故有之者ハ、代人差出候共不苦候事、

右之通区内無遺漏可相違候事、

八年二月三日 鹿児島県令大山綱良

47 第二十一号

町区長

庁下戸長

管下市街沽券税地地券書替之分、券面代価ニ不拘、券状壹枚ニ付五錢ツ、收入可致旨、甲戌五月第二十九号を以相達置候得共、右者繼目家督并水火盜難より書替之分ニ相限儀ニ付、右布告者取消候条、諸人売買券状書替之節者、券面代価ニ応し前紙定額之通上納可致候、此旨更ニ布告候事、

但是迄地価十円以上ニ付印税五分ツ、收入之分者、地価ニ応し相当之印税進納可有之候、

明治八年四月十日 鹿児島県令大山綱良

48 無税地規則二十二ヶ条之内

第三条

地価ハ新規并書替共券状相渡候節、左之印税納ムベキ事、

印税

地価百円以下千分之五 即十円ニ付五錢

同 百円以上二百円迄 五十錢

二百円以上五百円迄 一円

五百円以上千円迄 一円二十五錢

千円以上二千円迄 一円五十錢

三千円以上五千円迄 二円五十錢

五千円以上一万円迄 三千七十五錢

一万元以上 五円

49 第十八号

庁下戸長

新旧公債証書売買等ニ付、名面替之儀者規則も有之事候処、当県之儀ハ東京隣県ニ難準、往復旁日込相成候儀ニ候条、規則通名面替差^(立脱カ)許相成候而者、右利払勘定表面者勿論、諸帖簿取仕方并御下渡之利足金員取調方等大ニ混雜ニ及、右之手続期限通難相運候ニ付、毎年六月・十二月渡分之利賦金払済之上者、四月十日并十月十日限りニ名面替之願書差出候様、適宜を以相究置候条、此旨布告ニ及候事、

明治八年三月十八日 鹿児島県令大山綱良

50 第拾九号

戸長江

今般医院ニ於て、更ニ種痘課を建設候ニ付、従来之種痘会社令停止候、就而者昨年十月文部省より布達之旨ニ照準シ、種痘掛之医院江免許

狀相渡シ、自今一層精意を加へ種痘為致、流行之患痘予防之趣意ニ候条、各区正副戸長篤与此旨体シ、区内出生後七十日以上之者^者無遺漏取調、種痘江可差出比段相達候、極貧者江^者無謝料候種痘ニ為致候条、右体之者^者戸長より添翰以前可差出候事、庁下并各郷、以来免許狀所持無之者ハ施術令禁止候、

鹿児島県令大山綱良

51

第貳拾貳号

平民苗字被差許候旨、明治三年九月布告候处、自今必苗字相唱可申、尤祖先以来苗字不分明ノ向ハ、新ニ苗字ヲ設候様可致、此旨布告候事、

明治八年二月十三日

太政大臣三条実美

町区長

庁下戸長

別紙太政官第貳拾貳号之通御達相成候条、此旨及布告候也、

明治八年三月九日

鹿児島県令大山綱良

52

町区長

庁下戸長

今般医院内ニ仮救療所建設イタシ、極貧ニシテ難病ニ羅レル者、拾名ヲ限リ入室差許候条、救療相受度者^者別紙雛形ニ基キ入院可致候、此旨及布告候也、

令代理鹿児島県権参事

八年六月十二日

田畑常秋

53

町区長
戸長

旧藩札、第五国立銀行ニおひて交換施行之儀^者先般相達置通候处、追々卒業之場ニ立至リ候ニ付、旧藩札持合之者ハ来ル七月廿日限交換可致候、此旨及布達候事、

令代理鹿児島県権参事

明治八年六月十五日

田畑常秋

54

第九十号

本年一月第三号ヲ以、太政官・民部省札并正札兌換証券、悉皆新紙幣ヲ以交換ニ付、右三種ノ紙幣ハ本年五月三十一日限通用停止之旨布告候处、右期限差迫民間多少之困雜も有之、随而一般之融通差支候様ニ相聞得候間、太政官・民部省札之内尙而以下之分ニ限り、本年六月一日ヨリ来ル明治九年五月三十一日迄通用期限差延候条、此旨布告候事、

明治八年五月廿四日

太政大臣三条実美

第三十四号

町区長

庁下戸長

別紙太政官九十号ヲ以御布告相成候ニ付、布達候事、

明治八年六月七日

鹿児島県権参事 田畑常秋

55

庁下戸長

一士族禄高致買売候者^者、其時ニ高直可願者勿論之事候得共、以来必八月迄者屹与高値可願出候、無左候而者所務米手形渡方ニ付差

支之訳有之候間、聊等閑之儀有之間敷候、此旨及布告候事、

令代理鹿兒島県権参事

明治八年七月廿日

田畑常秋

56
イロ ハニ ホヘト チラワ カ ヨタ ソツ ネナム ウクノ
二日 三日 四日 五日 七日 八日 九日 十日 十二日
ヤマ ケフ コエテ アサ キユメ ミシヒ モセス
十三日 十四日 十五日 十七日 十八日 十九日 廿日 廿二日
右、手形渡日

家祿・賞典其外米払手形、いろは分を以隔月ニ渡日中渡置候処、至
此比渡日相過請取ニ米候者不少、御用取扱妨相成候条、日限通屹与
可相請取候、若日限相過候者、其月廿三日より先可相渡候間、聊
心得違無之様区内江布達可有之、尚又為心得渡日相添此段相達候事、

亥九月三日

出納課

57

三町区長
序下戸長

別紙太政官第百三拾八号之通公布相成候条、此旨可及布告候事、

八年九月廿七日

鹿兒島県令大山綱良

58

本年地租半額上納致シ候様租税課ヨリ被相達候間、近日中取揃方と
して可差廻候間、左様御心得可給候、地租代金并御名前等相記相渡
可給候、此旨前広致順達置候、無滞被相廻留より御返シ可有之也、
但代金当春上納通御座候、

十月十三日

高山一郎

59

三町区長

序下戸長

管下之土民、他府県江墓参其外諸用向ニ付、他出願出候者近来許多
有之、其中期限相過候而も不罷帰、殊ニ無益ニ所々流寓、費用等ニ
迫り恥辱ニ陥り候者等有之、甚以不可然次第二付、以来父兄伯叔又
ハ親族等之内より引請而致世話候者有之者^(之カ)外許可不致候条、願書
江右引請人連名致証印可差出候、左候而致帰県候節者早速其届可申出、
若期限通帰県難致事故到来、又ハ任職等拜命候節者、形行早々可届
越候、尤区戸長厚注意取扱可致候、此旨布告候事、

明治八年九月廿七日

鹿兒島県令大山綱良

60

第一大区
第二大区
第三大区
各小区戸長江

本年三月牛馬売買規則布達致置候処、今度別紙之通公布相成候ニ付、
自今税納之儀者、毎年一月・七月両度ニ半額ツ、上納可致候、尤其
節銘々鑑札持参可受検査候、此旨牛馬売人ハ勿論、各区無遺漏告示
可致候也、

乙亥十月四日

鹿兒島県令大山綱良

(別紙)

第百拾五号

明治五年十一月第三百三拾号布告牛馬売買規則中、第四条但書左ノ
通改正候条、明治九年ヨリ施行可致、此旨布告候事、
明治八年七月七日

太政大臣三条実美

牛馬売買規則

第四条

一 免許鑑札^{云々}

但右税金ハ毎年二月・八月兩度ニ半額宛、各管庁へ取立租税寮
へ上納可致、尤新規免許ノ者ハ、其都度半額直ニ取立上納可
致候事、

61

県下戸長江

家禄・賞典米其外形、十一月渡皆済之半米者十二月、十二月渡同
断半米者一月、別紙日割通可払渡候条、請取書持參可相請取旨、区
内江無洩様布告可有之事、

十月廿八日

出納課印

イロハ	ニホヘトナリヲ	ワカヨタ
右十一月五日	右十一月七日	右十一月八日
ソツネナムウノ	クヤマケフコエテ	アサキユメミ
右十一月九日	右十一月十日	右十一月十二日
シヒモセス		
右十一月十三日		

62

別紙教部省ヨリ公布相成候条、此旨及布告候事、

明治八年十月十七日

鹿兒島県令大山綱良

63

三町区長

庁下戸長

大門口料理屋辺狹隘之巷々江人力車引入候テハ、人民往来之妨害ニ
相成候条、今般右巷々江標札相揚、人力車引入候儀令禁止候、此旨
相達候事、

但車夫等之禁ヲ犯ス者者、違式条例ニ照シ罰金収納可申付事、

八年十月廿一日

鹿兒島県令大山綱良

64

家禄米引当^(金)三付金穀貸借之訴訟受理不致法則^(三)而、私用物同様^(典)典売
不相成儀候得共、内情融通之為債主負債主熟談之上、苦情無^(三)之様引
結可致之処、即今家禄米を以二重三重借財之引当^(三)致シ、終^(三)ニ庁詔
課江訴出シ、罪科^(三)ニ陷者不少候ニ付、已米ハ家禄主借金利子等之方
へ渡米を以可入付約定致候節者、米請取方之儀貸借人より双方戸長
連印を以出納課へ届申出候上、貸主方へ渡方可致候間、同引結^(三)而
借替等之節も前願同様届可申出、此段無遺漏及布告候事、

明治八年乙亥十二月十二日

鹿兒島県令大山綱良

庁下戸長中

65

第五十号

庁下戸長

当県士族家禄旧價之通売買之儀、別紙之通上申候処、今般朱書之通
指令相成候条、禄券引換之儀^(三)追而可相達候、此旨布告候事、

但元米家部ニ付六石又ハ四石及ヒ切米ト唱へ稟米渡ノ禄ハ、他県

一般ノ家禄ト同種ニ付、売買ハ素ヨリ禁止候事、

明治八年十二月八日

鹿兒島県令大山綱良

(別紙)

旧鹿兒島藩士族家禄ノ旧價之通券書ヲ以売買ノ伺

鹿兒島県并宮崎県管轄諸県郡内江有之候士族、旧高持ト称スル家禄
米之儀ハ、従来官ヨリ稟米ヲ以給与致、他県一般之家禄ト大ニ異リ
候、元米鹿兒島藩ノ田制ヲ定ムルヤ、公田アリ、士族高地アリ、所
謂高地トハ、旧城下ヨリ各郡郷ニ至ルマテ、其土着ノ士族ハ百年前

租米^(米)以來、荒蕪又ハ不毛ノ棄地ヲ開墾耕種シタル土田ニシテ、士族互ニ売買ヲ許シ、官ヨリ知行高名寄帳ト号スル券書ヲ交付シ、売買スル時ハ官ニ請テ署名ヲ改テ受授セシム、然レトモ地遠近アリ、遠キハ其士民ニ佃作セシメ、近キハ躬耕スルアリ、此乃チ士族私有ノ家産ニシテ、方今ノ所謂不動座是レナリ、旧米都テ持高ト称シ、近年ニ至リ或家禄トモ云フ、然ルニ藩政中廩米渡シ相成候得共、昔時他藩其君主ヨリ支給之家禄トハ其実大ニ差異アル、相比シテ論スヘカラス、所謂廩米トナル所以シノ者ハ、官ヨリ士族勢力ノ及ハサル所ニ保護ヲ加ヘ、耕種ノ時節及ヒ收穫ノ季限等ヲ公田ト齊ク督促シ、其納米ヲ暫ク官舎ニ入レ、随テ即チ士族ニ分賦ス、只士族ト士民トノ間ニ任セ置候テハ、耕種時ヲ失ヒ収納淹滞ノ患アリ、民動モスレハ目前ノ作得ヲ不覺私物ト看做シ、肆マ、ニ放食暖衣シテ納米ヲ費耗シ罪戾ニ陥ル、故ニ官庫ニ入ル、者ハ此患ヲ防ク者ナリ、故ニ名ハ廩米ト云モ是又尋常ノ廩米ニ非ス、然ルニ元米ノ種類右通異ナル故、是ヲ他県官給之家禄ト同一禁止スル時ハ、士族中忽チ活計ノ途ヲ失ヒ困却ニ及ヒ候ニ付、即今ニ至迄旧米ノ名寄帳ヲ以テ売買致シ米候間、将来売買旧慣ノ通御開届相成、更ニ別紙ノ通ノ券書ヲ以、各自所有ノ名寄帳ト交換致得ハ、士族中安堵可致候ニ付御許可相成度、然ルニ兼テ及御届置候禄高帳ト致相違候ニ付、壹ケ年間転換ノ差異年々十二月限り取調、翌年二月中可進達候、就テハ地券御規則ニ倣ヒ、券書壹枚ニ付印税金五錢ツ、取立、仕払書ヲ以テ可及御届候条、是又御開届相成度、此段上申候也、

但本文ニ相伺候従前持高ト称スル種類ノ外、元米家ニ付廩米ノ禄モ有之、右ハ他県一般之家禄ト同種ニ付、売買ハ素ヨリ禁止候、

宮崎県参事福山健偉

67

第三百二十七号
一時刻之儀、是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分ケ候処、今後改テ時辰儀時刻昼夜半分二十四時ニ定メ、子ノ刻ヨリ午刻迄ヲ十二時二分ケ午前幾時ト称シ、午刻ヨリ子ノ刻迄ヲ十二時三分ケ午後幾時ト称候事、
一時鐘之儀、来ル一月一日より右時刻ニ可致事、
但是迄時限儀時刻ヲ何字ト唱米候処、以後何時ト可称事、
明治五年壬申十一月九日

庁下并三町
戸長

66

明治八年六月廿九日
大藏卿大隈重信殿
鹿兒島県令大山綱良

第四号
三町区長
庁下戸長
時鐘之儀、別紙之通御布告相成居候処、官下人民時辰儀ニ慣習不致、俄ニ相改候而ハ却而時刻ヲ誤ルノ患有之ニ付猶予致候得共、当今ニ至リ人民時限儀ノ時刻熟知シ域^(之カ)ニ至候ニ付、御布告之通時鐘相改候条、此旨布告候事、
但本月廿日より相改候事、
明治九年二月九日
鹿兒島県令大山綱良

市街沽券税地更ニ丈量之儀、本年第三拾九号を以布達候ニ付而ハ、丈量方法左之通可相心得、此旨相達候事、

明治九年五月廿九日 鹿兒島県令大山綱良

本年改正事務局別報達、市街地税改正調査法綱目中、土地丈量ノ法抄書

第一節、丈量ニ臨ミ家屋櫛比之地ニシテ、一宅ノ表裏奥行等屈曲アルモノハ、実規現歩数ヲ改ル事甚タ難シ、依テ初二該町ノ表通り・裏通り・横町ノ四方ヲ綿密ニ丈量シテ総坪数ヲ算定シ、然ル後一宅毎ニ丈量ヲナシ其坪数ヲ通計シテ、初メニ算定セシ総坪数ニ照シ、差異サキヲ要ス可キモノトス、

第二節、宅地一区内ニ籠ル田畑ハ区別ニ及ハス、宅地ヲ以テ丈量スヘキモノトス、

第三節、市街地内ニ籠リ宅地ト別区域ヲナセル田畑林等ハ、郡村耕
地ニ準シテ丈量ス可キモノトス、

68 先度 松原神社災有之、此節御造立ニ付献金之御志有之方ハ、戸長役所江姓名相記被差出候ハ、外々一緒ニ可相納候間、此旨致順達候也、

六月 高山一郎

69 第四拾一号

庁下戸長并

三町戸長

学令男女不就学之者有之候付而者不都合候条、満六年より十四年之者老務テ学ニ就カシメ候様注意イタシ、追々一般之教則ヲ以教導イ

タシ候様可取計、尤学令外之者ニ而正則懇望之者ハ入学不苦候、此旨相達候事、

但僻遠村落校之儀者此限ニアラス、

明治九年五月十五日 鹿兒島県令大山綱良

70 第五十二号

庁下并三町

戸長

開拓願之儀者、本年四月廿五日限可差出旨相達置候処、今般更ニ詮儀之次第有之、検査トシテ官員派出為致候条、開拓冀望之者老派出迄之間願書差出不苦候条、此旨布達候事、

明治九年六月十五日 鹿兒島県令大山綱良

71

庁下并

三町戸長

近年市中ニ於テ石炭油売買ニ付、商人トモ火用心疎漏ノ取扱有之哉ニ相聞得、該油ノ儀ハ火勢最モ猛烈ノ者ニテ、疎漏ノ取扱ヨリ失火ニ及候不少候ニ付、以来該油ノ儀ハ午後日没ヲ限リ売買可致、此旨布告候事、

明治九年七月廿八日 鹿兒島県令大山綱良

72 第六十八号

(庁カ)
県下并三町

近在掛戸長

管下沽券税宅地之儀者、旧無税屋敷之分施行相成候ニ付、郡村地之

内各所ニ星散独立いたし居候も不勘、殊ニ市街・郡村之区界断然無之、今般地租改正調査ニ差支候ニ付、更ニ県下上町・下町・西田町ノ三町ヲ以市街トシ、右市街・郡村ノ境界ハ、官員実地検査之上実況ヲ以相定メ、其地士民屋敷之儀ハ旧沽券税地タリトモ、都而郡村宅地ニ取納申付候、

但市街沽券百分一税地之儀も、地租改正成功ノ上ハ、地価百分ノ三税ニ更正之筈候、

庁下并

三町戸長

自今医師施治ノ患者死亡致候節ハ、五日ヲ限リ左ノ書式ニ照準シ、正副二通ツ、相認メ、区戸長ヲ經テ遺漏ナク可届出、為中途医師ヲ替候事有之候ハ、前医ハ初発ヨリ手掛病状書ヲ後医ニ渡スベク、後医ハ之ヲ受取リ死亡届書ニ添テ可差出、死亡届書ニ此病状書ヲ渡スコトヲ肯ンセサル節ハ、其訳ヲ死亡届書江奥書可致候、将又数名之医師合流ニ係ル分ハ、一紙連名ニテ死者住所ノ区戸長ヲ經テ可届出、区戸長ニ於テハ之ヲ受取置、一ヶ月分宛取纏メ、翌月十日限リ其地差立第一課江可差出、此旨医師ヘモ遺漏ナク可相達候事、
但書中江經過之日数及ヒ死スル所以ノ原由^{虚脱・痙攣・空}等ノ儀ハ、何程細ニ涉候共不苦候事、
明治九年七月八日

鹿児島県令大山綱良

書式

死亡届

鹿児島県第何大区何小区何村町

病名 何業 何職

何某父母兄妻子

姓名

年号月日死

何年何ヶ月

右者私施治ノ患者ニ候処死去候間、此段御届申上候也、

鹿児島県第何大区何小区何村何番

地屋敷士族平民

姓名印

医師

県大小区内同上

姓名印

鹿児島県令大山綱良殿

74 一家督

但壬申年以来改名并死去亦者嫡子二男三男等へ家督之訳、尤賞典八石以下、家禄六石以下、四等兵士禄給与相成候訳、

一二三男ニ而賞典米并四等兵士禄給与相成候分、壬申以来致改名候者ハ其訳、

一二三男ニ而他家へ養子相成、家禄并賞典亦者四等兵士禄給与之者ハ其訳、

但壬申以来改名イタシ候者ハ其訳可申出、

一大小区片書之事

右之通大至急取調、来ル廿七日正午限無間違取調、第一課へ可差出事、

明治九年十月廿四日

参事田畑常秋

別紙之通被相達候間、明細書約日ヲ限り御遣可被成候、此旨致順達候、

高山一郎

75 庁下家禄所務米ノ儀、^{粟蕎麦}新穀ヲ以可相渡筈候得共、米月迄ハ收納不相成節季、旁差支面々モ可有之、因テハ即今古米御在合ニ付可相渡候間、右望ノ者ハ石高二応シ申受度、石数記載シ米月五日限当課江書面可差出候事、

但新穀手形ノ分ハ米月中可相渡候、
右、布告候事、

十一月二十四日

第六課

76 諸人禄高所務米当子秋渡方之内、一番手形拾表丈、別紙日割之通可相渡候間、請取書を以当課江出頭可相請取候、左候而現米払渡之儀ハ各郷より廻米未致充実候ニ付、米一月廿日より先可払出候条、此旨布告候事、

但別紙日限請取後レ候分者、米一月五日より先可相渡候、

子十二月十五日

第六課

三太区

戸長

所務米手形渡日

イロ子十二月廿日、ニホヘトチヲ右廿一日、カヨタ子十二月廿二日、ソツネナムウノ右同廿三日、クヤマケフ右同廿五日、コエテアサキユメ右同廿六日、ミシヒモセク右同廿七日旧附士、

77 近々当社江家禄六石抵当を代銀拝借差出筈候間、右を以差出候面々、米ル廿三日限当社江、何某江何出取替置候訳書面を以申出候様、至急御廻達給度御依頼申進候也、

十二月廿九日

承恵社

78 番外

管内家禄所務米ノ儀、本年マテハ従前ノ通現米ヲ以テ可相渡候得共、万一石代金ヲ以受取度希望ノ者ハ、大蔵省規則ニ因リ、米丑五月限地租取立決算済ノ上、同省ヨリ下金ノ順序ヲ経可相渡候条、右希望ノ者ハ米丑七月以降、米一石ニ付六円二拾錢二毛ヲ以テ可相渡ニ付、本月を限り第六課江可申出、此旨布達候事、

但元宮崎県内ハ此限ニ非ス、

鹿児島県令大山綱良代理

明治九年十二月六日

参事 田畑常秋

79 乙第七号

各区 正副区長

正副戸長

近在掛戸長

当明治九年ヲ以テ改租ノ期限被 仰出、当春米各村着手、追々丈量整頓相成候ニ付、米明治十年五月ニ至リ、管内一般当九年分貢租ヨリ新税更生可相成積候、当秋貢納ノ儀ハ仮ニ旧税額ヲ以テ可相納、左候ハ、過不足ノ儀ハ追而確定ノ上可相達候、
一風災ニヨリ検見願出候村々ノ儀モ、前条通本年ヨリ改租ノ積ニ付、従前通ノ検見ハ難致採用候得共、当秋仮納見込相付候為、官員派

出為致検査、右ノ趣意モ為相達候得共、万一従前検見下リノ様心得違候カモ難計候条、小前一同エ区戸長ヨリ能々可致示諭候、

右、相達候事、

但貢納日限并右ニ関候手續ハ、追々可相達候、

明治九年十一月十四日

80

記

一何等賞典何石

一家祿六石又ハ四石、三石六斗

但賞典計ニ而家祿無之向者其訳、家祿計ニ而賞典無之向も同断、

右之通相達無御座候也、

何大区何小区

士族 何の何かし

右、家督之者ニ限り候、被下方無之者ハ其訳、

右者祿税方御用ニ付、右案文之通取揃、当課江可差出候也、

丑一月七日

第六課

県下戸長

81

諸人祿高所務米二番手形、本月十五日より別紙日割之通可相渡候間、当課江出頭請取書引換手形可相請取候、万一日限通請取後候者ハ、本月廿二日以後可相渡候条、布告候事、

一月八日

第六課

三大区戸長

手形渡日

イハ右一月十五日、ニホヘトチヲワ右一月十六日、カヨタ右一月十

82

甲第 号

七日、ソツネナムウノ右一月十八日、クヤマケフ右一月十九日、コエテアサキユメ右一月廿日、ミシヒモセス旧附士迄右一月廿一日、

本年ヨリ金祿公債証書ヲ以テ一時ニ下賜候ニ付テハ、今般更ニ持高取納整頓之上、大蔵省江申牒可致ニ付、将来高売買致シ候向ハ、本日廿日より二月廿八日迄高直シ可願出、二月中相過キ候テハ取納ノ際限無之、不都合不少候条高直一切不聞届、尤モ公債証書御下渡ノ上ハ成規ノ処分可致候、此旨布達候事、

但各郷ノ儀ハ、別紙雛形ニ照準シ可願出候、

明治十年一月十日

鹿児島県令大山綱良

(別紙雛形)

高直願

何方郷

高何石

何方村何門

大浮免

自作地

余地

右者、何某方ヨリ右高讓請之内約仕候間、高直御免被仰付被下度奉願候也、

何大区何小区

何方士族

讓渡

年号月日

何野何某印

片書同上

讓請

何野何某印

戸長 何野何某印

鹿兒島県令大山綱良

83 今般西郷隆盛等出京ニ付隨行面々、別紙雛形ニ基キ、庁下ハ米ル廿

八日限、各郷者米月十日限、各区戸長より無遺漏取纏可申出候、此
旨相達候事、

明治十年二月十九日

鹿兒島県令大山綱良

雛形

鹿兒島県下第何大区何小区

何番地何方

士族又ハ平民何某嫡子又ハ何男

何 誰

年何才

右者、此際何番大隊何番小隊何々、又ハ何隊夫卒ニテ出京仕候、此
段御届申上候也、

第何大区何小区何方

士族何々親類又ハ何々

何ノ誰

戸長 何ノ誰

年号月日

鹿兒島県庁

鹿
児
島
県
布
達

明治五年六月より六年十二月に至る

鹿兒島県達令
壬申六月ヨリ
癸酉十二月迄

84 御巡行迄之間休日無之候条、及布告候也、

壬申六月

鹿兒島県庁

85 兵学寮之事

県庁支配所卜唱相替候事、

壬申六月

県庁

86 田之浦陶器会社

右之通相立候事、

壬申六月

県庁

87 従来通、称・名乗両様相用米候輩、自今一名タルヘキ事、

壬申五月

太政官

右之通被 仰渡候条、此旨可及布告也、

壬申六月

県庁

88 一諸官之面々朝七字出庁、昼十一字退出、

一朝四ノ鐘、是迄三分間ニ打候得共、明廿日より外時鐘同様たるヘ
キ事、

右之通相定候条、致布告候事、

六月十九日

県庁

89 土族等改称願之節、以来其区内戸長江相付可願出旨、可及布告事、

六月

県庁

90

鹿兒島県
都城県
美々津県

大隅始羅郡・菱刈郡・桑原郡之内、日向国諸県郡之内、中立之通管
轄替被 仰付候条、受取渡可致事、

但地所受取渡相済候上者、高反別一村限至急取調、太蔵省江可差
出事、

壬申五月十九日

鹿兒島県

高三拾貳万石余

右之外

隅州始羅郡一円

高四万貳千八百八拾九石貳斗五升九合貳夕三才

隅州菱刈郡一円

高壹万七千百貳石九斗五升七合三夕

隅州桑原郡之内

栗野・横川両郷

高壹万貳千四百貳拾石四斗八升七合七夕貳才

右三行鹿兒島県江

合高三拾九万式千四百石余

都城県

高四拾三万石余

内高七万式千四百式拾石七斗四合式夕五才

但前件始羅・菱刈両郷并栗野・横川両郷惣高

右鹿児島県江被召付度、

外ニ日州諸県郡之内須木・野尻両郷并小林之内東方村[▽]_△

高六千百式拾九石六升式合八夕七才

右美々津県より都城県江被召付度、

差引

合高三拾六万三千七百石余

右者、今般県治御治定ニ付、薩隅日分割各被置新県、絵図并高割被相定、被仰渡趣承知仕篤与涉評議候処、旧鹿児島藩管内之儀者数百年一国同前ニ而、国郡之境古来相定居候得共、専人民之聚合・土地之広狭・往来之遠近ニ依リ、両国両郡ニ跨り一郷一村を為し居候も有之、且高山・大川不少候得共、第一地形ニ依り人馬運送いたし、旧来海陸之便利与違ひ年貢收納等も運輸仕来候付而者、尔来も新置之県下江人馬之往来・海陸之遠近旁便利を主とし、次ニ者高山等を以境界被定置候者、永年ニ至り人民之苦情も有之間敷評議仕、鹿児島・都城両県増減之高并美々津県所轄地相減、右之通相及境立、別紙絵図面色分ケいたし差上申候、就而者高割少々不同有之平等者不仕候得共、何分民苦難被捨置御座候間旁御憐察被下、何卒右之通境被定置度奉存候、此旨宜御執奏被下候様奉冀候、以上、

都城県参事 桂 久武

壬申正月

鹿児島県参事大山綱良

史館
御中

別紙之通願立相成候処、願之通管轄替被仰付候条、布告ニ及候也、

壬申六月

県庁

91 今日 勅使正二位醍醐侍従番長ヲ以テ、別紙 宣命并金幣ヲ靖献神

社江下賜候条、及布告候事、

壬申六月廿三日

県庁

92 汝等曩ニ乾綱ノ不振皇威ノ不宣ヲ憂ヘ、竭力尽忠国家ノ為ニ死ヲ致ス、今西巡追感殊ニ深シ、仍テ侍従番長正二位醍醐忠順ヲ遣シ、汝

等ノ墓ヲ弔シ且金幣ヲ賜フ、宣、

明治五年 壬申六月廿三日

93 他県旅人入来候節者、船路者船改所、陸地者警固方、諸郷者其所之

戸長より通行印鑑見届之上、旅宿且通行可差免候、万一無印鑑之者早速可差返候条、聊不締之儀有之間敷候、此旨申渡候也、

但都城県之儀者不及其儀候、左候而毎月末県下者県庁江、諸郷者

郡治所江可届出事、

六月

県庁

94 指宿郡治所之儀、以来山川江相立、郡長初可為在勤事、

七月

県庁

95 人別方令廃止候事、

七月

県庁

96 第何区何番小区之事

第何大区小何区

右之通区名相改候条、及布告候也、

七月

県庁

97 近衛兵隊之内、親病氣等ニ而看病御暇之願追々申出、是迄免除せしめ候得共、以来容易ニ採用不相成旨、此節東京より申来候間、人々篤と可相心得候、此旨一同江可及布告候也、

七月

県庁

98 来ル七月朔日より、北海道後志・胆振両国御地を除ク之外、国内一般諸街道脇往還共、県庁有之地者勿論港津方駅等、公私之要事繁多之地者総而、其地之模様ニ寄り毎日或ハ隔日、或ハ毎月五六度宛往復之郵便相開、右往還筋近傍之市在江も夫々往復相成候条、従前之規則相心得、信書等各地郵便役所及ひ郵便取扱所等江可差出事、

壬申六月十七日

太政官

右之通 御布告相成、当県下者下大黒町篠原次右衛門所江郵便取扱所取建相成居、毎月六度宛郵便行李往復之賦候付、信書等諸方江差出度面々者、於同所尚亦規則等可承合事、

壬申七月

県庁

99 自今僧侶、肉食・妻帯・蓄髪等可為勝手事、

但法用之外ハ、人民一般之服ヲ着用不苦候事、

壬申四月廿五日

太政官

外三通略ス、

別紙四通之通被仰越候条、此旨及布告候也、

壬申五月十八日

庶務課

100 先度検地ニ付、借地余地又者居形屋敷申請等、夫々区別を以直成被定置候得共、当時米価下直相成上納方難渋差見得候間、其節究而直成より半方ニ相究、村方ニおゐても迷惑無之賦ニ付、余地申請直成尅畦五拾貫文、居形屋敷者尅畦廿五貫文ツ、ニ而、当中十月限諸財藏江上納申付候条、更ニ及布告候也、

壬申八月

県庁

101 旧臘、元神祇省ヨリ相達候皇太神宮大麻、此節神宮司庁ヨリ諸府県江頒布可致処、右者諸社配札同様之儀ニ無之、海内一般之人民江例年拝受可為致御趣意ニ付、頒布之儀者各地方於テ適宜之方法設、人民競而拝受尊信候様可取計、此旨為心得相達候事、

壬申六月

教部省

右之通被 仰出候処、大麻相達候間、各区内戸数ニ応し可相渡候付、拝受致度人江者戸長宅ニ於テ、致分配候様可取計也、

但諸郷之儀者、郡治所ニおゐて可相渡事、

八月

県庁

102 皮楮梢楮之事

右免本を廃シ、年々諸村三等里正と諸所紙漉人共江、会議相当之

直成を以究届、申出候上勝手売買、然者作人江も迷或不相成賦、勿論一廉之産種二候得者、楮相応之地江者植殖候様、里正注意可致事、

右之通可被仰付哉、致吟味候事、

申八月

租税課

右之通申付候条、此旨可布告候事、

八月

県庁

103 自今華士族子弟厄介之輩、平民籍江加入為致候義可為勝手事、

壬申四月

太政官

右之通從 朝廷被仰出候条、此旨及布告候也、

壬申五月

県庁

104 布告書之儀、至急之事件も不少二付而者、無滞可及通達者勿論之事候処、区内二依而者廻達不頓着召置候者も有之、御用及遲滞候段相

聞得不都合之至二候、以来右式之儀屹与無之様心を用、急速二可令順達候、向後等閑二召置候者も有之候ハ、不依誰人見聞次第可申出候、此旨一同江早々可及布告候事、

八月

県庁

105 新紙幣之内、拾円・五円・弍円之三種製造出来、当六月廿五日より

発行相成候条、三種見本相添此段相達候也、

壬申六月廿八日

正院

別紙之通被仰渡候条、此旨及布告候事、

八月

庶務課

106 一胡摩之事

右、穎娃表畠高之内胡摩上納之場所有之候得共、右上納追々難決之向相聞得候付粟二被振換度、左候而胡摩代不同二有之、并二三斗八升位も可相及候付、胡摩右之倍納被仰付度候、

一杓実之事

右、壹表三拾四斤入代米起引結被仰付置候得共、右者被召解、畠主勝手売二而畠高粟代銀納被仰付度候、

但桜島杓実之儀者是迄之通、

一荷子

一麻苧

一起炭

一薪

一櫪子

一諸役銀

一用夫銀

一用女銀

一棕呂銀

一櫪柑并橙・九年母

一狩夫銀

一真綿

右、免除被仰付度候、

右之通、是迄致上納米候得共、已米上納二不及免除被仰付可然、致吟味候也、

八月

租税課

右之通申付候条、可及布告候也、

壬申八月

県庁

107 正月三日 五月十五日 九月廿三日

右、靖献神社祭日二付休日二定置候条、及布告候事、

壬申九月

県庁

108 出水野間原其外辺路番所共此涯取除申付、番人茂廃止申付候事、

九月

県庁

109 諸人居屋敷并自作地町反定限も有之候処、今般 朝廷御布令ニ付更
ニ令廃止、居屋敷并自作地等勝手売買申付候条、追而地稅等之儀何
分可申達候、此旨及布告候也、

九月

県庁

110 琉球并諸島より積登候自物砂糖、国産会社江加入無之分者、以来
自他県売買勝手ニ令免許候事、

一 右同断禽獸類買入候儀、是亦不苦候事、

右、国産会社江相達、向々江も可及布告事、

九月

県庁

111 近在掛一等等三等里正之事

一 近在戸長

俸祿従前之通三級二分ツ、

郡長之事

一 大区戸長

副長并里正・副正之事、

一 大区副戸長

俸祿三級二分ツ、是迄副長・里正・副正祿制之通、

一 戸長是迄之通、

戸長副并助之事、

一 副戸長

郡長・里正之称呼相廃止候様被仰渡候付、右之通致改称候事、

但俸祿者従前之通可相心得候、

九月

県庁

112 糧餉方廃止ニ而、更ニ諸財藏与唱相替候事、

九月

県庁

113 戊辰以来重創之面々切断等いたし、又老疵口等再発之者老、療医診
察之上廢人被仰付、一世限り別段之御取扱も有之来候得共、今般大
藏省江人員御届相成、以来於当県定額外之儀者取扱不相成様、屹与
御達相成候間、此段為心得及布告候事、

九月

県庁

(コノ文書ハ一ノ文書ト同文ナリ)

114 県下士族屋敷又者借地屋敷等之儀、夫々地方之法則を以畦歩相究有
之候処、間ニ者勝手ニ四壁相替、畦歩取込メ候者も有之哉ニ相聞得、

甚不束之取計ニ候間、以来右様之節者当課江申出、見分之上通路筋
等差支於無之者自ら致免許、畦歩重等之取扱行届候様可取計事候付、
尔后屹与右様之儀無之様御布告相成度候也、

十月

租税課

右之通申付候条、可及布告候事、

十月

県庁

115 一米八石

但是迄六石被下置候得共、更ニ本行之通、

右、高式拾五石以下士族一家部分、

但式拾六石ニ不充ハ式拾五石ニ見込、

一米六石

但是迄定祿四石被下置候得共、更ニ本行通、

右、高式拾五石以下同断附土一家部分、

一米五石

右、卒一家部二付是迄三石六斗被下置候得共、更二本行通、

右者、廢藩置県以來百事變換、第一士民生活之處屢御布告も有之候得共、於当県者薩摩・大隅分県二相成全米穀不足、以來救助之道も尽果居候処、今般大蔵省官員実地取調之上、是迄取建米俵出米右之通定禄二願立永々下賜候条、此旨早々可致布告事、

但渡方之儀者追而可申渡候、

十月

県庁

116 近在五ヶ村土族屋敷、昨年檢地之節代銀上納申請二而、松下ヶ相違置候処、段々上納之儀二付難渋之者も可有之候間、追々一般之屋敷税御治定之筈候付、別段之吟味を以無代銀申請申付候条、早々可申渡事、

十月

県庁

117 朝廷御布令二付、他郷自作地売買無差支段者申渡置候通二候得共、自作地之内二名祖先之功勞其他由緒之訳も有之、数代持伝来候処、旧藩之御所置を以郷々江可売渡被仰渡、尤期限も差掛無據讓渡置候処、此節勝手売買被仰渡候付、由緒等有之面々より請返之及内談候得共、汲受薄キ向も有之哉二相聞得、右様格別由緒有之向江者、其子孫二成代リ不被忍之情実旁親味二汲取、程能逐熟談候儀当然可有之、就中売渡証文遺置候迄二而未代価不相受取向茂有之、是亦請返シ方ニ付過当之直成者勿論、色々中張り不差返者も有之由、別而不可然儀候間互ニ致熟談、相当治定相成候様可申諭旨、大区戸長江

被仰渡致吟味候也、

十月

租税課

別紙之通申付候条、可及布告也、

十月

県庁

118 桑苗

右者、蚕糸之儀日本製者西洋万国ニ秀、格別成宝品ニ而盛大可被相行与之趣追々御布告も有之、当県之儀分而手を被付、既ニ諸郷一統開立、就中県下土族卒其外ニも蚕養出精之面々数多罷成候得共、何分桑葉無多事充分ニ至兼由相聞得候付、望之者江者無代銀申請被仰付度、左候得者銘々所持之自作地者勿論居屋敷等江も植立、尚繁殖之時機可罷成候、尤望之者名前・本数書付申出候ハ、戸長方江取束、当日限当課江可差出旨御布告相成度儀与、養蚕養蚕公社江も致吟味、此段申出候也、

十月

租税課

右之通申付候条、可及布告候也、

十月

県庁

119 県下并諸郷土族世禄高、当秋より都而御蔵入之上、所務米渡之儀者先般御達通二而、世禄高五拾石以下者当年中皆目御払下二而、百五拾壹石より百石迄者当年中四分之三、三百壹石以上者三部式御払下ケ二而、残り四部一旦三部壹丈者来春米繰を以被相渡、尤当県之儀者田高之内赤物地有之、故現赤米上納被仰付来候付、右所務米渡方之儀、譬者拾石之前二而赤米五斗割込を以、式拾部壹現赤米を以被相渡候、尤諸郷之儀者一郷一円之手形二而、前文之割合を以被相渡

候付、大区長方より取しらへ、当課江中出候様可被仰渡哉与致吟味候事、

十月十八日

出納課

右之通申付候条、可及布告也、

十月

県庁

120 鹿児島士族世禄高、当秋より所務米渡方ニ付、赤米貳拾部一之割込

を以御下渡之筈候処、所務米現渡貳石以下払分之石数ニ者赤米割込
ニ不及、都而真米ニ而可被相渡哉与致吟味候事、

十月廿日

出納課

右之通申付候条、可及布告事、

十月

県庁

121 今般永々家禄治定相成候、以後貳拾五石以上持高壳払、高下り申出

候者候者、右八石之家禄不被成下候事、

十月

県庁

122 一旧諸局附属長

一一代卒

一代々卒格

右、旧藩政ニ而家格定米候得共、先般華士族平民与称呼御改定相
成候間、右之旧格致廃止候条、以来平民与可称事、

但給禄等被下米候者者、一代限従前之通被成下候事、

十月

県庁

123 兵器方廃止候条、可申渡事、

十月

県庁

124 諸郷土着卒之儀、其郷々士族与可称事、

十月

県庁

125 諸人願書類、以来目打豎紙ニ同案式通相認、差出候様可致候事、

但先度申渡置候通、三八ノ日ニ可差出候、

十月

県庁

126 此節附士・卒等士族与称候共、^(得脱カ)以来手伝等之勤方従前之通相勤不苦

候条、可申渡事、

壬申十一月

県庁

127 触役所廃止申付候事、

十一月

県庁

128 一十二月三日ヲ以明治六年一月一日被定候条、略ス、

129 一月一日

朝廷 江拝賀

判任官以下

任職之面々

鹿児島士族

右、県庁江相付申上候、

一旧知事公江御祝儀之儀、御在京付一統より惣代兩人を以御祝儀中
上之、

一久光公江

鹿兒島士族

右、家令江相付御祝儀中上之、

朝廷江拝賀

諸郷居住士族

右、郡役所江相付中上之、

一久光公江

諸郷居住士族

右、前条同断

一拝賀等之儀者、右之通十二月三日ニ可申上事、

但改服

以上

130

給地高之儀、是迄銘々直取納いたし来候処、先般禄高之儀蔵入ニ而
可相渡旨大蔵省御布告ニも相成、其外故障之廉も不少候付、当秋よ
り都而御蔵入被仰付、尤損之儀者差引正高を以所務米可被下儀ニも
可有之候得共、是迄出米等多年いたし来候訳も有之候付、田畠現損
之無差別、高頭ニ応し三斗六合代ヲ以被成下度候、

外略ス

右者、此節給地高御蔵入被仰付候ニ付而者、取納振之儀右之通御
布告相成度致吟味候也、

申八月八日

右之通申付候条、可及布告事、

▽
租税課

壬申八月

県庁

131

旧廃官之面々、西三月迄御養料四石ツ、被成下候段被仰渡置候
得共、来ル亥三月迄之通可被下置哉、

一御一新後廢官之面々、勤役中俸禄之通被下置候得共、旧廃官被下
向々不并ニ付、旧官ニ不係惣而四石ツ、亥三月迄期限を以可
被下置哉、

一以前廢官之面々、五拾石以上之者江者御養料不被下置候間、右御
一新後之廢官人数之儀も、同様不被成下筋可被仰付哉、

二月廿七日

出納課

別紙吟味之通致治定置候条、此旨及布告候也、

二月廿八日

県庁

132

人力車之儀、諸人為便宜追々相開、殊之外車数相殖、間ニ者夜中無
挑灯又者不相当之賃錢等貰受候者も有之由、旁不締之廉も不少候付、
以来運送会社支配申付候条、諸事於会社商議を尽シ、聊不締之儀無
之様可致候、左候而車庫等取設度者者、同会社江相付可願出事、

明治六年
二月廿七日

県庁

133

此節人力車之儀会社支配申付候付而者、至当之租納取建、月々租税
課江届可申出事、

明治六年
二月廿七日

県庁

134

旧藩札価位比較表、別紙之通被仰渡、左候而明後九日大蔵省官員
差入、善く致通融候椿幣者引替相成候由、右比較表ニ基、当時大

坂相場二準、左之通可被召替哉、

一金壹両 代価拾貳貫五百文

一天保壹枚 同 百文

一銅錢壹枚 同 拾貳文

一四文錢壹枚 同 貳拾四文

一文久錢壹枚 同 拾八文

右之通可被相究哉、就而者諸人賃借并諸色売買向取扱左之通、

一諸人賃借者、錢壹万貫文之處ニ金札三百両、千貫文之前ニ金札三

拾両、右之割を以諸証文都而改替且取引候様可被仰付哉、

一諸色売買直段者、金価引合不拘都而當時之直段ニ、三部一之割を

以致売買候様、譬者拾貫文之所ニ候得者、三貫三百三拾貳文ツ、

ニ割下ケ致売買候様可被仰付哉、

一大工日用其外諸職人又者駄賃船賃等、前条三部一ニ割下ケ当然之

事候得共、専米直成を以賃錢等請取候事故於向々取調、早々申出

候様被仰渡候、

一米直段之儀者日々昇降之品ニ付、右者金価之割を以直建致売買候

様可被仰渡哉、

右之通、今日より直成可被召替哉、致吟味候事、

三月七日 出納課

右之通申付候条、及布告候也、

三月七日 県庁

135 夫壹人

右者当県内人馬賃錢、壹里五百拾貳文ツ、払渡米候得共、錢相場替

二付而者、壹里貳百五十文ツ、払渡候様被仰渡吟味候也、

三月八日 出納課

右之通申付候条、及布告候也、

明治六年 三月八日 県庁

136 一真米壹石先 代銀四百拾八匁

一赤米壹石先 代銀貳百七拾八匁

一大豆壹石先 代銀四百九拾壹匁

一粟壹石先 代銀百三拾目壹歩五リ

右、此節金錢相場相替候付、立直成右通被相替度致吟味候也、

三月九日 租税課

右之通申付候条、此旨及布告候也、

三月九日 県庁

137 諸人并市中諸取引之儀者、旧十二月迄者旧曆を以引結取扱候様被仰

渡置候得共、右者旧十二月迄之事ニ而、其後者新曆を以諸事取扱当

然之事候処、間ニ者心得違之向も有之哉ニ相聞得候間、已後新曆を

以一統引結可取計旨、被仰渡候事、

三月十三日 出納課

右之通申付候条、此旨及布告候也、

三月十三日 県庁

138 金壹両 拾貳貫五百文

銅錢壹枚 拾貳文

十円 九六ニシテ 代価百貳拾五貫文

五円 同 代価六拾貳貫五百文

貳円 同 代価貳拾五貫文
 壹円 同 代価拾貳貫五百文
 半円 同 代価六貫貳百四拾八文
 二十錢 同 貳貫五百文
 壹貫文札 拾匁札 押印三錢貳厘 調錢 九六代価四百文
 壹朱札 同 貳錢 同 同 貳百四拾八文
 五匁札 同 壹錢六厘 同 同 貳百文
 百文札 壹匁札 同 三厘 同 同 六拾六文
 四十八文札 同 貳厘 同 同 貳拾四文
 右、県内金一円代価拾貳貫五百文被相究候付、拾円より旧藩札押印
 四拾八文札迄割合算計建、

139 金壹匁

錢ニシテ拾貳貫五百文 内百文切賃
 右、天下一般兩替二付而者切賃差出候儀通例御座候間、県下金相場
 腰書之通相改候付、兩替相談いたし候者江若右通相請取候様、諸品
 売買之儀者此例ニあらず、右之通被仰渡度致吟味候也、
 三月廿五日 出納課
 右之通申付候条、此旨及布告候也、
 三月廿五日 県庁

140 別紙之通被仰渡候条、此旨及布告候也、

明治六年 二月廿七日 県庁
 (別紙)
 壬申十二月朔日 御布告書

今般全国募兵之儀、別紙詔書之通被 仰出、徴兵令被相定候条、各
 御趣意ヲ奉戴シ、末々ニ至迄不洩様布達可致、総シテ細大ノ事件ハ
 陸軍海軍両省ヘ打合可申、此旨相達候事、
 但徴兵令及徴募期限ハ追テ可相達事、

詔書写

朕惟ルニ、古昔郡県ノ制、全国ノ丁壯ヲ募リ軍団ヲ設ケ、以テ国家
 ヲ保護ス、固ヨリ兵農ノ分ナシ、中世以降兵權武門ニ帰シ、兵農始
 テ分レ、遂ニ封建ノ治ヲ成ス、戊辰ノ一新ハ実ニ千有余年ノ一大変
 革ナリ、此際ニ当リ、海陸兵制モ亦時ニ從ヒ、宜ヲ制セサルヘカラ
 ス、今本邦古昔ノ制ニ基キ、海外各国ノ式ヲ斟酌シ、全国募兵ノ法
 ヲ設ケ、国家保護ノ基ヲ立ント欲ス、汝百官有司、厚ク朕カ意ヲ体
 シ、普ク之ヲ全国ニ告諭セヨ、

徴兵告諭

我朝上古ノ制、海内拳テ兵ナラサルハナシ、有事ノ日 天子之カ元
 帥トナリ、丁壯兵役ニ堪ユル者ヲ募リ、以テ不服ヲ征ス、役ヲ解キ
 家ニ帰レハ、農タリ、工タリ、又商賈タリ、固ヨリ後世ノ双刀ヲ帶
 ヒ、武士ト称シ、抗顔坐食シ、甚シキニ至テハ人ヲ殺シ、官其罪ヲ
 問ハサル者ノ如キニ非ス、抑 神武天皇、珍彦ヲ以テ葛城ノ国造ト
 ナセシヨリ、尔後軍団ヲ設ケ、衛士・防人ノ制ヲ定メ、神亀・天平
 ノ際ニ至リ、六府二鎮ノ設ケ始テ備ル、保元・平治以後朝綱頽弛、
 兵權終ニ武門ノ手ニ墜チ、国ハ封建ノ勢ヲ為シ、人ハ兵農ノ別ヲ為
 ス、降テ後世ニ至リ、名分全ク泯没シ、其弊勝テ言フ可カラス、然
 ルニ太政維新列藩版図ヲ奉還シ、辛未ノ歳ニ及ヒ遠ク郡県ノ古ニ復
 ス、世襲坐食ノ士ハ其禄ヲ減シ、刀劍ヲ脱スルヲ許シ、四民漸ク自
 由ノ權ヲ得セシメントス、是レ上下ヲ平均シ、人權ヲ齊ニスル道

ニシテ、則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ、是ニ於テ士ハ従前ノ士ニ非ス、民ハ従前ノ民ニアラス、均シク 皇国一般ノ民ニシテ、国ニ報スルノ道モ固ヨリ其別ナカルヘシ、凡ソ天地ノ間一事一物トシテ税アラサルハナシ、以テ国用ニ充ツ、然ラハ則チ人タルモノ、固ヨリ心力ヲ尽シ国ニ報セサルヘカラス、西人ノヲ称シテ血税ト云フ、其生血ヲ以テ国ニ報スルノ謂ナリ、且ツ国家ニ災害アレハ、人々其災害ノ一分ヲ受サルヲ得ス、是故ニ人々心力ヲ尽シ国家ノ災害ヲ防クハ、則チ自己ノ災害ヲ防ク基タルヲ知ルヘシ、苟モ国アレハ即チ兵備アリ、兵備アレハ則チ人々其役ニ就カサルヲ得ス、是ニ由テ之ヲ觀レハ、民兵ノ法タル固ヨリ天然ノ理ニシテ、偶然作意ノ法ニ非ス、然而シテ其制ノ如キハ、古今ヲ斟酌シ、時ト宜ヲ制セサルヘカラス、西洋諸国數百年來研究実践、以テ兵制ヲ定ム、故ヲ以テ其法極メテ精密ナリ、然レトモ政体・地理ノ異ナル、悉ク之ヲ用フ可カラス、故ニ今其長スル所ヲ取り、古昔ノ軍制ヲ補ヒ、海陸二軍ヲ備ヘ、全国四民男兒二十歳ニ至ル者ハ尽ク兵籍ニ編入シ、以テ緩急ノ用ニ備フヘシ、郷長・里正厚ク此御趣意ヲ奉シ、徴兵令ニ依リ民庶ヲ説諭シ、国家保護ノ大本ヲ知ラシムヘキモノ也、

明治五年 壬申十一月廿八日

141 此節大藏省官員巡回、旧藩紙札交換押印相済候付、此已後大藏省押印無之紙札者通用令停止候条、県内中聊心得違有之間敷候、万一違背之輩於有之而者、屹与可及沙汰候、此旨無遺漏可致布告也、

明治六年五月十日

県庁庶務課

142 五月五日午前一時宮内省より失火、皇城一門焼失、聖上益御機

嫌能、赤坂離宮江御立退被為在候事、

第四十二号

皇城炎焼ニ付、赤坂離宮江御立退相成候条、此旨相達候事、

明治六年五月五日

太政大臣三条実美

第四十三号

太政官庁炎焼ニ付、馬場先門ノ内元教部省を以官代ト被定候条、此旨相達候事、

明治六年五月五日

太政大臣三条実美

第四十四号

赤坂離宮を以、仮 皇居ト被定候事、

明治六年五月五日

太政大臣三条実美

別紙之廉者於当寮可及御達旨、史官より被達候条、此段及御達候也、

五月五日

前島駒通頭

右者、五月十七日到来ニ付、即日毎之通致布告候事、

明治六年五月五日

県庁

五月十九日

県庁

143

去月廿八日 御参内 天氣御伺、且一昨年 從二位被為蒙 宣下候 処、御病中ニ而 御拜命御猶予御願済相成居候処、右御請御札被為 済候、仍而 從二位様与奉称候様、此旨御問合中越候、以上、

五月九日

御分家 御家令

島津久邦

別紙之通相達候条、致布告候也

明治六年 五月廿二日

県庁庶務課

144 先般神職之輩江教導職被仰付候付、近日中松原神社其外所々ニおひて説教相開告候条、聴聞いたし度向者可致出席候、此段及布告候也、但日限之儀者追而可相達事、
明治六年五月廿七日 県庁

145

○庶務課
○租税課
○出納課

以来外国舟入港之節者、早速右之課々江船改掛より可届出、若休日等二候ハ、官員之宅江同断、問合書等を以早々申越候儀者可為時宜次第事、

但課々月番又者聞前等之名前兩名、居所等細相記、毎月三十一日二船改掛方江可差遣置候、尤船問屋田代喜二郎宅出会所与相定候事、

右付、本学校管轄又者柴田圭三等如キ仏英語学心得候人員、兼而取調置、其節々早速相通、御用向相弁申度事、

明治六年六月十三日

146 近来逢窃盜披露延引之者有之、就中諸郷之儀不頓着召置候も不少、窃盜発覚糺彈之節余計之手数ニも相渉不都合之至ニ付、将来無延引筋々可遂披露旨、御布達有之度候事、

六月

聴詔課

右之通申付候条、可致布告候也、

六月十七日

県庁

147 近来於諸所賭場を開帳シ、鬪鷄相企多人数屯聚シ勝負を賭、或者地料木戸錢等を貪取候者共有之、間ニ者士族も相加リ候哉ニ相聞得、卑劣之至候、賭博之儀者夫々法典も有之事候処、畢竟不心得より右次第、別而不可然、屹与令禁止候条、兼而戸長より厳密可致取締候、若違犯之輩於有之者、糺方之上可処罪科旨御布達有之度候事、

六月

聴訟課

右之通申付候条、可致布告候也、

明治六年六月十七日

県庁

148 今般地券御施行ニ付而者、従来之戸籍番号を地所之番号ニ見据候而者致混同、地券渡方不都合ニ付、従来之標札外雛形之通、別段地所番号標札相掲候様、県下諸郷無税屋敷地主之面々江、不洩様御布告相成度事、

但札番号之儀者、戸長可任差図事、

六月廿三日

地券掛

右之通申付候条、可致布告也、

明治六年六月廿四日

県庁

149 県下士族平民共地所ニ相係候願書又者届書、区内戸長承届、継書を以地券方へ申出候様、左候而諸会社之儀も地所ニ相係候事件者、戸長より時々致布達、願書等も前件同様取計候様、尤願人大区小区号士族平民之訳可致片書旨、不洩様御布告相成度事、

県庁令廃止候条、官員之儀者追而何分可相達候事、

明治六年 癸酉七月廿日

大山権令

150 県庁廃止之旨相達置候処、来ル廿七日より更ニ開庁致候条、午前八時出仕可被致、此段相達候事、

七月廿七日

大山権令

151 県庁出仕午前八時、午後二字退出可致候事、

明治六年癸酉七月廿七日

県庁

152 今度一大区江沓ヶ所、三町江沓ヶ所ツ、戸長役所取建候条、以米願意并諸伺書等悉皆戸長江相付可申出、此旨可致布告事、

同七月廿七日

鹿児島県権令大山綱良

153 県庁江相付諸願伺等之儀、大小共以来戸長江相付願書可差出、其上毎月二五八之日取束、第十二時限其課々江可差出、依事柄願人召列情実可申出事、

一平民願伺等之儀、戸長役所江相付差出候儀共、前条可為同断事、
一官員私宅江直訴訟等内意申立候儀、譬へ条理明瞭成事件たり共、
一切採用不致候、
右之通、已来相定候条、早々県下末々迄可致布告事、

同七月廿七日

鹿児島県権令大山綱良

154 以来布告之文書ニ者番号可相付候条、此旨相達候事、

同七月廿九日

県庁

155 第三号

各区郡治所廃止、更ニ支庁相立候条、官員出役迄之間、伺向届等之

儀ハ其課江以郵便可申出事、

同八月三日

鹿児島県庁

諸伺申出等、界紙ニ相認可差出事、

酉八月四日

庶務課

三課・地券方江達シ相成候事、

156 第四号

旧知事公、今般御募参御暇百五十日間御願済相成、本月中旬東京御発艦ニ而、旧磯御茶屋江被為在御着候段、為御知有之候間、一統承知可有之事、

右ニ付、県下諸郷々至迄、軽キ献上等者不苦候事、

但家令江相付可申出事、

同八月四日

大山権令

157 第六号

此節廃官之面々、高五拾石以下之者共江養祿四石ツ、先キ五ヶ年之間被下候条、相達候事、

同八月七日

鹿児島県庁

158 第七号

院省使、府県之官任・奏任以上ハ本年八月一日ヨリ十五日以内、判任以下ハ五日以内之休暇ヲ賜候条、御用向指支無之様便宜見計休暇可申付事、

一長官之義者次官卜可申合事、

一休暇中旅行致候儀ハ勝手次第第二候得共、行ク先其筋江相届可申事、

但東京在官之分ハ八月一日より同世日迄、地方ハ九月卅日迄之

内を以、本文之如ク休暇賜候儀ト可心得事、

明治六年七月廿三日 太政大臣三条実美

別紙之通被仰出候条、各課ニ於て便宜を以休暇可有之事、

癸酉八月七日

庶務課

三課・戸長江達有之、

159 第五

県庁 直管

吉田 桜島 郡山 伊集院 谷山 重富

第一支庁 加治木

溝辺 横川 山田 蒲生 栗野 帖佐 吉松

国分 清水 襲山 財部 踊 末吉 岩川

恒吉 福山 敷根 牛山 大村 佐志 黒木

蘭牟田 菱刈 太良

第二支庁 隈之城

平佐 高江 樋脇 永利 市来 申木野 甕島

水引 高城 長島 阿久根 野田 高尾野 出水

東郷 山崎 宮之城 鶴田 入来

第三支庁 垂水

新城 鹿屋 串良 牛根 花岡 大始良 高隈

百引 市成 高山 内之浦 始良 大根占 小根占

佐多 田代

第四支庁 知覧

阿多 田布施 永吉 吉利 日置 加世田 川辺

160

伊作 指宿 穎娃 山川 今和泉 南方 勝目
喜入
第五支庁 種子島
屋久島 外十島
口之島 中之島 臥蛇島 悪石島 宝島 諏訪瀬島
平島 硫黄島 竹島 黒島
第六支庁 大島
徳之島 喜界島 沖永良部島 与論島
右之通支庁相立候条、此旨相達候事、
明治六年 癸酉八月四日 鹿児島県権令大山綱良

支庁五ヶ所 加治木 隈之城 垂水 知覧 種子島

一ヶ所ニ、判任官員一課ヨリ一人ツ、出張ノ事、

張紙ニ即今庶務課官員出張治定ノ后、三課出張ヲ定ムヘシ、

一ヶ月交代ノ事、種子島ハ三ヶ月ヲ限ル、

一出張ノ官員、治定シタル規則上ノ事ヲ裁決シ、其他細大共県庁江

届出ヘシ、

一支庁ノ公務勉強ハ勿論、第一民間ノ疾苦・旧来ノ弊害ニ注目イタ

シ、改テ一新進歩ノ儀可相心得事、

一官員私ニ集会スルヲ禁ス、且又管下願伺等ノ事件、一切旅舎ニ於

テ聞届ク可ラザル事、

一田地山林ニ係ル願伺等ノ事件ハ、擬議ノ上届出、尚裁判ヲ得テ免

スヘキ事、

一支庁出仕ノ時限、県庁同様ノ事、

一郡内、就中茶・養蚕繁殖ノ事ヲ切ニ注目シ、勉励差配スヘキ事、

癸酉八月八日

庶務課

161 (本文書ハ一五号文書ト同文ニツキ省略ス)

162

第八号

当県区内諸神祭祀を名とし、諸遊芸之類、角力・芝居・小踊等追々願出候付、免許之上興行為致候処、段々民間之妨害者勿論、不謂所業等為有之哉ニ世評も有之、看々僻遠固凝之民心を惑シ、全無益之徒事ニ候条、尔后嚴禁せしめ、屹与取締向左之通申付候、一遊芸役者密ニ雇下候者ハ、所払可申付事、

一右同止宿為致候者、同断、

一祭祀ニ付、遊芸私ニ取企候者ハ、相応之懲役可申付事、

一手妻遣ひ并揚弓等密ニ取企候者ハ、見付次第破却之上前条同断可申付事、

一官員私宅江密訴等いたし候者ハ、取札之上懲役可申付事、

右之通、今般更ニ相定候条、心得違無之様早々可致布告事、

明治六年 癸酉八月九日

鹿児島県庁

別紙之通申渡候条、已米右等之願書万一差出候者有之候ハ、戸長前ニ而屹与叱置、趣意致貫徹候様分而申諭、書面悉皆可差戻事、

八月九日

県庁

戸長

右、各郷戸長江も達相成候事、

163

大隅国贈嶺郡襲山郷鎮座

霧島神社

右、当県々社ニ被召建候条、此段及布告候也、

同八月十四日

庶務課

三課

164

御賞典米ヲ以学校資本ニ差出度願

戊辰ノ年兵役四出干戈騷擾ノ際ニ当ツテ、皇家天下ノ為臣忠義父子聊カ尽力スルノ微功ヲ推シ玉ヒ、親政維新ノ後御賞典高十萬石ヲ下シ賜リ、待遇ノ厚キ寵眷ノ隆キ実ニ謝スルニ言ナシ、徒タ功薄ク恩渥キニ過ルハ恐縮ニ不堪ヲ以テ、謹テ之ヲ辞スル再三ニ至ト雖、更ニ不得許可、ソノ後チ父久光ニ分家ノ禄トシ下賜リ、其余猶五萬石アリ、然ルニ臣忠義旧邑鹿児島県ノ地タルヤ、東京ヲ去ル數百里僻遠ノ国、ソノ貫属士族四五萬戸、又ハ他ノ三民ニ至テ幾十萬ヲ以テ數フ、臣忠義父子旧藩政ニ従事スルノ時、四民ノ子弟教育勸道為メ黌校ヲ設ルコト、庁下及ヒ郷邑ニ至リ凡大小數十区、以テ頑固ノ俗ヲ変シ以テ有用ノ実才ヲ養ヒ、他日朝廷ノ為ニ供セント冀望シ拮据數年ナリ、今ヤ天下ノ学制改換、悉ク文部省ノ成規ニ従テ、生徒ノ自費ヲ以テ学ニ就キ、業ヲ成サントスレハ贅力不可継ク、之ヲ中道ニ廢スレハ、數十萬ノ人民蒙昧開クニ由ナシ、因テ響キニ下賜ル所ノ五萬石ノ賞典ヲ以テ、当癸酉年ヨリ米ル丁丑ノ年ニ至凡五ヶ年間、之ヲ鹿児島県下学校ノ資本ニ附屬致度志願ニ候、宜御執奏、速ニ御許可之儀奉願候也、

明治六年六月十四日

從三位島津忠義

東京府知事

大久保一翁殿

願之趣御聞届相成候条、此段相達候事、

鹿児島県

- 165 東京府貴属華族従三位島津忠義ヨリ賞典米高五万石、其県下学校資本トシテ五ヶ年間寄附差出度旨、伺之通聞届候間、此段為心得相達候事、

文部省三等出仕

明治六年七月三日

正五位田中不二磨

- 166 学校資本トシテ、御賞典五万石ノ禄米五ヶ年附属之儀、別紙之通奉願候処御許可相成候条、従来学校建設之趣意ヲ不失、文部省学制ニ基キ、県下士民之教導一層行届候様深致依頼候也、

癸酉六月

従三位島津忠義

鹿児島県権令大山綱良殿

別紙三通之通候条、此旨及布告候也、

明治六年 癸酉八月十二日

大山権令

- 167 一今般支庁相立候付而ハ、各郷戸長出張官員之指令を奉し、人民之疾苦ハ勿論、第一勸農・養蚕・学校・風俗等、其外茶繁殖等郷内

補益之事ニ注意いたし、従今政治一層進歩之儀可相心得事、

一郷内従来之旧弊悪習之儀も候ハ、支庁官員ニ申出洗除可致事、

一郷内之人民願同等之事件ハ戸長聞届、郵便を以可申出ハ勿論、事

柄ニ依而者当人召列支庁江出頭、情実可申述事、

右之趣、戸長一同可致奉守也、

癸酉八月

鹿児島県庁

第十号

- 168 旧知事公御着之節者、旧磯御茶屋江御渡戸より御上陸之段、為御知有之候条、諸人御祝儀申上候儀者戸長より取束、家令江相付可申上候、此旨相達候事、

同八月十五日

鹿児島県庁

第十一号

- 169 地券発行ニ付別冊之通候条、此旨及布告候也、

同八月十八日

鹿児島県庁

右別冊略ス、

第十二号

- 170 此度支庁相立候付而者、各郷戸長并副戸長之儀従前之通候条、此旨可相心得候事、

癸酉八月十八日

鹿児島県庁

大礼服一揃ツ、

但帽相添

- 171 右相渡候間、万一免職等之節者返上可致事、

但昇進転任等者格別、

明治六年 癸酉八月廿三日

大山権令

課々

- 172 旧近衛兵解隊、伍長以下賞典被下候、年限未滿ニ而致死没候節者、其相続人江定期之通り被下候、尤本人二三男等ニ而跡目相続人無之

時者、其身寄親族之者江被下候条、此段相達候事、

但本人致死去候節者、其相続人并親族之者名前等、其時々當省江可届出候事、

明治六年八月七日

陸軍卿山県有朋

鹿児島県

別紙之通被仰渡候条、此旨及布告候也、

同八月廿二日

県庁

鹿児島県

其原貫属佐竹義継始千三百五拾式人、近衛兵服役満期ニ付、別紙之通年限を以式人扶持ツ、賞典トシテ下賜候条、明治六年一月一日より年限中者、其県於テ渡方可取計事、

但一月より六月迄之分ハ七月中相渡、七月より十二月迄之分ハ旧十二月中ニ取纏、一ヶ年兩度ニ渡方可致事、

大蔵省事務総裁

明治六年七月廿二日

参議大隈重信

右ニ付別紙略ス、

但五ヶ年ト式ヶ年也、

別紙之通被仰達候處、未大蔵より御下渡無之候間、廻米次第可払渡候付、御布告有之度致吟味候也、

西八月廿四日

出納課

別紙之通ニ候条、此旨及布告候也、

八月廿四日

鹿児島県庁

別紙之通被仰渡候条、此旨及布告候也

西八月廿三日

県庁

174 本年一月第二十八号布告、華士族家督相続之儀御詮議ノ次第有之、

左之通第一章改正并第一章追加相成候条、此旨華士族へ布告スベキ事、

明治六年七月廿二日

太政大臣三条実美

第一章改正

家督相続ハ必総領ノ男子タルベシ、若シ亡没或ハ癯篤疾等不得止ノ事故アレハ、其事実ヲ詳ニシ、次男三男又ハ女子江養子相続願出ツベシ、次男三男女子無之者ハ、血統ノ者ヲ以相続願出ツベシ、若シ故ナク順席ヲ越テ相続致ス者ハ相当ノ咎可申付事、

一章追加

婦女子相続之後ニ於テ夫ヲ迎へ、又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子へ相続可相讓事、

175

第十四号

金貨相場立之儀者、御布達相成居候比格表通之事ニ而、更ニ相變候儀無之候得共、落札引換ニ付貸借返弁之儀、旧錢壹貫文之処ニ金三百匁之割を以返弁可致旨、先般中渡置候處、取計中損益相立平等ならず、諸人苦情ニ及候段相聞得候付、旧号錢壹万貫文者其三分一、新号錢三百三拾三貫三百三拾式文三係之割を以取引候様申付候事、

但先般中渡候節より取引都而本行通引直可申事、

明治六年 癸酉八月廿七日

県庁

176 朝官之面々江、藩政中より家族養俸被下置候得共、各省其他府県ニ

而夫々月給被成下、且大藏省御規則ニも致違背候付、養俸米引払候条、此旨及布告候事、

同八月廿八日

県庁

177 第七号を以達相成候通、大山権令今二日より来ル七日迄休暇ニ而出庁無之候条、右達候也、

癸酉九月二日

庶務課

178

東京鎮台を除之外各鎮台兵隊除隊願出候者、三ヶ条之規則ニ照準シ取扱可申旨、去ル壬申十月七日相達置候處、其後右願出候者夥多有之、徒ニ兵員ヲ減少シ其際限も無之候付、自今願出候節者、其府県庁より合格之者相撰為代人為差出、其台ニ於テ検査補欠可致、此旨更ニ相達候事、

但其他之義凡テ最初相達候通、尤徴兵令ニ依リ召募致候者ハ此限リニアラス、

明治六年七月廿七日

陸軍卿山県有朋

前書之通候条、此旨相達候也、

同八月廿六日

熊本鎮台

鹿児島營所

別紙之通被仰渡候条、此旨及布告候也、

同九月十二日

県庁

179

第十六号

今般東京駅通寮官員当地江出張相成、郵便方法尚又盛大被相行候様

取扱相成積ニ而、其郵便之儀ハ人民便宜之為ニ、政府莫大之御失費ヲ不被為厭、低価之税金ヲ以全国一般不通之儀無之様、厚ク御世話被為在候儀ニ付而者勿論ニ候得共、未た不弁解之者有之、万一規則限外之幸便江相托し、無税之信書往復為致候義有之候而者、郵便犯罪罰則ニ照シ過分之罰金差出候様立至リ、遂ニ身上ヲ苦め候様之義於有之者實ニ愍然之至候条、区内無遺漏懇切ニ説諭いたし、無税之信書取遣候儀無之様、取締可有之候也、

癸酉九月

鹿児島県庁

180

第十七号

今般庁下取締組を設ケ、一大区毎ニ屯所一ヶ所を置き、昼夜相詰時々為致巡邏候条、此旨致布告候事、

九月廿九日

県庁

181

今二日大風雨ニ付、各課御用済次第勝手退出不苦候事、但火用心可入念候、

癸酉十月二日

県庁

182

諸郷より差出候願書類、是迄同案式通ツ、差出来候得共、於支庁も少人数繁劇帳留等仕課兼、於本庁者猶更之事付、以来都合三通ツ、同案為差出、式通者本庁江差廻候様可致候、此旨及布告候事、

癸酉十月三日

県庁

右之通、管下江不洩様布達可有之候也、

癸酉十月三日

庶務課

第一二三四支庁

183 第三百廿一 号

十八日午後三時三十分、権典侍葉室光子分婉、皇子御降誕之處、即刻御逝去被遊候ニ付、三日之間歌舞音曲令停止候、此旨布告候事、但日數之義者、布告到達之日より算シ候事、

明治六年九月十九日 太政大臣三条実美

別紙之通被仰渡候条、此旨致布告候事、

明治六年 癸酉十月七日 県庁

184 磯山并惣陣鹿倉之儀者吟味之訳有之、取締向等申達置候趣も候処、

近來狩大等曳入、又者薪取りを名として猥ニ踏入候族も有之哉ニ相聞得、甚不可然事候条、兼而見締人も掛置候付、聊心得違之儀共無之様、末々ニ至ル迄分而可申渡候也、

癸酉十月八日 県庁

前書之通、重富・吉田戸長江相達候事、

185 教導職之面々、所在人民説教之為各郷江致巡廻候付、諸事打合不都合之義無之様可取計旨、先般相達置候処、其後郡治所廃止ニ而不連続之義も難計候間、何篇其節布達通可相心得旨、管下江更ニ可及布告候也、

癸酉十月九日 県庁

各支庁

186 先般道路・溝川等清潔ニ有之候様申渡置候処、此比ニ至リ間ニ者心得違之もの有之、他ヨリ塵芥等打捨、溝川筋屋敷掛之もの別而迷惑

ニ及ひ候哉ニ相聞得、如何之至候条、乍此上右体之者於有之者、見届次第不差置名前承届、早々戸長江申出其もの取札、無相違ものハ其区内戸長前ニ而懲役十日申付、其届可申出候、此旨及布告候事、

癸酉十月十二日 県庁

187 毎月十日 廿五日

右、甌島江平常之御用封継立之儀、申木野浜浦より、右之通卷ケ月両度之渡日相定置候条、此段及布告候事、

癸酉十月十三日 県庁

188 口之島 中之島 平島 臥蛇島 悪石島 宝島 諏訪瀬島

右七島之儀、是迄第五支庁管内之處、以來第六支庁大島江管轄替申付候条、相達候事、

癸酉十月十九日 大山権令

右、四課并第五六支庁江相達候事、

189 四ヶ所支庁取立候申合

一支庁之儀、旧ノ郡治所又ハ仮屋、便宜ニ從ヒ成丈入費無之様易簡ニ相立可申事、

一支庁内四課之官員出仕ノ座席、并出仕戸長ノ面々座席相設可申、左候而諸事輕便ニ致候様可相心得事、

一各郷戸長江申付、貯蔵ノ米全員数計算ノ上本帳仕立可為差出事、但出入之儀者時々承届ヘキ事、

一支庁治定之上各郷戸長呼出、達書一通ツ、相渡、並今般改正ノ趣意丁寧相諭、能々可為致貫徹勉勵事、

一各郷戸長任免之儀、支庁ニ於テ官員裁決之上申付、本庁江可届出事、

一此涯庶務課ヨリ官員差出候付而者、属一人・史生一人ツ、四ヶ所江分配可致也、

但三課出張之上者、一人ハ帰県可致事、
今般支庁取立ニ付、右之通相定也、

190 各郷戸長江達之条々

(本文書ハ一六七号文書ト同文ニツギ略ス)

191 各郷地券掛人員

一国分 清水 築瀬善蔵 西俣嘉兵衛

一踊 襲山 加治木十郎

一財部 末吉 汾陽中二

一岩川 恒吉 小森新蔵

一福山 敷根 新納時成

右之通、地券掛申付候事、

癸酉八月八日

県庁

一溝辺 横川 福島半之進

一加治木 帖佐 山田 鳥丸一六 若松金十郎

一栗野 吉松

一牛山

一菱刈 太良 阿多慶二 森川孫四郎

一蒲生 蘭牟田 和田五郎

一佐志 黒木 大村 山口彦四郎

右、第一支庁出張地券掛申付候事、

一壹升壹号出米

一額米凡六千石余

右、戸長并郷村祠官・祠掌俸禄ニ宛行、払残りハ堤防營膳等ニ振向度、明治六年二月三日大山綱良願書に、大蔵省より申出之通可取扱旨、租税頭陸奥宗光指令、同年三月七日、

区長地券取調兼

一甕島郡 甕島 福島直之進

一薩摩郡 高山 隈之城 永利 樋脇 蘭田四郎助

平佐 東郷 入米 山崎

一日置郡 永吉 吉利 日置 伊集院 春山文平

市来 中木野 郡山

一出水郡 出水 高尾野 野田 阿久根 鳥丸一六

長島

一高城郡 高城 水引 山口彦四郎

○区長地券取調兼職務概略

一地租改正田畑耕地等地券取調ノ儀ハ、地券掛江引合相勤メ可申事、

一田畑改正法施行迄ノ間ハ、旧法ノ地租帳其他ノ帳簿大蔵省へ届出

候付、高反別現損ノ出入ハ勿論、不時災殃等兼テ無遺漏分明記載

可致置事、

一耕耘ヨリ收穫、不時破損等ニ至マテ悉皆検査ヲ経、本庁江可致具

状事、

一民間ノ疾苦トナルヘキ夫仕・出錢等ノ如キハ、深ク注意シ相除キ

可申事、

一授産ノ方法ヲ設、茶・養蚕等繁殖ノ道可相立事、

右通相定候事、

明治七年 甲戌 一月

鹿児島県庁

192 維新以來沿革ノ除ニ遭逢シ、辺陲ノ県ニ至テハ命令布達モ悉皆了解シ難キモ少カラス、即今ノ御制度ハ膏沢ナキ者ト心得ルモ計ル可ラス、故ニ今般大蔵省官員諸県ヘ派出シ、専ラ撫民ノ御旨趣拝承ス、因テ諸郡ニ区長ヲ置、勸農并ニ地券ノ事務ヲ專要スルハ勿論、政令ノ煩冗民間ノ疾苦ヲ去リ、親シク授産ノ法ヲ設ケ、將來安泰ニ生活スルノ道ヲ起シ、民心ヲシテ安堵セシメンコトヲ専務トスヘシ、

大山権令

右、一月廿七日第二支庁江相達候、

193

区長地券取調兼職務概略補入

第一条二置

人民ヲ撫育シ、其業ヲ安シ、其生ヲ楽マシムベシ、如シ疾苦ト成ル事件モアラハ、大小輕重ト無ク速ニ区長承届ケ処分可相付、無故課役・出錢等ノ如キモ深ク注意シ相除キ可事、

第六条

管内ノ学校ヲ監督シ、人民ニ教化ヲ布キ、人畜・戸籍・租税ノ事務ヲ勾当ス、

第七条

常備蕃植ノ山林・山海ノ物産ヲ増シ、士民職業生計ノ方法ヲ熟考看督ス、

第八条

管内人民ノ勤惰ヲ検査シ、及ビ正副戸長黜陟ノ典ハ戸長ノ公論ニ涉

リ、其精微ヲ尽シテ支庁ニ具状スヘシ、

第九条

官林ノ伐木願出ルニ於テハ其事實ヲ分明シ、支庁ヘ申シ、裁判ヲ經ヘシ、

第十条

常平・社倉或ハ商社ヲ建テ貿易スル等ノ如キ、悉皆具状シ支庁ニ申シ、本庁ノ裁判ヲ經テ施行シ、管内ヲ富シ雜費ヲ補フヘシ、

第十一条

管内ノ犯罪者ハ其情法ヲ審カニシテ、支庁ニ申スヘシ、

右之通致補入相定候、左候而原職制ノ第四条ハ相消シ、此冊ノ首条ニ掲ケ候事、

明治七年 甲戌 一月

鹿児島県庁

194

県下市内外并近在毎日朝夕兩度往復、谷山・伊作・郡山・横川之四ヶ所若隔日往復之郵便二月一日より、且大隅地向江湾并国分浜之市より飯野筋江月々九回往復之郵便、二月十五日より取開之賦候間、差立期限等左条之通候事、

一 県下市内外并近在戸長役所迄朝夕兩度往復、

但朝便

一 当役所午前七時差立、吉の村・坂元村・下伊敷村・小の村・武村・郡元村、右六ヶ村午前九時到着、

一 右六ヶ村より午前十時差立、当役所江十二時到着、

夕便

一 当役所より午後一時差立、右六ヶ村江午後三時到着、

一 右六ヶ村より午後四時差立、当役所江午後六時到着、

但譬へハ吉の村より差立之脚夫、其線道韃韃冬々・堂之前・諏訪之瀬戸・境橋切手売下所江立寄、右江持出之信書取当役所江持込、武村・郡元村取扱所よりも前頭同様、其線道く切手売下所江持込候得者、同所より無滞夫々名宛之方江通送且配達之賦、

一吉野村之線道切手売下所

韃韃冬々松永吉兵衛居宅、堂之前前田彦八居宅、諏訪之瀬戸中村甚兵衛居宅、境橋奈ら迫半蔵居宅、

外略ス

右拾ヶ所江郵便切手売下所取設置候間、最寄便利を以、右売下所之切手貼用之上信書取遣可致事、

一県下市内外并近在往復之郵便税者、市内往復書状之例ニ倣ヒ、定税半減之税を可払事、

則チ目方二匁以下 一錢

目方二匁以上 二錢

目方四匁以上 三錢

以上、皆此割合を以、目方式匁毎ニ壹錢ツ、相増可払事、

一諸人差出候信書、其取扱所くニ到着スレハ、同所より配達スルモ、其路筋之順叙アツテ時間之費もある故ニ、若シ至急之書状ニ而、到着スル哉否瞬時も猶予せず配達を望者ハ、目方ニ拘ハラス迄封ニ付式錢ツ、増税を払、其書状之表書ニ別配達ト朱ニ而記し置ケハ、其他之役所并取扱所より速ニ配達可致事、

但本文之外郵便規則を以可弁知事、

一谷山駅 一伊作駅 一郡山駅 一横川駅

右四ヶ道、是迄郵便往復県下役所より、互ニ二五八ノ日未明差立

ニ候得共、二月一日ヨリ隔日ニ而、半ノ日未明差立之事、

大隅地向江海郵便差立之手続左之通

一鹿屋麓町者大隅地中央ニ而、同所取扱所往復所之軸ニ相立、同所より内之浦・佐多・市成之取扱所江、二五八ノ日未明互ニ脚夫差立、本日鹿屋町取扱所江到着之信書、同所より福山駅ト翌三六九之日未明互ニ脚夫を差立、向へ海一般之信書悉皆福山取扱所江送り、夫より県下本役所迄通送シ、夫々差立配達可致事、

但往復所迄之中駄取扱所江通送之信書ハ、其ヶ所くニ落シ、

且同所より差立之信書を相受取、県下本役所迄通送可致事、

一国分浜之市取扱所より飯野取扱所迄之往復も、二五八ノ日未明互ニ脚夫差立、中駄取扱所江通送之信書ハ其ヶ所くニ落シ、同所取扱所より差立之信書相請取、夫々通送可致事、

一各郷江一ヶ所ツ、郵便切手売下所取設ヶ候間、最寄便利を以右売下所之切手貼用之上、信書取遣リ可致事、

一桜島駅之儀者并継郵便御取開相成迄之間、当役所江者勿論垂水其外近傍取扱所江、互ニ辛便配達之事、

別紙之通諸道開業可致旨相達候付而者、規則を守り無税之信書等差遣不致候様与之趣者、癸酉第十六号ヲ以布達いたし候通候条、聊心得違有之間敷候、郵便規則抄録相添此旨及布告候条、

甲戌十月廿七日 県庁

195 元始祭 一月三日 新年宴会 一月五日

考明天皇祭 一月三十日 紀元節 二月十一日

神武天皇祭 四月三日 神嘗祭 九月十七日

天長節 十一月三日 新嘗祭 十一月廿三日

右、年中祭日祝日被相立候事、

但休暇

一月三日、士民一同遙拝可有之事、

但当朝午前九時後可為勝手、

右之通、以來相定候事、

癸酉十二月廿七日

県庁

鹿
兒
島
県
布
達

明治拾年壹

(表紙)

宮崎県
鹿兒島県布達 明治拾年志
古公文書

(文書題6頁ハ卷末ニ移シタ)

196
中第一号

鹿兒島裁判所長大塚五等判事、明五日発足出京致シ、二級判事補吉本祐雄代理致シ候条、当庁へ差出候訴状并諸願伺届等、左之通相認メ可差出候事、

鹿兒島裁判所長

大塚五等判事代理

二級判事補吉本祐雄殿

前書之通鹿兒島裁判所ヨリ懸合有之候条、此旨布達候事、

明治十年一月四日

鹿兒島県令大山綱良

197

日向国

各区正副戸長

演劇之夜際興行禁止之義ハ何レモ予テ承知之通ニテ、素ヨリ妄リニ興行致候者ハ無之筈ニ候処、近来密ニ興行致候者モ有之哉ニ相聞、以之外之事情、抑違犯之者ハ素ヨリ無容赦至当之罪科ニ可被処筈ニ付、屹度心得違無之様区内へ可申諭、此旨内達候事、

明治十年一月九日

宮崎支庁

198

第六大区

一区戸長

旅人宿泊之義者取締上ニ関係候条、宿帳改等之儀従前之通タルヘキハ勿論、自今旅人着発并属籍・姓名・年令等取調、其時々該区警察屯所へ届出候様、右營業之者へ無洩可触示、此旨相達候事、但是迄免許之間屋名簿ハ本月三十日限、以後免許之者ハ其時々屯所へ可差出置候、

十年一月九日

宮崎支庁

199

第二 第三 第四 第五

第七 第八 第九 第十五

大区々戸長

旅人宿泊之義ハ取締上ニ関係候条、年令等取調為届出、一ヶ月分取纏、翌月十日限其地差立第四課へ可届出、此旨相達候事、

十年一月九日

宮崎支庁

第八大区へハ但書ニ左之通り加フベシ、

但城ヶ崎旅人発着届ハ、九年十一月二日達ノ通警察第十分署へ可届出事、

200

甲第一号

本年ヨリ金禄公債証書ヲ以テ一時ニ下賜候ニ付テハ、今般更ニ持高取調整頓ノ上大蔵省エ申張可致ニ付、将来高売買致シ候向ハ、本月廿日ヨリ二月廿八日迄高直シ可願出、二月中相過キ候テハ取調ノ際限無之、不都合不少候条高直一切不聞届、尤モ公債証書御下渡ノ上ハ成規ノ処分可致候、此旨布達候事、

但各郷の儀ハ別紙雛形ニ照準可願出候、

明治十年一月十日

鹿児島県令大山綱良

別紙

高直願

何方郷

高何石

何方村何門

大浮免

自作地

余地

右者、何某方ヨリ右高讓請之内約仕候間、高直御免許被仰付被下度奉願候也、

何大区何小区何方士族

讓渡

何野何某印

片書同上

讓請

何野何某印

戸長

何野何某印

鹿児島県令大山綱良殿

201

番外

正副区長

正副戸長

国民軍年令

天保八年丁酉正月元日ヨリ、安政七年庚申十二月末日迄ノ間ニ出生之者、

右相当之者、徴兵令参考廿八条ニ基キ早々取調、本月廿五日限無間違第一課ヘ可差出候、此旨相達候事、

明治十年一月十二日

鹿児島県令大山綱良

徴兵令参考第廿八条

本令第六章第十二条ニ示シタル全国ノ男児十七歳国民軍ニ入ラシムヘキハ、其本年一月一日ヨリ十二月三十一日迄ニ満十七歳ト成ル者ヲ、前年十六歳ノ十二月取調ヘ成丁簿ニ記シ府県庁ニ備ヘ置キ、而国民軍人員表雛形ニ準シ、十七歳ノ者幾人、十八歳ノ者幾人ト順次四十歳ニ及ホシ、之ヲ一大区又ハ一郡に括リ、而又之ヲ一府県ニ合セ、翌年一月中ニ陸軍省ヘ差出スヘシ、尤成丁簿ハ所用の節需メニ応シ差出スヘキヲ以、出入死没等之アルトキハ必ス筆削ヲ加ヘ置クヘシ、

202

甲第三号

各区人民ヨリ盜難届出ノ節ハ、品物代価積リ金記載不致候テハ取調往復ニ時日ヲ費シ候ニ付、別紙雛形ニ照準シ、従来ノ手續ヲ以テ筋々可差出候、此旨布達候事、

明治十年一月十二日

鹿児島県令大山綱良

別紙

盜難届案

昨何日^{午前}第何時^{強盜}ニ逢ヒ候次第、左ニ中上候、

右ハ、昨何日^{午後}第何時^{強盜}ニ逢ヒ候次第、常ノ如ク戸締リシ一同寢臥^{何ノ処ニ用事}致、第何時頃^{裏表}雨戸ヲ破リ^{散髪ノ者}人頭巾ヲ冠リ^{素面手}抜刀ヲ携^{拭リ}

エ、荒縄忽然押入り誑カシ縛リ、又ハ何レノ処ヲ斫破リ掠取り忍候品
左ノ通、

一衣服品柄 代価何程

一財物品柄 代価何程

一獸畜類 代価何程

前書之通相違無之候得共、差向心当リノ儀無之候間、不取敢此段御
届仕候也、

明治何年何月何日

本籍区名身分

何某

某御中

203

日向国第一 第二 第三 第四 第五
第六 第七 第八 第九 第十五大区

正副区戸長

渡船橋梁ヶ所等取調之義駄通頭ヨリ申越候条、別表之通記載可差出、
此旨相達候事、

十年一月十五日

宮崎支庁

御管内一般渡船橋梁三ヶ所等、当寮ニ於テ時々見合度儀有之候間、
乍御手数別表之通御記載御廻送相成度、此段及御依頼候也、

明治九年十二月十五日

前島駄通頭印

大山鹿兒島県令殿

別紙

何府県下渡船橋梁貸銭表

国名	郡名	前後郵便局名	両岸地名	川名	渡船橋梁	賃 人一人 向掛一荷	銭
----	----	--------	------	----	------	------------------	---

	何国	何郡	何局	何村	何川	舟或橋	何厘	何銭
--	----	----	----	----	----	-----	----	----

204

今般其病院ヲ廃止、更ニ当医院所轄分局設立候条、此旨相達候事、

明治十年一月十五日

鹿兒島県令大山綱良

205

旧仮病院雇医并吏員へ

今般仮病院ヲ廃シ鹿兒島医院分局ヲ設置候ニ付テハ、追テ何分相達
候マテ更ニ該分局へ相詰、諸事は迄之通り可致取扱候事、

明治十年一月十五日

鹿兒島県令大山綱良

206

日向国第一二三五四十五 大区
六七八九十五 区戸長

一太政官公布 第百五拾五号ヨリ百五十七号マテ、及百五十九号ヨ
リ百六十二号マテ

一内務省布達 甲第四拾四号

一大蔵省布達 甲第廿九号ヨリ卅号マテ

一陸軍省布達 第二百拾八号

一教部省布達 第八号

一工部省布達 第廿一号ヨリ廿二号マテ

右、別紙之通御発令相成候条、区内無漏可触示、此旨相達候事、
但尔来官省布達、添書ハ相廃止帶封ヲ以配布候条、総テ布達ノ儀
ハ受持区内へ時々可触示候様可致候、此旨添テ相達候事、

十年一月十六日 宮崎支庁

207 甲第四号

今般正院修史局ニ於テ藩史編輯ニ付、士民ノ私撰・私記総テ旧藩内
事蹟ニ関スルモノ、藩籍奉還迄ノ書類并旧藩士中名族古家譜牒ノ類
所持之者ハ、書名・冊数相記シ早々県庁ヘ可差出、此旨布達候事、
但宮崎支庁所轄ノ区ハ該区ヘ可届出候事、
明治十年一月十二日 鹿児島県令大山綱良

208

日向国第一より第九マテ及第十五大区

正副区長

正副戸長

今般支庁下仮病院被廢、更ニ同所ニ鹿児島医院分局ヲ設置相成、診
療等ヲ始メ諸事は迄之通取扱候条、此旨為心得相達候事、
明治十年一月十八日 宮崎支庁

209 番外

各区

正副区長

正副戸長

院省庁使府県ヘ奉職、其他遊学・商法等ニテ他所ヘ寄留ノ士族婦省
ノ節ハ、着発届不申出候テハ不都合ノ廉有之候条、以来時々着発届
書為差出可届出、此旨相達候事、
但最寄警察署ヘモ同断可届出候、

明治十年一月二十日 鹿児島県令大山綱良

210 今般英語学校生徒六拾名募集候条、別紙科目表ヲ以試験ノ上、学力

ニ応シ各級ニ編入可致候付、年令十四年以上十八年以下志願ノ者、
来ル二月十五日限履歷書ヲ以テ同校ヘ可願出、此旨布達候事、
明治十年一月二十日 鹿児島県令大山綱良

別紙

一下等二級ヨリ四級迄 三十名 一初学生 三十名

試験科目左ノ通 試験科目左ノ通

一日本外史 一国史略

一十八史略 右素読

右素読 一算術 右加減乗除

一算術 右加減乗除、転比例迄 一作文 右公私用文

右加減乗除、転比例迄 一作文 右公私用文

一作文 右公私用文

右公私用文

一綴字

一第一読本ヨリ同三迄

一地理

一文法

211

日向国第一及第八大区

区戸長

医務取締

医院教頭英医ウキリス、来ル三十日比当所ヘ出張三日程滞在、外来
患者診療可致旨照会ニ付、為心得此段相達候事、

十年一月廿二日 宮崎支庁

212

日向国第一大区

正副区戸長

中村町・松山町貸座敷渡世ノ者、来客人ハ旅人問屋同様第十分署へ
届出候様、右営業之者へ可相達候事、

但怪敷者^者即時ニ可届候事、

十年一月廿二日

宮崎支庁

213

各区

区戸長

鹿児島裁判所宮崎支庁へ差出候伺届類名宛之儀ハ、昨九年十二月廿
日^布附達ノ通ニ候処、間ニハ裁判所長代理ニ級判事補吉本祐雄宛ニテ
差出候向モ有之、實際甚タ不都合之段該支庁ヨリ懸合越候条、区内
人民へ心得違無之様説諭可致、此旨重テ相達候事、

十年一月廿二日

宮崎支庁

214

番外

各区

正副戸長

内国勸業博覧会出品試験ノ為メ逐次蒐集ノ物品、庁下旧吉野橋脇
該事務扱所へ陳列從覽為致候条、自今出庁之都度右物品精密点見、
倍有益之品類産出候様可致注意、此旨相達候事、

明治十年一月廿二日

鹿児島県令大山綱良

215

番外

日向国第一 第二 第三 第四 第五

第六 第七 第八 第九 第十五大区

区戸長

度量衡旧器之儀、九年十二月廿五日ヲ過キ、検印無之器ヲ商業上ニ
使用候儀不相成段、別紙大蔵省九年乙第百六号ノ通達相成候処、当
県之儀ハ新器製作発売之都合有之、兼テ百二十五日猶予伺済、且旧
器検査未相済候ニ付、右達之趣^者九年十二月廿六日ヨリ百二十五日
相満候上施行之儀ト可相心得、此旨相達候事、

明治十年一月廿二日

鹿児島県令大山綱良

216

乙第一号

各区

正副区戸長

右、客年十月番外ヲ以及布達置候処、本月十六日都城ニ於テ捕縛致
候、此旨相達候事、

明治十年一月廿三日

鹿児島県令大山綱良

217

番外

日向国各区

正副区長

正副戸長

違式註違条例ノ内、先ツ別紙ノケ条来ル三月一日ヨリ施行候条、各
区へ揭示致ヘク、此旨相達候事、

但元宮崎県ヨリ揭示ノ条例ハ大区扱所へ引揚置ヘシ、

明治十年一月廿三日

鹿児島県令大山綱良

別紙

第一条 違式ノ罪ヲ犯ス者ハ、七十五錢ヨリ少ナカラス百五拾錢ヨリ多カラサル贖金ヲ追徴ス、

第二条 註違ノ罪ヲ犯ス者ハ、五錢ヨリ少ナカラス七拾錢ヨリ多カラサル贖金ヲ追徴ス、

第三条 違式註違ノ罪ヲ犯シ無力ノ者、実決スル左ノ如シ、

一 違式 懲役 八日ヨリ少ナカラス、十五日ヨリ多カラス、

一 註違 拘留 半日ヨリ少ナカラス、七日ヨリ多カラス、

但拘留ノ罪ト雖トモ適宜懲役ニ換ユルコトアルヘシ、

第五条 違式註違ノ罪ヲ犯シ人ニ損失ヲ蒙ムラシムル時、先ツ損失

ニ当ル贖金ヲ出サシメ、後ニ贖金ヲ命スヘシ、

第十二条 男女入込ミノ湯ヲ渡世スル者、

但時間ヲ区分スヘシ、

第二十六条 他人分ノ田水ハ勿論、組合持ノ田水ヲ断ナク自恣ニ我

カ田ニ引入ル者、

第三十六条 他人ノ墓碑ヲ毀損スル者、

第四十一条 官有或ハ他人ノ山林山畠ニ入り、植物ヲ損害スル者、

第五十一条 旅籠屋渡世ノ者、止宿人名記載セス或ハ之ヲ届出サル

者、

日向国各区

正副区長

正副戸長

隠売罰則、元宮崎県ヨリ施行致米候処右ハ相廃シ、更ニ別紙ケ条通米ル三月一日ヨリ施行候条、各区ヘ揭示致スヘク、此旨相違候事、

明治十年一月廿三日

鹿児島県令大山綱良

別紙

第一条 隠売女ノ宿主致シ候者ハ、初犯十五円以内、再犯以上ハ三十円以内ノ罰金ヲ科ス、

第二条 淫売者及ヒ媒合容止スル者、初犯八十円以内、再犯以上ハ二十円以内ノ罰金ヲ科ス、

但父母等ノ指令ヲナス者ハ、其罰ヲ指令者ニ科ス、

第三条 宿主無力ニシテ罰金徴収スル能ハサル者、初犯ハ三ヶ月以

内、再犯以上ハ六ヶ月以内ノ苦役ニ処シ、若シ身弱ニシテ苦役スルヲ得サル者ハ禁錮ニ換フ、

第四条 売淫者及媒合容止スル者無力ニシテ罰金徴収スル能ハサル者、初犯ハ二ヶ月半以内、再犯以上ハ五ヶ月以内ノ苦役、

女ハ禁錮ニ処ス、

第六条 売淫ノ法ヲ犯ス男ハ、第二条ニ照準シ、罰金又ハ苦役ニ処ス、

第七条 前条ノ者、審札ノ上其事情重キニ依テハ、初犯・再犯ノ差別ナク五十円以内ノ罰金ヲ科ス、

各宗旨之儀ハ、人民各自ノ帰依ニ任セ信仰不苦事候ヘ共、門徒ノ輩多人数集合夜際之執行致シ、或ハ教導職ニ非サル僧侶及ヒ其他ノ者共、不経免許私ニ説教法談等興行候段相聞ヘ、取締上不都合ノ儀ハ勿論、人民保護上妨害不少候ニ付、以来猶又堅ク令禁止候、若違犯

ノ者於有之者屹度取札、夫々相当ノ処分可及候条、心得違無之様可致遵守、此旨布達候事、

明治十年一月廿四日

鹿児島県令大山綱良

220

旧仮病院医員并吏員へ
先般仮病院廃止更ニ医院分局設置之处、該院長三田村一出張二付、従前之事務同人へ悉皆継渡候様可致、此旨相達候事、

明治十年一月卅一日

宮崎支庁

221

番外

日向国各区

正副区長

正副戸長

県税則之義ハ、昨九年十一月番外ヲ以テ布達候通、追テ更正可相達候处、従前免許鑑札下渡来、尚追々可下渡旨指令ニ及至候分モ有之候へ共、自今別紙科目営業ニ限り鑑札附与相廃シ候、尤モ従前旧宮崎県ニ於テ下渡置候鑑札ハ、総テ取纏メ早々返納方可取計、此旨相達候事、

但営業興廢願届等ハ是迄通可相心得候、

明治十年二月二日

鹿児島県令大山綱良

別紙

一 飲酒器商	一 煙草具商	一 質屋	一 料理屋
一 洋物商	一 菓子屋	一 宿屋	一 諸問屋
一 洗湯屋	一 古物商	一 三味線商	一 糶屋
一 翫物商	一 古着古道具商	一 煮売屋	

222

当支庁管轄各区

区戸長

今般当庁下仮病院ヲ廃シ、更ニ鹿児島医院分局設置開局相成候处、従前薬価都テ即納ノ定規ニ候へ共、金議ノ次第有之、当支庁管下一般ノ民情ヲ酌量シ、即納難調者ハ、一月・八月兩度上納可聞届候条、区内無洩可触示、此旨相達候事、

但教師ウイリス、米ル六日迄当所分局滞在ニ付、治療相受度患者ハ該局へ可差越候、

十年二月三日

宮崎支庁

223

是迄警察十分署へ届出候事件ハ、当分之内上ノ町警察屯所江可差出、此旨相達候事、

十年二月八日

宮崎支庁

第一・八大区

区長

追テ区内へ可触指示、

224

当庁下出張巡查、昨日より引払二付テハ、跡代リ之義自ラ出張可相成候へ共、其機ニ乗し窃盜放火等ノ悪行難計事ニ付、各町村取締方夫々注意有之度、此旨為念及内達候也、

十年二月

宮崎支庁

一大区々々長

八大区城ヶ崎町戸長

225

甲第九号

今般陸軍大將西郷隆盛外二名政府工尋問ノ筋有之、旧兵隊隨行不日
ニ上京ノ段届出候ニ付、朝廷へ届ノ上、更ニ別紙ノ通各府県并ニ各
鎮台へ通知ニ及ヒ候、就テハ此節ニ際シ、人民保護上一層注意着手
ニ及ヒ候条、篤ク其意ヲ了知シ益安堵可致、此旨布達候事、
但凶徒中原尚雄以下ノ口供相添候、

明治十年二月十二日

鹿兒島県令大山綱良

別紙

今般当県官員工專使申付、御通知ノ事件左ニ申進候、近日当県ヨリ
旧警視庁へ奉職ノ警部中原尚雄其外別紙人名ノ者共、名ヲ帰省等ニ
託シ潜カニ帰県ノ處、彼等窃カニ国憲ヲ犯サントスルノ奸謀発覺シ
タルニ付、即チ御規則ニ本ツキ其筋へ申付、該人名捕縛ノ上鞫問及
候處、図ラスモ該犯ノ口供別紙ノ通ニ有之候、就テハ右事件陸軍大
將西郷隆盛・陸軍少將桐野利秋・陸軍少將篠原国幹等ガ耳聞ニモ相
触タルカ、右三名ヨリ今般政府へ尋問ノ筋有之、不日ニ当地発程致
候間、御含ノ為メ此段届出候、尤旧兵隊之者共隨行多數出立候間、
人民動搖不致様一層御保護、及御依頼候也トノ書面ヲ以テ届出候ニ
付、県庁ニ於テ書面ノ趣聞届之上朝廷へ御届申置候間、及御心得此
段御通知置候也、

明治十年二月

鹿兒島県令大山綱良

各鎮台

各府県

御中

鹿兒島県伊集院郷
士族正兵衛嫡子

探偵捕縛明治十年二月三日

少警部

中原尚雄

三十二年

一自分儀、明治九年一月四日少警部拜命奉職罷在リ、同年十一月末
方日ハ失念、大警視川路利良宅江差越候處、同人ヨリ各県ノ事情
等彼是ト承リ候末、鹿兒島県ニ於テ近頃種々不穩向モ有之迎モ、
西郷陸軍大將在県ナレハ、名義不立ニ廉忽ノ所為ハ無之トハ申ナ
カラモ、万一挙動ノ機ニ立至ラハ、西郷ニ対面刺違ユルヨリ外ニ
仕様ハナヒヨトノ申聞ニ随ヒ居候折柄、是亦日ハ不取覚、同県士
族大山勘助宅へ立越候處、咄ニ西郷若シ事ヲ挙ケハ刺殺ヨリ外ナ
キト承候ニ付、弥々前件ノ主意包藏罷在候内、同年十二月廿四日
中警部園田長照・末広直方自分宅へ参リ、近々帰省願出度含ミト
云フモ、鹿兒島県ノ動靜ノ何分世評マチマチノ向キ申スニ付、其
儀ニ於テハ自分ニモ共ニ帰省致シ度相答候處、兩人共其意ニ応シ
候ニ付、即日其形ニテ皆共罷歸候事、
一翌廿五日、警視庁内ニテ川路利良工鳥度面会ノ節、帰省ノ願書可
差上候間宜敷相頼候段申述候處、夫ハ好キ事ナリ、宜敷氣張吳へ
ク申聞候ニ付、前書云々ノ儀モ有之弥決心罷成候、尤モ園田長照
方へ集会ノ盟約ニ付、午後三時頃ヨリ差越候處、平田才七・野間
口兼一・猪鹿倉保・大山綱助^(介)・菅井誠美・伊丹親恒・末広直方・
山崎基明・高崎親章・安樂兼道・土持高等追々米集イタシ、熟レ
モ見込ノ論ヲ立テ帰省ノ上ハ、各郷ヨリ私学校入校ノ者ハ固ヨリ
其外へ、名分ノ無キ師ヲ起スハ人臣トシテ有間シキト云議ヲ主張
シ、入校ノ面々且ツ入校志願ノ者共ヲ引離シ度トノ事ニ決議シ候
事、

一翌廿六日午後、川路利良旧宅当分明キ家ノ所ニ於テ、右人数集會ヲ期シ置キ、帰省ノ願書差出候処即刻許可相成リ、皆々參會ニ及ヒ候、其節評議ノ次第ハ、第一私学校ノ人数ニ離間ノ策ヲ用ヒ、我方二人数ヲ引入レ私学校ヲ互解セシメ、動搖ノ機ニ投シ西郷ヲ暗殺致シ、速カニ電報ヲ以テ東京ニ告ケ、海陸軍併セテ攻撃ニ及ヒ、私学校ノ人数ヲ驟ロシニイタシ候儀ヲ決定シ、電報ノ役ニハ園田・野間口、素ヨリ肥後境ノ者故熊本鎮台ニ駆付、是ヨリ電報ニ及フベキ事ト、其他報知ニ於テモ悉ク暗号相定メ、都テ決議ノ上明日ノ發程ヲ究メ候、併シ同時ニ發程候テハ外見ノ畏レモ是レアリ、面々仕舞次第ト取究メ、皆共帰宿致シ候事、

一同廿七日東京發程、横浜迄差越シ一泊、翌廿八日午後第九時玄海丸へ乗船出帆ノ処、船中殊の外不宜、諸所滯泊ニテ明治十年一月十一日着県、夫レナリ外出等モ致サス候得共、末広・高崎等參リ呉候儀ハ有之、何モ前書探偵ノ件々モハカドラス、折柄暗殺ノ密謀發覺イタシ、終ニ御捕縛ニ相成、右次第此度御取調ニヨリ、陸軍大將西郷隆盛ヲ川路利良ガ命ヲ受ケ、容易ナラザル儀ヲ差狭ミ、且ツ人心ヲ離間スルノ始末取企候次第、今更何共奉恐入候事、

右之通相違不申上候、以上、

明治十年二月五日

中原尚雄拇印

鹿児島県牛山郷

士族中警部

園田長照

同 出水郷

士族権中警部

野間口兼一

同 平佐郷

士族権中警部

末広直方

同 喜入郷

士族少警部

安楽兼道

同 加世田郷

士族少警部

土持 高

東京府士族

中警部

菅井誠美

鹿児島県市来郷

士族権少警部

高崎親章

同県下西田

士族一等巡查

樋脇賢助

同 加治木郷

士族二等巡查

伊丹親恒

同 谷山郷

士族書生

平田才七

同 加世田郷

士族同

大山綱介

同 加世田郷

士族同

猪鹿倉 保

同 平佐郷

士族同

田中直哉

同 高岡郷

士族権少警部

山崎基明

一自分共儀、明治九年一月以来追々警視庁警部其他拜命奉職罷在、
大山綱介・猪鹿倉保・田中直哉ハ書生ニテ親敷相交リ、然ル処同
年十一月頃ヨリ鹿児島私学校ノ人員何歟拳同是アル世評ニ付、探
偵トシテ帰省可致旨、大警視川路利良ヨリ内諭致承知、折柄大山
勘助ヨリモ右事件承候ニ付、同年十二月廿五日中原尚雄初メ外十
四名集会シ、熱レモ見込ノ議論ヲ立テ、私学校入校ノ者ハ素ヨリ
其外入校有志ノ面々エ離間ノ策ヲ廻シ、人心ヲ引放シ度決議候事、
一翌二十六日午後、川路旧宅明家ニ於テ亦集会ヲ期シ、帰省ノ願書
差出候処、即刻許可相成リ、皆々参会ニ及ヒ候、其節ノ評議ニ、
第一私学校ノ人員ニ離間ノ策ヲ用ヒ、我方ニ人数ヲ引入レ、私学
校ヲ瓦解セシメ、動揺ノ機ニ投シ西郷ヲ暗殺シ、速カニ電報ヲ以
テ東京ニ告ケ、海陸軍併テ攻撃シ、私学校ノ人数ヲ嚙口シニ致シ
候議ヲ決定シ、電報ノ役ニハ園田、野間口、素ヨリ肥後境ノ者故

熊本鎮台ニ駆付、是ヨリ電報ニ及フベキト、其他報知ニ於テモ悉
ク暗号相定メ、都テ決議ノ上明日ノ発程ヲ相究メ、尤モ同時ニ出
立候テハ外見ノ畏レモ是アリ、面々仕舞次第ト取究、皆共帰宿致
候事。

一同廿七日ヨリ翌二十八日迄ニ東京発程、明治十年一月中旬ニ至リ
孰レモ鹿児島着、前件探偵等モハカトラザル内密謀発覚イタシ、
終ニ御捕縛ニ相成、右ノ次第川路利良カ命ヲ受ケ、容易ナラザル
儀取企候始末、今更何共奉恐入候事、

明治十年二月七日

園田長照

野間口兼一

末広直方

安楽兼道

土持 高

菅井誠美

高崎親章

樋脇賢助

伊丹親恒

平田才七

大山綱介

猪鹿倉保

田中直哉

山崎基明

各々拇印

鹿児島県加治木郷

士族四等巡查

前田素志

同 帖佐郷

士族四等巡查

高橋為清

同 平佐郷

士族書生

柏田盛文

同 蒲生郷

士族四等巡查

松下兼清

同 加世田郷

士族二等巡查

西彦四郎

一自分共儀、明治九年九月以來追々警視庁へ奉職罷在候處、同年十

二月警部末広直方始メ其他、鹿児島私学校ノ者共容易ナラサル形勢ニ因リ、探偵方トシテ帰省ノ段粗々承リ、同ク探偵方トシテ帰省致度存シ、同月二十六日川路利良ノ内命ヲ受ケ、同県士族大山勘助へ帰省ノ願書差出候處、即刻許可相成リ、探索等精々心ヲ用ヒ、且ツ私学校人員入校志願ノ者ヲ離間イタシ候様、其他ノ儀共ハ末広等ノ指令ニ従フベキ旨承知致シ、尤モ集会等ニ一切關係不致候事、

一同日ヨリ翌二十八日迄銘々発程、明治十年一月中旬ニ至リ鹿児島エ着シ、前件探偵等モ不相叶内密諜発覚シ、終ニ御捕縛ニ逢候事、明治十年二月七日

前田素志

高橋為清

柏田盛文

松下兼清

西彦四郎

各々拇印

各区

正副戸長

本月十二日甲第九号布達奥書、該犯外ニ拾貳名之ヲ略スノ、拾壹字ハ取消候条、区内無洩更ニ可相達候事、

明治十年二月十三日 鹿児島県令大山綱良

前文之通御達候条、其支庁管下江御達方御取計可給候、此旨及御掛合候也。

二月十三日

本庁

227

番外

各区

正副区長

正副戸長

各分署詰警部ノ儀、当分ノ内区長兼勤申付候条、為心得此旨相達候事、

明治十年二月十六日

鹿児島県令大山綱良

228

各区

区戸長

皇大神宮大麻頒布方法、別紙通該宮司庁ヨリ掛合有之、就テハ主典八羽光謙儀不日出張可致趣申出候間、区内人民江懇々告諭可致置、此旨相達候事、

但第一 第三 第四 第五 第六 第七大区之儀ハ、一昨八年頒布相成候大麻・初穂料未納不都合候条、取纏至急相納可申候、
明治十年二月十七日 宮崎支庁

皇大神宮主典八羽光謙ト申者、此節日向国へ大麻頒布料取纏方トシテ出張候付、昨年同宮ヨリ五ヶ条ヲ以旧県庁へ依頼致置候趣、更ニ支庁ヨリ人民へ告諭相成度旨、懸合之處願出候間則及御照会候条、可然御処分有之度、此旨申進候也

二月三日

本庁

宮崎支庁

御中

皇大神宮大麻頒布方法

第一条

一大麻ハ毎歳九月迄ニ、神宮司庁ヨリ県庁へ通送致スヘキ事、

第二条

一県庁ニ於テハ十月ヨリ十二月限り各大小区へ引渡し、区戸長立会
祠官掌ヲシテ鄭重ニ取扱ハセ、毎戸遺漏ナク授与セシメ候様致シ
度候事、

第三条

一初穂金ハ区戸長之ヲ取纏メ、本年頒布ノ分ハ翌年ノ二月限り、初
穂金明細簿ヲ添ヘテ県庁へ差出サシメ度候事、

第四条

一全県下初穂金取纏、検査ノ上帳簿ハ県庁ニ留置キ、頒布入費ヲ仕
払、初穂金明細表ヲ添ヘ、三月迄為換券ヲ以熊本県神宮教会所へ
御送致相成度候事、

第五条

一初穂金ハ人民各自ノ信仰ニ任トイヘトモ、凡ソ平均壱戸金三銭ニ
至ルヲ度ト為シ、其拾分ノ二ヲ以テ地方ノ教費ニ充、神官教導職
ヲシテ大麻頒布ノ御趣意、滋徹底候様懇諭致サセ度候事、
前書条款概略ノ方法ニ基キ、實際施行ノ手續キ等ハ地方適宜ノ御処
分ニ預リ度候也、

229

甲第十号

管下地租改正ノ儀、此涯猶予候、此旨布達候事、

明治十年二月十八日 鹿児島県令大山綱良

230

番外

今般西郷隆盛等出京ニ付随行ノ面々、別紙雛形ニ基キ、庁下ハ来ル
廿八日限り、各郷ノ儀ハ来月十日ヲ限り、各区戸長ヨリ無遺漏取纏
メ可差出候、此旨相達候事、

明治十年二月十九日 鹿児島県令大山綱良

別紙

雛形

鹿児島県管下

第何大区何小区何番地

何方士族又ハ平民

— 57 —

候而者、実ニ為国家不容易次第ニ有之候旨申演候処、此末ハ如何成り立ツヘキヤ、如何力処分然ルヘキヤト被申候ニ付キ、之ハ私共ノ見ニ及間敷相答候処、先ツ鹿児島私学校ハ一体政府ノ為メニ一大腫物ノ如シ、仍テ我輩ノ工夫ニハ盛大ナル学校ヲ設立シ、少年輩ヲシテ学問ノ方向ヲ定メシメ、同校人数ヲ離間シ、諸郷ニモ同様着手イタシ、漸次腫物ヲ小サクスルニ如スト承リ候事、

一同二十九日申来候ニ付罷越候処、三十一日ノ飛脚船ヨリ出立候様、尤モ鹿児島ノ人氣ハ起リサメ仕易キ国柄故、兎角二三月頃カ懸念ニ被思、且ツ陸軍省ヨリ彈藥等取寄候手都合モ有之、通例ノ事ナラ郵便又ハ電信ヨリ被申越度、而シテ動搖甚敷時分ハ乍御苦勞直ニ駈付ケ呉レ度、其節ハ郵便ハ止リ電信ハ切ル、ニ違ヒナシ、其上陸軍等ノ用意ハ成程非常ニ備ルト云モノ、確タル報ナラデハ人民ノ騒キニモ相成ル事故、其節ハ直ニ駈付ケ呉候様、殊ニ警視庁ヨリモ探索差出シ有之候、皆必死ノ格護ニテ先キ達テ出立セリ、暴発等ノ節ハ自ラ大小為ス所アルヘシト懇々被申演候ニ付、其意ハ畢竟主任ノ人ヲ斃スカ、又ハ火藥庫ニ火差入ル等ノ事ニテ、随分仕果スヘクト汲受ケ、左様ノ事ナラ承知仕候旨相対候処、金百圓報知ノ路費トシテ被差出候ニ付受納イタシ、而シテ此度貴公事ハ誰モ知ラヌコト故其段ハ深ク可差含、尤モ先達テ差出候探索人名ハ是ナリ、為心得トテ半切紙ニ書キタル人名ヲ出サレタリ、一見スルニ、何等警部或ハ何等巡查、或ハ書生ノ片書ト郷名有之候其書面ハ、警視庁ヨリ廻リ来タルモノニテ候事、

一同年一月三十一日東京出立、神戸ヨリ迎陽丸ニ乗組ミ帰県候処、中原尚雄等警視庁ヨリ内諭ノ次第發覺イタシ、御捕縛相成候段承リ、自分ニ於テモ前書承知イタシ候件々、彼等右次第ニ付テハ今

更着手ノ道無之、大書記官田畑常秋工大略申出、深重ノ処ハ包蔵イタシ居候処、再ヒ御喚出相成第一分署工差廻サレ、猶御取調ノ末前件形行申出候事、

右ノ通相違不申上候、以上、

明治十年二月十三日

野村 綱母印

235

日向国第九大区

区戸長

其区郵便差立定日ヲ除ノ外、此際至急御用状ニ限り、村繼ヲ以往復可致、此旨相達候事、

但費用之義ハ区費ト可相心得事、

日向国第六大区

区戸長

其区ヨリ^{一大区ハ}_{第八 第九}区へ差立郵便定日ヲ除ノ外、此際至急御用状ニ限り、村繼ヲ以送付可致、此旨相達候事、

但費用ノ儀ハ区費ト可相心得事、

十年三月一日

宮崎支庁

236

日向国各区

区戸長

今般騷擾ノ際、一時閉庁候様鹿児島裁判所長大塚五等判事ヨリ達有之候条、来ル五日ヨリ閉庁致シ候事、

但当局下滞在之詞訟人ハ、本日ヨリ勝手ニ帰村可致事、

前書之通、鹿児島裁判所宮崎支庁ヨリ掛合有之候条、区内無洩可触示、此旨相達候事、

十年三月三日

宮崎支庁

237

日向国第三大区

区戸長

其区内各小学督視トシテ、旧中属桜井忠徳巡回申付候ニ付、不日出張可致、為心得此旨相達候事、

十年三月三日

宮崎支庁

238

当支庁所轄各区

正副区戸長

此涯郵便局引払云々之儀、本庁ヨリ番外ヲ以達相成候处、当支庁所轄郵便局之分ハ据置度旨本庁ヘ伺置候間、何分相達候处、従前通郵便局据置事務為取扱候条、該局ヘモ可申通、此旨相達候事、

明治十年三月三日

宮崎支庁

239

日向国第九大区

区長

過般巡查募集之儀相達置候处、詮議ノ次第有之右達取消候条、此旨相達候事、

十年三月五日

宮崎支庁

240

日向国第十三大区

区長

其区高城ヨリ募集候巡查、総テ解職ニ付、右人名之内ヨリ更ニ壹名精選人当可申出、此旨相達候事、

十年三月五日

宮崎支庁

241

日向国第三大区

区長

其区ヨリ募集候巡查廿名、総テ御用済ニ候条、右人名之内ヨリ更ニ四名精選人当至急可申出、此旨相達候事、

十年三月五日

宮崎支庁

242

日向国第十二大区

区長

其区荘内ヨリ募集候巡查、総テ解職候ニ付、右人名之内ヨリ更ニ二名精選人当可申出、此旨相達候事、

十年三月五日

宮崎支庁

243

番外

帯刀禁制之儀ハ先般御布告相成居候处、此節体無何ト右之制令相解ケ候様心得違候哉、帯刀通行之者共間々有之、当時態尚更御布令ヲ遵守シ、人心平穩聊失体之儀無之様心掛勿論之事候条、向後屹ト不守之儀有之間敷候、此旨無洩布達可致事、

明治十年三月五日

鹿児島県令大山綱良

244

当支庁所轄各区

区戸長
当支庁所轄郵便局開閉之儀ニ付本庁へ伺置候間、何分相達候迄云々
先般達置候処、伺之通り従前之俣開局被聞届候条、此旨該局へモ可
相達候事、

十年三月八日
宮崎支庁

其支庁郵便局開キ方云々、此節蘭田道真出庁上局へ相窺候処、伺通
リ聞届相成候付、早々相開キ候様可被取計、此旨及御照会候也、

本庁

十年三月八日
第一課

宮崎支庁

245
番外

当裁判所、当分之内閉庁候条、此旨布達候事、

明治十年三月九日
鹿児島裁判所長

五等判事大塚正男

前書之通、鹿児島裁判所ヨリ縣合有之候条、此旨布達候事、

明治十年三月九日
鹿児島県令大山綱良

246

当支庁所轄各区

区戸長

陸軍大将西郷隆盛外二名上京途中、熊本県下ニ於テ不計兵端相開ケ
戦争ニ及候趣道路に流伝、人心胸々不穩義モ有之哉ニ相聞、甚以不
都合候条、本年甲第九号布達ニ依リ、人民保護上今一層尽力、民心
安堵營業候様懇諭可致、且警視局巡查等出張或ハ沿海各港へ入艦等

247

有之節ハ、平穩無事ヲ以応答可致、此旨嚴達候事、

十年三月十日
宮崎支庁

当支庁所轄各区

区戸長

此際各区ヨリ鹿児島表へ差越候者、当支庁下ハ当庁へ相付、其他該
区ハ区戸長聞届之上、大小区事務扱所之鑑札ヲ以通行候様、区内無
洩至急可触示、此旨相達候事、

但各大小区事務扱所之鑑札為見本、管轄分署并通行之郷々へ差廻
置ベク候間、別紙雛形ニ依リ三拾枚調整シ、至急可差出候事、

十年三月十日
宮崎支庁

鑑札

日向国第何大区何小区

族籍

何之誰

右之者^{公私有}ノタメ何々迄罷越候旨届出候間、途中無異儀御通可
有之候也、

日向国第何大区何小区

事務扱所印

年月日

各駅々

津口

248

番外

別紙ノ通、磯邸・山下邸工御達相成候ニ付、此旨布達候事、

但磯邸ノ勅書ニハ忠義ト有之候事、

明治十年三月十二日 鹿兒島県令大山綱良

別紙

勅書写

鹿兒島県下逆徒熊本県ニ乱入、朝憲ヲ蔑如シ、官兵ニ抗シ忼乱ノ拳動ニ及フ、朕既ニ征討ノ令ヲ布キ、二品親王有栖川熾仁ヲ以テ征討総督ト為シ進發ヲ命セリ、汝久光実ニ国ノ元功、朕カ素ヨリ信重スル所、今特ニ議官柳原前光ヲ遣シ、朕カ旨ヲ諭サシム、其能ク爾ノ誠意ヲ致セヨ、

249

番外

先般布達ニ及置候中原尚雄等口供之趣ハ、上中ニ及ヒ決裁ヲ相待候処、其際ニ当リ西郷隆盛以下之者共、上京ノ途中既ニ征討被仰出候、然トモ中原尚雄等口供ノ趣ハ、尚其筋ニ於テ軋彈ヲ經、至当ノ御処分有之ヘキ為メ、今般勅使護衛ノ巡查ヲ以テ上国ニ護送セラレ候条、管下人民深ク此意ヲ了知シ、流言浮説ニ惑ハス各々安堵可致、此旨相達候事、

明治十年三月十二日

鹿兒島県令大山綱良

250

番外

拙者事、今般勅使随行ニテ出京候ニ付、不在中大書記官田畑常秋代理致シ候条、此旨相達候事、

明治十年三月十二日

鹿兒島県令大山綱良

251

番外

此際為取締、管内往来且他県エ出行ノ者エ、第四課ヨリ通行鑑札相

渡候条、各区帰宅ノ者ハ勿論他県出行ノ者、出船ノ場所等追々最寄分署、又ハ区戸長役所ニ可差出置旨申渡置候ニ付、返納次第取纏メ置、月末第四課ニ可差出候、此段布達候事、

但宮崎支庁并該区正副戸長聞届ノ上、差出候鑑札返納方ノ儀モ、本文ノ通可取計事、

明治十年三月十二日

鹿兒島県令大山綱良代理
大書記官田畑常秋

252

今般勅使当県へ臨降、逆徒征討被仰出候ニ付テハ、右党類ノ者共潜カニ各区往来致候儀モ難計候ニ付、一層取締嚴重ニ申付候条、万一類似ノ者有之候ハ取軋之上拘引致シ、姓名住所等細詳取調至急可届出、此旨相達候事、

十年三月十七日

鹿兒島県令大山綱良代理
田畑常秋

253

番外

方今不良ノ徒所々ニ潜匿、放火強盜等ノ悪事ヲ生スルモ難図ニ付、夫々見聞ヲモ掛置候条、嚴密取締向可届者勿論ノ事候得共、万一不審之者有之候ハ、速ニ最寄分署屯所又者区戸長へ可致報告、此旨布達候事、

明治十年三月廿日

鹿兒島県令大山綱良代理
大書記官田畑常秋

254

日向国第六大区

区戸長
第七大区
区戸長
第十五大区
区戸長
第廿六中学区各小学督視トシ、旧中属桜井忠恒巡回申付出張致候ニ付、為心得此旨相達候事、
十年三月廿八日
宮崎支庁

255
番外

各区

正副区長

今般各区へ警部巡查出張候条、諸事協議ヲ遂ケ、取締向等行届候様可取計、此旨相達候事、

鹿児島県令大山綱良代理

大書記官田畑常秋

明治十年三月廿九日

256

当支庁所轄各区々戸長へ

本庁直轄郵便局一時引払之處、今般更ニ本線路郵便局ニ限り開設相成候条、区内無洩可触示、此旨相達候事、

十年四月四日

宮崎支庁

257

当支庁所轄第一第二第五

第八第九大区

正副区長

258

番外

其区正副区長欠員有之候處、本庁ヨリ別紙ノ通掛合越候ニ付、人当見込相立可申出、尤人撰見込無之候ハ、本庁ニ於テ撰挙可相成候条、否往返ノ外二日限り取調可申出、此旨相達候事、

但當時ノ人員ニテ御用相弁シ、且民費ノ都合ニヨリ増員願相成義

モ候ハ、其段可申出、右申添候、

十年四月十三日

宮崎支庁

大書記官田畑常秋儀、病氣ノ處今曉死去候条、此旨布達候事、
明治十年四月十六日
鹿児島県庁

259

第七十九号

鹿児島県

這般熊本城下ノ賊徒悉ク征討、残賊矢部ヲ経日向路ニ脱逃候ニ付テハ、自然其県下ニ潜伏ノ儀モ難計候条、嚴重搜索ヲ遂ケ、無遺漏捕縛可致候、此旨相達候也、

明治十年四月十二日

征討総督本營

右之通御達相成候条、此旨布達候事、

明治十年四月十九日

鹿児島県

日向国第一大区ヨリ第九大区迄
及第十五大区

区戸長

大書記官田畑常秋死去ニ付、人民諸願伺書等、以来何分相達候迄、
鹿児島県庁宛ニテ可差出、此旨相達候事、

十年四月廿四日

宮崎支庁

261 別紙之通御達相成候条、此旨相達候也、

但銘々請書可差出候、

四月廿七日

鹿児島県庁

宮崎支庁詰警部

二伸、管轄之郷出張警部等へモ、其署ヨリ至急通達可有之候也、

別紙

鹿児島県

其県警部并巡查被廢候事、

明治十年四月廿七日

征討総督本営

262

各区々戸長

別紙二通ノ通御達相成候条、此旨布達候事、

明治十年四月廿七日

鹿児島県庁

別紙

第七号

四等判事従五位岩村通俊

任鹿児島県令

右、宣下候事、

明治十年三月

太政官

別紙

第貳号

渡辺千秋

任鹿児島県大書記官

右、宣下候事、

明治十年四月

太政官

263 別紙之通御達相成候条、此旨布達候事、

明治十年四月廿七日

鹿児島県

別紙

行在所達第六号

各官庁

鹿児島県令従五位大山綱良儀官位被褫候条、為心得此旨相達候事、

明治十年三月十七日

太政大臣三条実美

264

鹿児島県

其県士族陸軍大將正三位西郷隆盛・陸軍少将正五位桐野利秋・陸軍少将正五位篠原国幹、徒党ヲ集合シ悖乱ノ挙動ニ及候ニ付、官位被褫候条、此旨相達候事、

明治十年二月廿五日

太政大臣三条実美

別紙ノ通御達相成候条、此旨布告候事、

明治十年四月廿七日

鹿児島県

別紙

鹿児島県

其県下嘯集ノ暴徒、曩日熊本県下ニ乱入、以来県下ノ人身不穩、追々凶徒ニ応シ終ニ非命ノ死ニ就ク者不少、天皇深ク之ヲ憂慮ヒ給ヒ、親シク反正帰順ノ道ヲ開カセラレンカ為メ、勅使ヲ被差立候処、彼等毫モ之ヲ悟ラス、弥暴威ヲ逞セント欲スト雖モ、遂ニ挫折シテ

宮崎支庁
御中
四月廿七日

当支庁管轄各区

第一課

本庁

前書之通相達候付、其管下各区々長并戸長一名ツ、至急当課へ出頭候様達方御取計給度、此旨及御依頼候也、

鹿兒島県

四月廿七日

征討総督本営

御用有之候条、其県管下各区々長并戸長、至急出當候様可相達候也、但触書之儀ハ刻付ヲ以早々達方可取計、尤夫々承知の受書為差出可申候也、

別紙

十年四月廿九日

宮崎支庁

別紙式通本庁ヨリ相達候条、区戸長之義ハ速ニ出頭候様可致、此旨添テ相達候事、

明治十年四月廿七日

征討総督二品親王有栖川熾仁

今日ノ敗衄ニ及フ、於是熊本県下ヲ去リ、日州ヲ經テ其県下ニ歸リ、再ヒ良民ヲ害スルノ憂アラシモ難計ニ付、今般更ニ陸海軍ノ兵員ヲ派遣シ、以テ人民ノ安寧ヲ保護シ、正路ニ帰セシムルノ御趣意ニ候条、一般ノ人民無疑念各職業ヲ営ミ、決シテ動揺セサル様、至急管下へ無漏諭達可致候事、

当支庁管轄各区

正副区長

肥後表へ出張致シ候者名簿之義、別紙之通本庁ヨリ相達候、然ル処是迄追々名簿差出候大区モ有之候得共、認方区々ニ而一体ナラス、且其後ニ至リ出張致シ候者於有之者、人員致齟齬候モ難計候ニ付、最前之届書ハ総而取消候条、別紙達書ニ基キ出張致シ候者之氏名并戦死之訳、至急取調更ニ可差出、此旨相達候事、

明治十年四月廿日

鹿兒島県令代理

真田 庵
柿原義則

前書ノ通被相達候条、此旨至急布達候事、

鹿兒島県庁

明治十年四月廿七日

征討総督本営

右之通諸人通行差免置候処、今三十日ヨリ以来夜中通行者一切差止候条、此旨相心得、即刻管下人民へ無漏可相達候也、但昼間通行ノ儀ハ従前ノ通タルヘキ事、

一天神馬場通
一山口馬場通

一本新橋通

去ル廿六日夜中、軍艦附属艦共十一艘、突然本艦兵隊上陸之趣本庁ヨリ相達候ニ付、此段為心得相達候事、

十年四月廿九日

宮崎支庁

正副区長

十年五月一日 宮崎支庁

269 当支庁所轄各区 区戸長

別紙之通、寛典ノ処分ニ諭達相成候付テハ、当時帰郷潜伏之者有之候ハ、該職ニテ懇々説諭、前非悔悟帰順速ニ自首可為致、且戦地へ届捨ニテ出張之者へモ篤卜通知可致、此旨添テ相達候事、

十年五月一日 宮崎支庁

別紙

各区戸長

嚮ニ県下ノ人民賊徒ニ党与スル者モ、帰順自首スル者ハ寛大ノ御処分モ可有之、且又負傷ノ者療養ノ為メ帰郷シ、先非ヲ悔悟スル分ハ施療被遣候ニ付、押隠シ充分ノ治療届兼候テハ憫然ノ至リニ付、致告諭置候儀モ有之ニ付テハ、精々細密ニ取調候様可致、若シ潜伏シ自首セス、又容隠シテ不告者於有之ハ、不容易儀ニ付篤卜御趣意ヲ弁明シ、各区郷村ニ至ル迄懇々説諭可致候也、

明治十年四月廿九日 鹿兒島県令岩村通俊代理 御用係 真田 庵 柿原義則

270 各区戸長

拙者儀、今般当分鹿兒島県令之心得ヲ以事務取扱被 仰付候条、此旨布達候事、

明治十年五月一日 鹿兒島県令心得 海軍大佐仁礼景範

271 当港出入大小船之儀、是迄昼夜共差構無之候処、以来御用船除クノ

外夜中出入差止候条、此旨至急管下へ無漏可相達候也、 明治十年五月一日 征討総督本営

鹿兒島県

右、本営ヨリ被相達候条、此旨布達候事、

鹿兒島県令心得

明治十年五月一日 海軍大佐仁礼景範

272 当支庁所轄各区 区戸長

諸願伺届等名宛ノ儀、何分相達候迄県庁宛ニテ可差出旨、過般相達置候処、今般県令心得差入相成候ニ付テハ、岩村県令入県迄之处左ノ通相認可差出、此旨為心得相達候事、

十年五月五日 宮崎支庁

鹿兒島県令心得

海軍大佐仁礼景範殿

(文書題第志号ノ第四十二号ハ省略ス)

273 第一号

拙者儀、三月廿一日鹿兒島県知事ニ 宣下相成、則大書記官渡辺千秋始官員一同、今二日着候条、此旨布達候事、

明治十年五月二日 鹿兒島県令岩村通俊

274 第貳号

先般西郷隆盛等旧兵隊ヲ卒ヒ出京ノ儀ニ付、前県令大山綱良ヨリ中原尚雄等ノ口供相添布達セシ趣モ有之候処、元来臣子ノ分ニ於テ兵力ヲ要シ、天兵ニ抗抵候者其罪固ヨリ誅ヲ容レス、加フルニ、右口供ノ如キモ拷問ノ上出来候者ニテ、全ク以テ信拠スヘカラサル儀ニ有之、然レ共尚東京ニ於テ裁判所ヲ開カレ、大山綱良ハ勿論其他夫々糾問ヲ遂ケラレ候ニ付、遠カラス至理至当ノ御処置可相成ハ必然ノ義ト存候条、万一曩ニ大山綱良ヨリ布達セシ旨趣ヲ妄信シ、方向ヲ誤リ、他日悔ヲ取り候儀有之候テハ実ニ不相濟候間、心得違無之様可致、此旨諭達候事、

明治十年五月二日

鹿児島県令岩村通俊

275

第二号

今般暴拳ノ際、賊ノ脅迫ヲ受ケ不得已米金ヲ出シ、或ハ雑役ニ使用セラレ候者共ニ於テハ、寛典ヲ以テ其罪ヲ問ハセラレズ候条、可致安堵、此旨布達候事、

明治十年五月二日

鹿児島県令岩村通俊

276

第四号

今般暴拳ノ際、士民間々方向ヲ誤リ、或ハ脅迫セラレ戦地ニ臨ミ、傷痍ヲ受ケシ者可有之、依テ今般赴任ニ際シ、熟練ノ医員且藥品等相提携シ、新ニ病院ヲ設置シ、一切官費ヲ以テ療養^(給カ)ヲ為致候条、朝廷至仁ノ御趣意ヲ厚ク体認可致、万一等閑ニ打拾置^(拾カ)、非命ノ死ニ陥リ候テハ遺憾不少候間、都テ傷痍ノ輕重ニ拘ハラス、至急申出治療ヲ受クヘク、此旨布達候事、

明治十年五月二日

鹿児島県令岩村通俊

277

第五号

曩ニ西郷隆盛等旧兵隊ヲ卒ヒ肥州ニ乱入シ、其勢猖獗ヲ極候ニ付、已ムヲ得サセラレス 御征討被 仰出候末、賊軍大敗、一ハ人吉ニ遁逃シ、一ハ日向路ニ潰走候趣ニ付、之ヲ要スルニ不日鎮定ニ立到候間、孰レモ安堵致シ聊動揺致ス間敷候、此旨布達候事、

明治十年五月二日

鹿児島県令岩村通俊

278

第六号

今般拙者始当県官員一同入県、尚海陸軍ヲ追々被差向候御趣意ハ、全ク当県下鎮靜ヲ被為要候深キ御仁恵ノ 朝旨ニ有之、然ル処此際人民ニ於テ狐疑ヲ抱キ、漸次産ヲ捨テ他方ヘ立退候者モ有之趣ニ相聞ヘ、以ノ外ニ候、此後縦令残賊再帰ノ形勢有之候トモ、海陸軍ヲ以テ充分御処置可相成ニ付、何レモ安堵營業決シテ散乱不致様可相心掛、尚已ニ散乱候者ハ、前件ノ趣意区戸長又ハ其親族共ヨリ精々可申論、此旨諭達候事、

明治十年五月二日

鹿児島県令岩村通俊

279

第七号

鹿児島裁判所三月十一日閉庁候処、本月四日ヨリ開庁事務取扱相成候条、訴状等総テ該裁判所長六等判事寛元忠名宛ニテ、同庁ヘ差出可申、此旨相達候事、

但宮崎支庁之儀モ追テ開庁相達候迄、訴状等本庁ヘ差出可申事、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

280

第八号

海軍大佐仁礼景範

当分鹿児島県令ノ心得ヲ以御用取扱被仰付置候処、不及其儀候事、

明治十年五月二日

征討総督本営

右被相達候条、為心得此旨布達候事、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

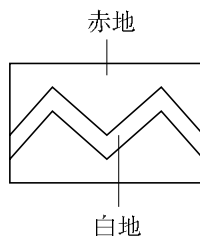
281

第九号

鹿児島港出入之船舶ハ、目今非常警備之際ニ付、出帆前積荷・乗客等巨細相記シ、当直軍艦へ屹度可届出、此段布達候事、

但当直軍艦エハ左ノ標旗相掲ゲ有之候ニ付、此段モ可相心得候事、

当直軍艦標旗雛形



明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

282

第拾号

今般暴挙ノ際、一時方向ヲ誤リ、及賊徒ニ脅迫セラレ、不得已附和従軍セシ者更反正帰順、前非ヲ悔悟シ謝罪自首スルニ於テハ、速ニ征討総督宮へ具上シ、寛典ノ御処置ヲ可仰候条此段相心得、反正帰順ノ者ハ速ニ可申出、此旨布達候事、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

283

第拾壹号

県下磯海軍造船所前通往還ノ儀、哨兵差出方ノ都合有之、本日ヨリ通行差止候条、此旨管下一般へ可相達旨、征討総督本営ヨリ御達有之候ニ付、此段為心得布達候事、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

284

第十二号

今般県庁構内第四課中ニ帰順掛ヲ置キ候間、反正悔悟ノ者自首ノ節ハ戸長ノ奥印ヲ受ケ、直ニ右四課へ申出候様可致、此旨布達候事、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

285

第十三号

暴徒追々襲来候哉ニ相聞候条、庁下哨兵線外之人民立退候様、至急可相達候也、

但哨兵線内之人民ハ立退ニ不及候事、

明治十年五月四日

征討総督本営

右之通御達相成候条、此旨布達候事、

明治十年五月四日

鹿児島県令岩村通俊

286

第十四号

暴徒追々襲来之模様ニ付、兵備之都合有之、陸地哨兵線ノ往来相禁シ、且御用船ヲ除クノ外大小船舶入港差止候条、此旨至急其向へ可相達候也、

但出港ノ船舶ハ検査之上、不都合無之候ハバ差構無之候也、

明治十年五月四日

征討総督本営

右之通御達相成候条、此旨布達候事、

明治十年五月四日

鹿児島県令岩村通俊

287

第十五号

今晩開戦以來火災ニ罹リ、目下凍餒ニ迫リ候者ハ、御規則ニ照シ救恤可取計候条、速ニ県庁ヘ可申出、此旨布達候事、

明治十年五月五日

鹿児島県令岩村通俊

288

第十六号

告諭書

管下嘯集ノ暴徒、一旦肥州ニ乱入シ王師ニ抗抵シ、其罪素ヨリ誅ヲ容レス、因テ不被為得已御征討被仰出候次第ニ有之、然ルニ其本原タル、当初前県令大山綱良ヨリ中原尚雄以下ノ口供相添布達セシ趣意モ有之、右口供ノ如キハ拷問ノ上出来セシ者ニテ、全ク以テ信拠スヘカラサル儀ニ有之、然共尚東京ニ於テ裁判所ヲ開カレ、大山綱良ハ勿論其他夫々糾問ヲ遂ケラレ候ニ付、不遠至理至当ノ御処置可相成ハ必然ニ有之、曩ニ大山綱良ヨリ布達セシ旨趣ヲ妄信シ方尙ヲ誤ルヘカラス、殊ニ賊鋒挫折シテ今日ノ敗北ニ及ヒ、日州ニ潰走スルヲ以県下ニ復帰シ、再ヒ良民ヲ可害モ難計ニ付、朝廷深ク人民ノ保護ヲ要セラレ、現今鹿児島表ニ海陸軍及ヒ警視隊ヲ派遣セラレタリ、然リト雖モ暴徒ニ脅迫セラレ附和随行セシモノ、其他前非ヲ悔悟シ謝罪自首スルニ於テハ、速ニ征討総督ヘ具状ヲトゲ、寛典ノ御処置ヲ仰クベク、加之タトヘ一時賊軍ニ党シ戦地ニ臨ミ、傷痍ヲ受ケシモノト雖トモ、至仁好生ノ御趣意ヲ以テ、一切官費ヲ以テ療養可為致事ニテ、已ニ通俊赴任ニ際シ、熟練ノ医員且藥品等相

289

第十七号

提携シ、新ニ病院ヲ設置シ、人民非命ノ死ニ陥ラサル様厚ク注意シ、速ニ開院候条、此等朝意ノ在ル処ヲ衆人ニ告示シ、一人タモ良心ヲ感發セシメ、且非命ノ死ヲ救ヒ度志念禁スル能ハス、仍テ告諭ス、各自早ク之レヲ監ミ、反正帰順スル処アレ、

明治十年五月三日

鹿児島県令岩村通俊

先般暴拳ノ際一時方向ヲ誤リ候者、先非悔悟ノ上致改心帰順度面々ハ、左ノ雛形通書面相添戸長奥印ノ上、本人或ハ親戚ヲ以至急可申出候、此旨相達候事、

明治十年五月四日

鹿児島県令岩村通俊

雛形

従軍ノ者帰順并療養願

自分儀先般暴拳之節、(一時方向ヲ誤リ脅迫セラレ)従軍仕候処、実ニ心得違ニテ、更ニ改心帰順仕度、且戦地ニ於テ負傷仕候間、病院ニテ療養被仰付度奉願候、以上、

本籍

年月日

何ノ誰印

県令宛

右之通相違無御坐候、依テ奥印仕候也、

戸長

何ノ誰印

金穀差出候者帰順願

自分儀、先般暴拳ノ節、一時方向ヲ誤リ或ハ脅迫セラレ、

金何門差
米何石

出候段実ニ心得違ニテ深ク悔悟仕、今更奉恐入候、此段奉山上候、以上、

本籍

年月日

何ノ誰印

県令宛

右之通相違無御坐候、依テ奥印仕候也、

戸長

何ノ誰印

290

第十八号

此程賊徒襲来ニ付、去ル四日哨兵線外之人民過急立退ノ儀相違候、以来引続キ各処兵火ニ相成候ニ付テハ、右人民ノ中已ニ目下飢餓ニ迫リ候者モ有之哉ニ相聞、実ニ不耐愍然候、依テ右等困窮ノ者ハ例規ニ照シ御救助相成候間、右救助ヲ受度者ハ、直ニ左衛門坂上女学校ヘ罷出願意可申立、此旨布達候事、

明治十年五月七日

鹿児島県令岩村通俊

291

第十九号

従前相渡置候通行印鑑相廃シ、更ニ印鑑可相渡候条、本日午後第六時迄ニ引替可申出、此段相違候也、

明治十年五月八日

鹿児島県令岩村通俊

292

第二十号

桜島・垂水辺ヨリ、魚類其他ノ食物前ノ浜ヘ積来営業致シ度者ハ、通船差許鑑札相渡候条、右営業望ノ者ハ米十一日迄二人名取調置可

中、此旨相違候事、

但追テ相違候迄ノ間、夜中ハ一切通船ヲ禁シ候也、

明治十年五月九日

鹿児島県令岩村通俊

293

第二十二号

本年四月中、当県下撫育・承恵両社ノ名ヲ以発行致候金券ノ儀、往々管内一般流通致居候趣ニ相聞候処、右ハ其实紙幣類似ノ品ニテ甚不都合ノ至ニ候条、追テ何分ノ儀可相違候得共、先以通用之儀ハ嚴重ニ令禁止候条、管内人民誤テ右金券ヲ受授シ、他日後悔無之様可致、此旨布達候事、

明治十年五月十日

鹿児島県令岩村通俊

294

第二十三号

今般兵火ニ罹リ又ハ産業ヲ失ヒ、目下飢餓ニ迫ル者ハ御救助被仰付候、則左ノ三ヶ所救恤取扱所相聞候条、各最寄取扱所エ可願出候、最右出願ノ為メ哨兵線通行之儀ハ、非常警備之際ニ候得共、先以日中ニ限り、十歳以下七十歳以上之男子并婦人ハ年齢ニ拘ハラズ、無鑑札ニテ通行被差許候条、其旨可相心得、此段布達候事、

吉野橋近傍

入来院邸

武ノ橋近傍新屋敷

三原左吉邸

千石馬場

諏訪甚六邸

明治十年五月九日

鹿児島県令岩村通俊

295

第二十三号

過日開戦ノ際、一時立退キ候輩ニテ、此節自宅ヘ立戻リ度者、及兵

火ノ為メ居宅焼失致シ、他ニ寄り処無之者等有之哉ニ付、右等之内十歳以下七十歳以上之男子及婦人ハ、年令ニ不拘当分無鑑札ニテ哨兵線通行差許候条、取調之上相違無之候ハ、上方限ノ者ハ吉野橋近傍入米院邸、下方限ノ者ハ千石馬場諏訪伊勢邸、并武ノ橋近傍新屋敷三原佐吉邸救恤取扱所へ護送致候様、各部下工無遺漏至急可被相達候也、

但夜中ハ此限ニ非サル儀ト可相心得事、

明治十年五月九日

川村參軍

曾我少将殿

高島少将殿

田辺中佐殿

右ノ通、川村參軍ヨリ各旅団工相達候旨達有之候ニ付、此旨布達候事、

明治十年五月十日

鹿児島県令岩村通俊

296

第二十四号

十歳以下七十歳以上之男子及婦人ハ、年令ニ不拘当分無鑑札ニテ哨兵線通行、并荷物・米金等ノ類無差支出入為致候条、為心得此段布達候事、

但本文ノ儀ハ日中限ト可相心得候事、

明治十年五月十日

鹿児島県令岩村通俊

297

第二十五号

此程追々哨兵線内へ立戻り候者共ノ内、家財道具ヲ取纏メ線外へ持運ヒ候者有之哉ニテ、防禦線ノ障碍不少候ニ付、此涯食物ヲ除クノ

外、線外へ荷物持出候儀差止候段、征討本営ヨリ達有之候条、此段為心得布達候事、

明治十年五月十一日

鹿児島県令岩村通俊

298

第二十六号

県下賊徒共、追テ夫々御処分モ可有之候得共、其家族等ニ至リテハ素ヨリ其ノ罪ヲ問ヘキ筋ニ無之、此際篤ク御救助ヲモ被仰付候次第柄ノ儀ニ付、右等心得違ヨリ銘々散乱等ノ儀無之様可致、此旨布達候事、

明治十年五月十一日

鹿児島県令岩村通俊

299

第二十七号

一玄米二百二十二俵

右ハ哨兵線外焼失之節、琉球邸近傍之倉庫ニ積置有之候処、今般県庁内工取入置候ニ付、所有主ハ速ニ県庁へ可申出、此旨触示候事、

明治十年五月十二日

鹿児島県令岩村通俊

300

第二十八号

汐見町元郵便局へ救恤取扱所相開候ニ付、御救助願出候者ハ、都而本月九日第二十二号布達ノ通可相心得、此段布達候事、

明治十年五月十二日

鹿児島県令岩村通俊

301

第二十九号

哨兵線内士民立退跡ノ土蔵等へ、何者共不知猥ニ立入家財等引出シ、

其俣捨置候場所相見候ニ付、人民保護上ニ於テ難差措次第二付、官員派出ノ上散乱ノ物品ヲ取纏メ、此上ノ損害防止ノ為メ封印取計置候間、追テ帰家ノ上申出次第解封可致候条、此旨為心得布達候事、
明治十年五月十四日
鹿児島県令岩村通俊

302
第三十号

今般兵火ニ罹リ飢餓ニ迫ル者ハ、夫々御救助被仰付候旨、第二十二号ヲ以及布達置候得共、尚家屋焼失ニ及ビ、目下雨露ヲ凌キ兼候者於有之ハ、御規則ニ照シ小屋掛料可貸下候条、早々可願出、此旨布達候事、
明治十年五月十五日
鹿児島県令岩村通俊

303
第三十一号

行在所布告第四号
米ル十七日西京 御発輦、還幸被 仰出候条、此旨布告候事、
但神戸・横浜間御航海之筈ニ候事、
明治十年五月三日
太政大臣三条実美
右之通被 仰出候条、此旨布達候事、
明治十年五月
鹿児島県令岩村通俊

304
第三十二号

行在所布告第五号
米ル十七日 還幸被 仰出候条、御都合有之御延引被 仰出候条、
此旨布告候事、
明治十年五月十二日
太政大臣三条実美

305
第三十三号

右之通被 仰出候条、此旨布達候事、
明治十年五月廿二日
鹿児島県令岩村通俊
本日四日第十七号ヲ以テ、従軍ノ者婦順願等ノ儀布達致シ置候条、右願書々式ノ内へ猶左ノ廉々ヲ区別シ可差出、其他療養願及ヒ願書へ戸長奥印等ノ儀ハ、総テ同号布達ノ通り可相心得、此旨重テ布達候事、
但本文ノ通、戸長奥書ヲ要シ候儀当然ニ候得共、此節戸長不居合場所ハ、当分ノ内奥書無之指出候共不苦、尤右等ノ分ニ限り、保証ノ為メ本人又ハ親族等呼出シ、願意一応取調可致事、
一方向ヲ誤リ或ハ脅迫セラレ出軍セシ区別
一私学校へ入り或ハ入ラサル区別
一海陸軍製造局彈藥強奪ニ関係ノ有無
一士官或ハ卒・伍ノ区別
一入隊ノ名号及ヒ隊長等ノ氏名
一戦争ヲ為スト為サルノ区別
明治十年五月廿日
鹿児島県令岩村通俊

306
第三十四号

今般桜島ノ内赤水村へ当分仮出張所ヲ取設、米ル二十五日ヨリ事務取扱候条、差向候願伺等ハ同所へ可差出、此旨布達候事、
但仮病院ヲモ仮出張所内ニ設置シ、医員相詰且藥品等備置候ニ付テハ、曩ニ第四号ヲ以布達候通、負傷者ハ一切官費ヲ以テ療養為致候、此段為心得更ニ申添候事、

明治十年五月廿四日 鹿兒島県令岩村通俊

307 第廿五号

去ル九日二十二号ヲ以布達候通、今般兵火ニ罹リ又ハ産業ヲ失ヒ、目下飢餓ニ迫ル者ハ御救助被仰付候次第ニ有之処、当節桜島之内各村ニ立退候者モ有之、困難之趣ニ相聞候ニ付、同所赤水村ニ救恤所ヲ仮設シ救助取計候条、其旨可相心得、此段布達候事、

但救助願出候者ハ、必ス自ラ出願可致候事、

明治十年五月廿三日 鹿兒島県令岩村通俊

308 第廿六号

本月三日第十二号布達書中、第四課ヲ第一課ニ相改候条、此旨布達候事、

明治十年五月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

309 第三十七号

本月九日第二十二号ヲ以及布達候通り、目下飢餓ニ迫リ候者ハ御救助被仰付置候処、成規ニ基キ御救助日数十五日ヲ過キ候者ハ不被及其儀候、最七十歳以上十歳以下之男子并婦人ハ、年令ニ不拘哨兵線通行被差許居候条、最寄救恤取扱所工躬自ラ願出候時ハ、当分之内特別ヲ以引統御救助被仰付候条、此旨布達候事、

但丁年之男子ト雖トモ救恤願出候時ハ、其事情ニ寄り時宜御救助被仰付候儀モ可有之候事、

明治十年五月二十六日 鹿兒島県令岩村通俊

310 第廿八号

本月二日第四号ヲ以、負傷者治療之儀ニ付云々及布達置候処、当節県下開戦ニ際シ人民四方ヘ立退キ候折柄、患者治療ニ差支困難不少趣相聞候ニ付、当分ノ内一般ノ患者ヲモ治療為致候条、病氣ノ者ハ県庁内及ヒ桜島仮病院ヘ可願出、此旨布達候事、

明治十年五月廿七日 鹿兒島県令岩村通俊

311 第三十九号

本月九日第廿二号ヲ以及布達候救恤所之内、武ノ橋近傍新屋敷三原左吉邸ヲ、本日ヨリ古新屋敷中通今井邸ヘ移転候条、為心得此旨布達候事、

明治十年五月廿八日 鹿兒島県令岩村通俊

312 第四十号

今般詮議ノ次第有之、当分ノ間軍人・軍属共休暇等一切被差止候ニ付、現今帰省休暇等致居候者ハ、神速帰營候様可被達旨、佐倉營所歩兵第二聯隊本部ヨリ照会有之候条、帰省休暇中ノ者ハ其旨速ニ当県庁ヘ可申出、此旨布達候事、

明治十年五月三十日 鹿兒島県令岩村通俊

313 号外

先日米開戦相成候ニ付テハ、人民中米穀買入方ニ差支候者モ可有之、依テ当分ノ内哨兵線内ノ人民ニ限り、元書林会社ニ於テ玄米払下ケ候間、望ノ者ハ家族男女ノ員数取調同所ヘ可申出、此旨布達候事、

314 第四十一号

管下大隅国桜島ノ内横山郵便局、当春米閉局郵便不通ニ候処、本日ヨリ当分赤水村当県出張所内ニ於テ郵便取扱、日々鹿児島ヘ往復致シ候条、為心得此旨布達候事、

明治十年六月三日 鹿児島県令岩村通俊

315 第四十二号

当県士族ノ輩、昨九年秋所務米請取残余有之、右勘合ノ切符所持ノ輩者、其可受取残高記載ノ書面及切符写シ相副、米ル二十三日迄ニ当庁ヘ可届出、此旨布達候事、

明治十年六月十五日 鹿児島県令岩村通俊

鹿
兒
島
県
布
達

明治拾年式

(表紙)

宮崎県
公文書
鹿児島県布達

明治拾年式

(文書目録ハ巻末ニ移シタ)

316
甲第志号

庁下左ニ開列セル公立学校及ヒ学寮書記局・病院共、当分相廃シ候
条、此旨布達候事、

明治十年六月十八日
鹿児島県令岩村通俊

学校

英語学校	準中学校	師範学校	女子師範学校
山下小学	平小学	松原小学	八幡小学
中洲小学	田上小学	武小学	日枝小学
太平小学	高嶺小学	若宮小学	長谷小学
原小学	錦江小学	孝江小学	鶴嶺小学
滑川小学	鶴尾小学	広小路小学	女学第一校
女学第二校	女学第三校	女学第四校	女学第五校
女学第六校	女学第七校	女学第八校	

317
甲第二号

管下日向国一円、従来之区名ヲ廃シ更ニ左之通改称候条、此旨布達
候事、

318
甲第三号

明治十年六月廿七日
鹿児島県令岩村通俊

旧第一大区	第九十四大区	旧第二大区	第九十五大区
旧第三大区	第九十六大区	旧第四大区	第九十七大区
旧第五大区	第九十八大区	旧第六大区	第九十九大区
旧第七大区	第一百大区	旧第八大区	第一百一大区
旧第九大区	第一百二大区	旧第十大区	第一百三大区
旧第十一大区	第一百四大区	旧第十二大区	第一百五大区
旧第十三大区	第一百六大区	旧第十四大区	第一百七大区
旧第十五大区	第一百八大区	旧第十六大区	第一百九大区

管下薩摩大隅之両国ヲ本庁直轄トシ、日向一円ヲ宮崎支庁所轄ト相
定候ニ付、薩摩大隅之人民願何届等ハ総テ直ニ本庁ヘ差出ス可ク、
日向国一円ノ人民願何等ハ総テ宮崎支庁ヘ差出スベシ、此旨布達候
事、

(明治十年六月廿七日)

鹿児島県令岩村通俊

319
甲第四号

今般本庁直轄地及宮崎支庁所轄地ニ、当分ノ内左ノ出張所ヲ設置シ、
婦順願及救助願等其他細故ノ事件為取扱候条、各区内ノ出張所ヘ可
申出、此旨布達候事、

明治十年六月廿七日
鹿児島県令岩村通俊

出張所位置

県庁

吉田 桜島 郡山 伊集院 谷山 重富

甑島 硫黄島 竹島 黒島

以上十郷ハ県庁へ差出スヘシ、

加治木出張所

加治木 溝辺 横川 山田 蒲生 栗野

帖佐 吉松 国分 清水 襲山 財部 踊

末吉 岩川 恒吉 福山 敷根 中山 大村

佐志 黒木 蘭牟田 菱刈 太良

以上廿五郷ハ加治木出張所へ差出スヘシ、

隈ノ城出張所

隈ノ城 平佐 高江 樋脇 永利 市米

串木野 水引 高城 阿久根 野田 高尾野

出水 東郷 山崎 宮ノ城 鶴田 入来

以上十九郷ハ隈ノ城出張所へ差出スヘシ、

垂水出張所

垂水 新城 鹿屋 申良 牛根 花岡

大始良 高隈 内ノ浦 始良 大根占 小根占

佐多 田代 百引 市成 高山

以上十七郷ハ垂水出張所へ差出スヘシ、

知覧出張所

知覧 阿多 田布施 永吉 吉利 日置

加世田 川辺 伊作 指宿 額娃 山川

今和泉 南方 勝目 喜入

以上十六郷ハ知覧出張所へ差出スヘシ、

種子島出張所

種子島 屋久島 口ノ永良部島

以上三島ハ種子島出張所へ差出スヘシ、

宮崎支庁

第九十四大区 第九十五大区 第九十六大区

第九十七大区 第一百一大区 第一百六大区

以上六大区ハ宮崎支庁へ差出スヘシ、

都ノ城出張所

第百四大区 第百五大区 第百七大区 第百九大区

以上四大区ハ都ノ城出張所へ差出スヘシ、

飫肥出張所

第百二大区 第百三大区

以上二大区ハ飫肥出張所へ差出スヘシ、

延岡出張所

第九十八大区 第九十九大区 第一百大区 第一百八大区

以上四大区ハ延岡出張所へ差出スヘシ、

320

甲第五号

人民一般哨兵線通行之儀ハ、是迄其場所ヲ限り差許相成候処、以来
鹿児島近傍ハ、何之哨兵線ト雖トモ、通行者勿論荷物運搬共差許候
段、従参軍本営被相達候条、此旨布達候事、

但士族七十歳以下十歳以上ノ男子ハ、是迄之通り通行不相成候事、

明治十年六月廿八日 鹿児島県令岩村通俊

321

甲第六号

管下賊徒共追々敗北イタシ、官軍既ニ出水地方へ相続キ候ニ付、必
ス速ニ平定可相成、尤平定ノ上モ海陸軍并ニ巡查十分ニ御備ノ上、

管下人民保護致候筈ニ付、再ヒ賊徒ニ迫ラレ候様ノ儀決而無之候間、此旨相心得、一日モ早ク賊難ヲ免レ候様可致、此旨諭達候事、

明治十年六月廿九日

鹿児島県令岩村通俊

322

甲第七号

先日以來敗北の賊徒并に手負の者共、是迄 朝廷の厚き御諭をも弁へず、今日に至り猶村々に隠れ、更に後悔不致のみならず、種々の虚言を吐き人心を惑し、心得宜しきもの迄無体に威し附、改心を妨け候趣に相聞へ、不埒の事に候条、此後速に改心いたさざる者ハ、夫々探索を遂げ召捕候上、急度重罪に行ハレ、且又是迄罪なき者と雖も、右等不埒なる者を隠し置き訴へ出ざるに於てハ、本人同様重罪に行ふべき旨、川村參軍より相達せられ候条、心得違無之早々帰順可願出、此旨布達候事、

明治十年七月四日

鹿児島県令岩村通俊

323

甲第八号

入来院邸 今井邸 諏訪邸 元郵便局
右救恤所相廢止候条、自今救恤米及小屋掛料・農具代拝借願之者ハ、左ノ手續ヲ以可申出、此旨布達候事、

明治十年七月五日

鹿児島県令岩村通俊

一第一第二第三大区ノ居民ハ、鶴嶺学校戸長仮役所へ可願出事、
但本文区内各村ノ分ハ、該村ノ戸長ニテ悉皆取調、県庁へ可願出事、

一第四大区其他各区ノ居民ハ、各町村戸長ニテ取纏メ、最寄り救恤

所へ可願出事、

但戸長不在ノ町村ハ此限ニアラス、

324

甲第九号

管下嘯集ノ賊徒追々敗走致シ、官軍既ニ昨五日迄ニ左ノ口々へ相進ミ、引續キ追討相成、漸次平定致候条、聊無掛念營業可致、此旨布達候事、

明治十年七月六日

鹿児島県令岩村通俊

豊後口ヨリ進入ノ官軍

重岡

鹿児島ヨリ進入ノ官軍

国分 溝辺 横川

向ヘ方進入ノ官軍

志布志 大崎 高隈 百引

人吉口ヨリ進入ノ官軍

飯野 加久藤 須木 諸県郡吉田

出水口ヨリ進入ノ官軍

鹿児島ヨリ諸所近郷并ニ下浮方面大巡羅

325

甲第十号

今般当県下へ東京警視出張所設立相成候ニ付テハ、当県第四課本日ヨリ当分ノ間閉止致シ、同課之事務総テ右出張所ニ於イテ取扱相成候条、此旨布達候事、

(明治十年七月十二日

鹿児島県令岩村通俊)

326

甲第十一号

今般当県下へ東京警視出張所設立相成候ニ付而ハ、先般第十二第十七第卅三及第卅六号ヲ以テ及布達候帰順願之儀、総テ同所エ於テ取扱相成候条、此旨布達候事、

明治十年七月十二日

鹿兒島県令岩村通俊

327

各区長戸長

今般鹿兒島県下エ警視出張所ヲ被置、少警視綿貫吉直所長被仰付、第一大区一小区百廿三番地元御搗屋跡へ設立、本日開庁ニ付、警察事務一切当出張所ニ於テ取扱候条、此旨布達候事、

追テ諸願伺届等、所長宛ニテ可差出事、

明治十年七月十二日

鹿兒島警視出張所

328

甲第十二号

本年五月第十二号第卅六号ヲ以テ及布達候帰順掛ノ儀相廃止候条、此旨布達候事、

但帰順願ノ儀ハ、甲第十一号布達之通可相心得事、

明治十年七月十三日

鹿兒島県令岩村通俊

329

甲第十二号

去ル二月以来郵便線路不通ニ候処、追々郵便局開設、通線往復致シケ所左之通候条、為心得此旨布達候事、

(明治十年七月十九日)

鹿兒島県令岩村通俊

一 鹿兒島ヨリ毎日午後六時郵便差立、伊集院 市米 向田 西方 高城 阿久根 高尾野 米ノ津 麓 米ノ津通り、熊本へ通送取

計候事、

一 鹿兒島ヨリ毎日午前六時差立、重富ヲ経テ加治木へ着、加治木ヨリモ前同様毎日差立、当地へ着之事、

一 加治木ヨリ毎日半ノ日午前七時郵便差立、溝辺ヲ経テ横川へ至リ、又大口ヨリ前同様ノ手續ニテ、湯ノ尾ヲ経テ横川ニ至リ、双方ノ郵便脚夫郵便物ヲ交換シ帰局、尤溝辺・湯ノ尾へ八往復共立寄郵便物受渡致シ候事、

一 肥後水俣ヨリ毎日日郵便差立、其日大口ニ到着、翌日大口ヲ発シ水俣へ帰着ノ事、

一 鹿兒島ヨリ毎半ノ日午前六時郵便差立、郡山 入米 宮城 鶴田 太良ヲ経テ大口へ到着、大口ヨリモ前同様半ノ日差立、当地到着之事、

右之線路郵便相通シ、且ツ地名記載ノケ所ハ何レモ郵便局設置有之候事、

330

甲第十四号

県下各港官船之外荷船通船出入願ノ儀、是迄本県ニ於テ取扱来候処、今般右事務ハ東京警視出張所へ引渡候条、右等出願ノ者ハ、警視各分署へ船主或ハ船問屋ヨリ直ニ可願出、此旨為心得相達候事、

(明治十年七月廿三日)

鹿兒島県令岩村通俊

331

甲第十五号

今般兵火ノ為メ家屋焼失シ、目下雨露ヲ凌キ兼候者へハ、小屋掛料可貸下旨、本年五月第三十号ヲ以テ布達ニ及ヒ置候処、右小屋掛料ノ儀ハ特別ヲ以テ、左ノ金額更ニ下賜候条、此旨布達候事、

甲第十六号

但シ是マテ貸下候小屋掛料ハ、左ノ金額ノ内ニテ引直候義ト可相心得、且ツ本行小屋掛料ノ外、別段賑恤金可下賜向モ有之候得共、右ハ目今取調中ニ付、追テ確定ノ上可及布達候事、
 明治十年七月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

特別小屋掛料下賜金額
 一金八匁五拾錢
 庁下第一第二第三大区家持ノ者工、
 一金五匁
 庁下三大区ヲ除クノ外各区家持ノ者工、

本年五月第三十号ヲ以テ布達ニ及置候小屋掛料ノ儀ハ、借家及同居人へハ不貸下一般ノ成規ニ有之候処、今般特別ヲ以テ左ノ金額下賜候条、篤ク御趣意ヲ奉戴シ、各自就業候様可致、此旨布達候事、
 明治十年七月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

特別小屋掛料下賜金額

一金拾匁

庁下第一第二第三大区借屋及ヒ同居人工、

一金七匁五拾錢

庁下三大区ヲ除クノ外各区借家及ヒ同居人工、

甲第十七号

先般米賊徒暴挙ニ付、兵難ノ為メ家屋焼燼破毀ニ罹リ、或ハ水害ニ遭ヒ、又ハ耕牛馬ヲ斃死セシメタル輩ハ、特別御救助ノ筋有之候条、右罹災ノ者ハ左ノ書式ニ做ヒ現実取調、米ル一日限り戸長へ可指出、

尤坪数其他取調方等ニ付テハ、夫々区分モ有之候条、詳細戸長へ可承合、此旨布達候事、
 明治十年七月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

○ 家屋焼燼ノ儀御届書

第何大区何小区何町村何番地

一建家 何坪

右ハ私所有之居宅ニ候処（右ハ私所有ノ家屋ニテ、二男誰又ハ弟誰別居為致置候処）（右ハ私所有ノ家屋ニ候処、何々之訳ヲ以何某へ貸シ置、私儀ハ何所何某ニ同居又ハ寄留罷在候、然ル処）本年何月何日兵火ニ罹リ悉皆焼燼仕候ニ付、略図相添此段御届申上候、以上、

何大区何小区何町村何番地

士族平民

年号月日

何ノ誰印

（当時何某方ニ同居又ハ寄留）

前書届出之趣御規則ニ照シ実地取調候処、相違無之ニ付奥書調印仕候也、

右戸長

何ノ誰印

鹿兒島県令岩村通俊殿

○

家屋半焼（破毀）ノ儀ニ付御届書

第何大区何小区何町村何番地

一建家 何坪ノ内何坪焼亡（破毀）

右ハ私所有之居宅ニ候処（右ハ私所有之家屋ニ而、二男誰又ハ弟誰別居為致置候処）（右ハ私所有之家屋ニ候処、何々之訳ヲ以何某へ貸置、私儀ハ何所何某何方ニ同居又ハ寄留罷在候、然ル処）本年何月何日兵難ノ為メ本行之通破燒亡候ニ付、右修繕費職工之見積書相添、此段御届申上候、以上、

何大区何小区何町村何番地

士族平民

年号月日

何ノ誰印

（当時何某方ニ同居又ハ寄留）

前書届出之趣、御規則ニ照シ実地取調候処、相違無之ニ付奥書調印仕候也、

右戸長

何之誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

○

耕馬斃死之儀御届書

一耕馬何疋

右者私所有之耕馬ニ候処、本年何月何日兵難ノ為メ斃死セシメ候間、此段御届申上候、以上、

何大区何小区何町村何番地

士族平民

年号月日

何ノ誰印

前書届出之趣取調候処、相違無之候ニ付奥書調印仕候也、

右戸長

何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

334
乙第五号

今般本県第十五号同十六号両通ヲ以テ布達候ニ付テハ、各小区ヲ限リ左ノ雛形ニ例ヒ、所管戸長ニテ取纏メ至急可届出、尤挙家他所ニ難ヲ避クル等ニテ該地ニ不在ノ者ハ、別冊ニ取調置、本人帰住ニ随ヒ逐次可申出、此旨相達候事、

明治十年七月廿五日

鹿児島県令岩村通俊

雛形

第何大区何小区何町村何番地

士族平民何ノ誰

何町村何番地

士族平民何ノ誰

合何十軒

但家持ノ分

何町村何番地

士族平民何ノ誰

何町村何番地

士族平民何ノ誰

合何軒

但借家ノ分同居ノ分

合計何百何十何軒

内家持何軒

借家何軒

335 乙第六号

今般本県甲第十七号ヲ以テ布達候ニ付テハ、別紙規則ニ照準夫々取調実施、無相違ニ於テハ奥書調印ノ上、一小区限リ至急取纏無遅々可届出、此旨相達候事、

明治十年七月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

336 甲第十八号

征討総督有栖川宮本日鹿兒島御着宮相成候条、為心得此旨布達候事、

明治十年七月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

337 甲第十九号

管下兵乱之間ニ乗シ、縦マ、二人家ニ立入り、金錢衣類等奪ヒ取り候者往々有之哉ニ相聞候、然ルニ今般鹿兒島へ警視出張所ヲ置カレ、各郷ヘモ分署取扱相成候ニ付、賊難ニ逢ヒ候者ハ警視出張所并最寄之分署ヘ可訴出、且盜賊取押ヘ又ハ居所分明ニ訴出候者ハ、相当之御賞譽可相成候条、各厚ク注意可致、此旨布達候事、

明治十年七月三十一日 鹿兒島県令岩村通俊代理
鹿兒島県大書記官渡辺千秋

338 甲第二十号

今般警視出張所第二号ヲ以テ変死行倒等届ノ義ハ、最寄警視分署ヘ可差出旨布達相成候处、右ノ内失火届ハ其都度当県ヘモ可届出、此旨布達候事、

明治十年七月三十日 鹿兒島県令岩村通俊
(願注)
二十一年十一月甲第十七号ヲ以テ消滅

339 甲第二十一号

管下郵便線路追々開通、現今左ニ記載之如ク往復致シ候条、為心得此旨布達候事、

(明治十年八月一日 鹿兒島県令岩村通俊)

別紙

一 一六三八ノ日鹿兒島ヨリ郵便ヲ仕出し、吉野・吉田ヲ經テ蒲生ニ至リ、又宮ノ城ヨリ郵便發シ、大村・蘭牟田ヲ經テ蒲生ニ至リ、互ニ郵便物交換シ帰局ノ事、
一 二四八ノ日向田ヨリ郵便ヲ發シ東郷ニ至リ、又入米ヨリ樋脇ヲ經テ東郷ニ至リ、双方ノ郵便物交換シ帰局ノ事、
一 每半ノ日鹿兒島ヨリ郵便ヲ差立、谷山ヘ往復ノ事、
一 二四七九ノ日通山ヨリ郵便ヲ仕出し、岩川ヲ經テ市成、又鹿屋ヨリ高隈ヲ經テ市成ニ至リ、互ニ郵便物ヲ交換シ帰局ノ事、
一 毎日鹿兒島・都城ノ両地ヨリ郵便ヲ差立、本道重富・加治木・浜ノ市・福山・通山ヲ經テ往復ノ事、
一 一六三八ノ日浜ノ市ヨリ郵便ヲ差立、日当山ヲ經テ踊ニ至リ、又吉松ヨリ栗野ヲ經テ踊ニ至リ、互ニ郵便物ヲ交換帰局ノ事、
右之通郵便線路開通、前文地名ハ都テ郵便局設置有之候事、
△

340 番外

管下賊徒共、宮崎ニ於テ偽札ヲ發行致候趣、右ハ通用嚴禁申付候、依之所持之者ハ区戸長ヘ差出、区戸長取纏メ本支庁并最寄出張所ヘ可差出、此旨布達候事、

明治十年八月三日 鹿兒島県令岩村通俊

341 番外

本県御用掛

小野修一郎

右ハ、今般宮崎支庁長申付候条、此旨布達候事、

明治十年八月三日 鹿兒島県令岩村通俊

342 番外

管下宮崎ニ支庁ヲ置キ、左ノ各区所管ト相定、本日ヨリ開庁事務
為取扱候条、諸願伺等都テ該庁ヘ可差出、此旨布達候事、

明治十年八月三日 鹿兒島県令岩村通俊

支庁所轄

第九十四大区ヨリ第百九大区ニ至ル

343 番外

今般兵火ニ罹リ候者ヘ、特別ヲ以テ小屋掛料左之通下賜候条、本人
願書ニ区戸長奥書ノ上取纏メ可差出、尚家持ノ者ヘハ別段賑恤金可
下賜候間、追テ取調可相達、此旨布達候事、

明治十年八月三日 鹿兒島県令岩村通俊

特別小屋掛料

一金五円 但各区家持ノ者ヘ

一金七円五拾銭 但各区借家及同居人ヘ

344 番外

管下賊徒共、妄リ二種々布達致候趣ニ有之処、右所為ニ係リ候分ハ
都テ其効ナキモノニ候条、此旨布達候事、

明治十年八月三日

鹿兒島県令岩村通俊

345 番外

先般第四号ヲ以テ、負傷者治療ノ義ニ付及布達候処、尚又今般宮崎
ニ臨時支病院ヲ相設ケ、官費ヲ以テ治療為致候条、無忌憚療養可願
出、此旨布達候事、

明治十年八月三日

鹿兒島県令岩村通俊

346

追々潰走ノ賊徒、兵器砲銃及刀剣ノ類ヲ棄テ山野ニ潜伏致候者不尠哉ニ相聞
ヘ、右等ノ者ハ夫々探索ノ上捕縛致シ、可処嚴科ハ勿論ニ候得共、
或ハ自首ノ上帰順スル者ハ、一応取調ノ上自ラ其罪ヲ可減義モ可有
之候間、各村々ニ至ル迄篤キ御旨意ノ程ヲ丁寧説諭可致、万一此上
ナカラ抗拒スル者有之ニ於テハ、速ニ当營ヘ可届出、就テハ山野ニ
匿シ又ハ人家ニ預ケ置候兵器ヲ官に納メ、将タ潜伏人ヲ誘導帰順セ
シムル等ノ節義ヲ尽シ候者ヘハ、相当御褒美可下賜候条、向後右等
ノ者ハ姓名取調可届出義ト可相心得、此旨至急管下ヘ布達可致候也、

都ノ城出張

十年七月廿九日

征討本營

岩村県令殿

追テ、本文之趣ハ婦女子ト雖モ解シ易キ様、片仮名ヲ傍書シ布

達候様可取計、此旨為念別達候也、
△

右之通被相達候条、此旨布達候事、

明治十年八月四日

鹿兒島県令岩村通俊

347 従前郵便取扱、戦争ノ為メ閉局ノ向モ有之候処、追々鎮定ニ至リ通

行差支無之候条、本日ヨリ継立可然、此旨相達候事、

十年八月四日 宮崎支庁

各郵便取扱所

追テ、此書面勿々順達ノ上、留ヨリ返却可致事、

348 宮崎支庁附各大区

正副区戸長

別紙布達第壹号外十九部頒布候条、無洩告示可致、此旨相達候事、

明治十年八月四日 鹿児島県宮崎支庁

別紙布達ハ、本庁布達第壹号ヨリ以下ノ布達ヲ云フ、

349 旧壹大区 同貳大区

同三大区 同八大区

区戸長

是迄各旅団ヨリ人馬継立之義、直ニ区戸長ヘ相達来リ候所、今般軍
団輜重部当地ニ出張相成候ニ付、人馬継立之義ハ総テ本部ノ指揮ヲ
受、懇篤尽力可致、此旨相達候事、

十年八月五日 宮崎支庁

350 甲第廿二号

県下開戦以来、戸長及ヒ士民ヘ相渡置候印鑑、紙製木製ノ別ナク悉
皆速ニ返納可致、此旨布達候事、

(明治十年八月五日 鹿児島県令岩村通俊)

351 甲第廿三号

管下追々鎮定ニ趣候ニ付、甲突川橋々ハ勿論其他防禦線解線相成候
条、為心得此旨布達候事、

(明治十年八月五日 鹿児島県令岩村通俊)

352 甲第廿四号

別紙之通、宮内卿ヨリ被相達候ニ付、此旨布達候事、

(明治十年八月五日 鹿児島県令岩村通俊)

別紙

府県

皇后宮来ル廿八日京都 御発車、海路還御被 仰出候条、此旨布達
候事、

但 聖上御同船之事、

明治十年七月廿五日 宮内卿徳大寺実則

353 甲第廿五号

本月三日宮崎支庁開庁候条、為心得此旨布達候事、

明治十年八月六日 鹿児島県令岩村通俊代理
鹿児島県大書記官渡辺千秋

354 第廿六号

(本文書ハ甲第廿二号ヲ以テ六号ニ、日付ノ六月廿七日ヲ八月六日ニ變更、内容ハ甲第廿二号ト同文ニツキ
省略ス)

355 第九拾四大区 同九拾五大区

同九拾六大区 同九拾七大区
同百六大区 同百六大区
正副区戸長
官軍ニ於テ分捕候米穀并ニ物品及賊ノ残置候錢共、無遺漏取納、早々
可届出事、

十年八月七日 宮崎支庁

各小区正副戸長之内名ツ、一小区上野町事務扱所へ日々相詰、
人馬繼立等之義不都合無之様協議可取扱、此旨相達候事、

十年八月九日 宮崎支庁

357 甲第廿七号

丁第四百十九号

府県

今般征討ノ役戦死、或ハ傷痍ニ原因シテ竟ニ死ニ至ル軍人ノ寡婦・
孤児ハ、恩給令ニ因リ扶助料可下賜ノ処、出征以來昼夜連戦死傷ノ
者取調方、目下規則実践難相成ニ付、右死没報告其所管ニ相達候日
ヨリ平定ニ至ル迄、特別ヲ以テ寡婦・孤児ノ内へ、為手当毎月左ノ
通給与スヘシ、又父母或ハ幼少ノ弟妹ノミ有テ、之ヲ養育スル親戚
モナキ者ハ、其次第二因リ詮議ヲ遂ケ、寡婦・孤児相当ノ手当ヲ給
シ、軍属ノ義モ其源由ニ因リ軍人同様之ヲ給ス、尤平定ノ上恩給扶
助ヲ可受者、右支給ノ金高差引、不足ノ分ハ其節一時ニ下渡スヘク、
且死没報告相達候当月迄俸給全額或ハ幾分、并ニ宅料共所管ニ於テ
留守宅へ下渡候向モ有之、前件支給高二比スレハ或ハ過分ニ候共、

右ハ返納ニ不及候条、死没軍人・軍属ノ遺族へ無洩漏速ニ可相達、
此旨相達候事、

但本文手当金下賜ノ義ハ、各所管府県庁（某地寄留ノ者ハ寄留地

ノ府県庁）へ願出、府県庁ヨリ死者旧所管へ無遅々可申出事、

明治十年八月一日 陸軍中将 鳥尾小弥太

大將同相当官 六拾六円 中將同上 五拾八円

少將同上 四拾壹円 大佐同上 三拾三円

中佐同上 貳拾八円 少佐同上 貳拾円

大尉同上 拾五円 中尉同上 拾壹円

少尉同上 八円 少尉試補并準士官 七円

曹長同相当官 三円三拾錢 軍曹同上 三円

伍長同上 貳円五拾錢 諸卒 貳円三拾錢

文官七等以上ハ都テ武官ノ等級ニ準シ、八等ヨリ十等迄ハ少尉

ニ、十一等以下ハ軍曹ニ、等外ハ諸卒ニ準シ下シ賜フ、

右之通被相達候条、管下士民征討ノ役ニ従ヒ、戦死或ハ傷痍ニ因テ
竟ニ死ニ至ル者ハ、軍人・軍属共本支庁及最寄当県各出張所へ可願
出、此旨布達候事、

鹿兒島県令岩村通俊代理

明治十年八月十二日 鹿兒島県大書記官渡辺千秋

358

第九拾四大区

区戸長

征討総督有栖川宮、明十八日宮崎御着ノ筈、総督本営ヨリ電報ヲ以
御達有之候条、御道筋等総テ不都合無之様可取計、此旨相達候事、

十年八月十七日

宮崎支庁

359

其管下追々平定ニ帰シ候ニ付テハ、区戸長給料等之義左之通処分可致、此旨相達候事、

一区戸長履歴等篤ト取調、追テ一般改正迄、更ニ当心得勤可申付事、

一給料ノ義、是亦追テ一般改正迄、従来ノ金額通り官費支給可致候事、

一心得勤申付迄ノ給料ハ、元ヨリ従来ノ金額通支給可致、尤四月份迄ハ従来ノ成規ニヨリ民費支給、五月份ヨリ官費支給ノ積可取計、併四月份以往ト雖トモ、兵乱ノ際民費課出ノ義行届兼候事情モ有之候ハ、尚取調更ニ可申出候事、

県令岩村通俊代理

明治十年八月十九日

鹿児島県大書記官渡辺千秋

360

本支庁及出張官員救恤事務取扱順序

第一条

本庁戸籍掛^{救恤事務ノ名ヲ云、以下効之}ハ恒例・特別トニ論ナク、全管一般救恤事務ヲ総掌スト雖トモ、支庁及ヒ出張委任ノ権ヲ以テ所行シタル廉ハ、総テ該官ノ責任トス、

第二条

支庁及ヒ出張官^{本庁戸籍掛ノ者ハ此限ニアラス}ノ送附スル所ノ諸^{書類等}、一切本庁戸籍掛之ヲ受理シ、丁寧覆審ノ上、自然不明或ハ成規例格ニ抵触スルコトアレハ、該主任ニ就キ之ヲ修正スヘシ、

第三条

救恤事務ニ属スル支庁及出張官ヨリノ諸申牒ハ、総テ本庁戸籍掛ヲ經由スルモノトス、

第四条

支庁及出張官所分済ノ諸^{書類等}ハ、必ス目録并米金支払ノ一覽表^{該表}雛形別ヲ副テ、本庁戸籍掛ヘ引継クヘシ、

第五条

主任官ノ外、救恤事務取扱ノ為メ出張ヲ命セラル、モノハ、直ニ戸籍掛ニ照会、諸般協議ヲ遂クヘシ、

第六条

主任官ノ外掛官員^{但其他掛ヲ云フ}既ニ取扱済ノ分ヲモ、此各条ニ照準シ交付スヘシ、

第七条

本庁ヨリ出張スル官吏ノ救恤金又ハ米穀ヲ携帯セントスルトキハ、総テ戸籍掛ヲ經由スヘシ、

第八条

去ル五月五日ヨリ八月中迄ノ救恤済ノ分ハ、仮ニ一段落トナシ、本庁戸籍掛ニ於テ全管救恤米金明細表ヲ調整シ、第六課ニ対シ各計算書ヲ以テ本払ノ手順ヲナスヘシ、

第九条

農具料夫食種枴貸与モ亦救恤ノ部分ナルヲ以テ、此各条ニ照ラシ履行スヘシ、

各支庁及出張官各郷ニ於テ救恤一覽表雛形

救恤米一覽表

郷大区	町村	戸数	人員	人員内訳	米石	金高	施行月日
何大区	何町	何拾戸	何万人	男何十人 老幼何十人 女何十人	何拾戸	何拾円	何月何日ヨリ 何月何日迄
々	々	々	々				
合計							

同

農具料貸附金一覽表

大区郷	町村	戸数	屋敷	人員内訳			
々	々	々	々	々			
合計	々	々	々	々			

361

宮崎ヨリ富高新町迄沿道各区

区戸長

征討総督有栖川宮、明二十一日午前第五時宮崎御出立、広瀬・高鍋
通御通行、富高新町御転營ニ付テハ、当県官員出張諸事可申談ニ付、
御道筋其外総テ不都^{（藏カ）}無之様可取計、此旨相達候事、
但御休泊割別紙ノ通ニ候条、此旨可相心得候事、

明治十年八月廿日

鹿児島県令岩村通俊

別紙

御休泊割

一 八月二十一日 昼 広瀬 一 同日 泊 高鍋
一 同 二十二日 昼 都農 一 同日 御着 富高新町

362

甲第廿九号

先般番外ヲ以テ、負傷者治療ノ為メ宮崎ニ臨時支病院ヲ相設ケ、官
費ヲ以テ治療為致候旨及布達候処、右臨時支病院之義ハ相廢シ、臨
時病院出張所を相設ケ候条、此旨更ニ布達候事、

明治十年八月廿三日

鹿児島県令岩村通俊

363

乙第十三号

各区区戸長

家禄・賞典禄ノ義、本年一月一日以後相当ノ分ヨリ、追テ金禄公債
証書ヲ以テ付与可相成旨、兼テ公布ノ趣モ有之処、当県士族家禄ノ
内所務米ノ分ヲ除クノ外并賞典禄共、本年一月一日以後相当ノ分、
旧県令ヨリ依然旧慣ヲ襲用シ、毎兩月内渡取計有之、右ハ旧県令專
断ノ取計ニシテ、一般ノ成規ニ悖リ不都合ニ付、既ニ渡済ノ分ハ精
細取調ノ上、追テ何分ノ御処分可相成ニ付、尚現米引替残ノ手形所
持ノ者ハ、悉皆返納可致旨大藏省ヨリ達有之候ニ付、米ル九月十五
日迄右手形返納候様所持ノ者ヘ可申達、此旨相達候事、

明治十年八月廿四日

鹿児島県令岩村通俊

364

高岡郷 穆佐郷

区戸長

管下賊徒共妄リニ種々布達致候趣ニ有之云々、今般番外ヲ以テ被相
達候上ハ、賊徒ヨリ中付候正副戸長ト雖トモ、同様ノ義ト可相心得
事、

十年八月

宮崎支庁

365 賊徒屢各所ニ敗衄シ、忽チ延岡近在マテ退蹙ノ処、是亦一戰ニ敗北、

終ニ無數ノ負傷者ヲ捨去候様ノ仕置ニ立至リ、其際朝旨ノ隆渥ニ感

体シ、各旅団ニ降伏スル者數千人ニ至ル、然ルヲ殘賊猶覺悟セス、

僅ニ三百人計ヲ以テ尚方向ヲ軋シ、道ヲ深山ニ取り処々潜行、衆民

ヲ悩害スル由、固ヨリ海陸軍共手厚部署ヲ被定、攻撃中之義ニ有之

上ハ不日戰定ニ可至、然処各所通行ノ節虚勢ヲ以、猶四千人計モ有

之杯申唱、人馬募集ノ趣相聞ヘ候得共、前文ノ通全ク三百人計ノ外

無之義ニ付、決シテ驚怖致聞敷、若又脅迫等ノ義有之候ヘ共、一時

口場ヲ回避シ身ヲ最寄官軍ニ寄セ、必賊徒ノ暴口ニ応シ人馬等募集

致聞敷、此旨諭達候事、

明治十年八月廿六日

宮崎支庁長小野修一郎

366 甲第三十二号

過日賊徒巨魁等數百名、日州三田井筋ヘ遁逃致候処、賊徒等總勢五

千或ハ三千杯ト申触ラシ、又ハ諸所ニ於テ人夫等脅募致候趣ニ相聞

ヘ、右ハ全ク窮蹙ノ余虚声ヲ張り候義ニ付、不日平定ノ義勿論候条、

此際士民共米金ヲ出シ、或ハ使役ニ応シ、其他潜伏為致候様ノ義有

之候テハ、後日嚴重ノ御処置可相成候条、聊心得違無之様可致、此

旨布達候事、

但賊徒等潜行ノ義モ難計ニ付、見掛ケ候ハ、速ニ其筋ヘ可届出、

此旨添テ相達候事、

明治十年八月廿七日

鹿児島県令岩村通俊

367 負傷者送附手續ノ義ニ付、別紙高鍋仮出張所伺ヘ朱書之通及指令候

条、為心得此旨相達候事、

明治十年八月廿八日 鹿児島県令岩村通俊

別紙

自宅療養ノ患者宿村送之義ニ付伺

高鍋出張臨時病院ヘ入院患者ノ内、追々快方ニ赴キ自宅療養ヲ冀望

ス、医員之ヲ許可スト雖トモ未歩行スル能ハサルヲ以テ、到底人夫

ノ劳力ヲ煩ハサルヲ得ズ、然ルニ本人金員ヲ所持セス、右等ノ如

キハ道程ノ遠近ニ不拘、当出張所ヨリ姓名及事由ヲ詳記口送状ヲ本

人ニ下附シ、宿村送ヲ以テ繼立サセ、追テ人夫賃金及食料トモ本人

ヨリ償却可致旨相達可然哉、此段相伺候条、至急御指揮有之度候也、

十年八月十七日 高鍋仮出張所

岩村県令殿

伺之趣、負傷者自宅療養ヲ冀望シ、或ハ医員ノ診察ニ依リ自宅療養

申付候者等、出院ノ節ハ警視分署ヘ可引渡、尤分署且警部モ派出無

之場所ニテ、負傷者歩行スル能ハズ、且人馬ヲ相雇候自力モ無之者

ハ、官費ヲ以直ニ送附方取計可申候事、

明治十年八月廿八日

鹿児島県令岩村通俊

368

各出張所

別紙甲第三十二号之通布達候次第ニ付、無油断持場内巡回、万一怪

敷挙動有之節ハ、昼夜兼行又ハ飛信ヲ以テ速ニ報知可致、此段相達

候事、

明治十年八月廿八日

鹿児島県令岩村通俊

369 過般区戸長給料渡方之義、本庁ヨリ達ニ付直ニ及回達置候処、右ハ

支庁長ヨリ中越ノ廉モ有之候条、現今実施ノ義ハ可差控、此旨及通知候也、

十年八月廿八日

宮崎支庁

都城出張所

御中

370 這般取調之筋有之候条、別紙雛形ニ照準、正副戸長共至急履歷書差

出候様可相達候也、

十年八月廿九日

宮崎支庁

都城出張所

(別紙雛形)

一何年何月何日拜命

一俸禄年分何石被下置、又ハ役分地何拾何石

但何月分迄請取中候、

一何月何日ヨリ今般ノ兵乱ニ付何処ヘ外レ居、何月何日帰区、

一何月何日ヨリ県官何某殿又ハ何旅団何某殿ノ指図ヲ受ケ区方御用

相勤、今日迄打続キ出勤罷在中候、

右之通ニ候也、

第何大区何郷^{戸長}_{副戸長}

何某印

年令

戸籍掛

御中

一賊徒ニ脅迫セラレ、金穀等ヲ指出シ又ハ人馬ヲ募ル等ノ事故アル
モノハ、其訳別紙ニ認メ指出スヘシ、

371 甲第三十二号

鹿児島県令岩村通俊

残賊過日米人吉近傍山中ニ致出沒候ニ付、再ヒ其県下ニ入込人民ヲ致煽動候モ難計、此際若シ重テ賊徒ニ党与シ、官軍ニ抗敵候者於有之ハ、是迄諸事寛典ニ被処候御趣意ニ悖リ不相済義ニ候間、追テ自首降伏等申出候共、屹度嚴罰ニ可処候条、人民一般心得違無之様管内無洩可懇諭、此旨相達候事、

明治十年八月廿六日 征討総督二品親王有栖川熾仁

前書ノ通総督本営ヨリ御達有之候条、管下人民急度心得違無之様可致、此旨布達候事、

明治十年八月廿九日

鹿児島県令岩村通俊

372 別紙細島總督本営ヘノ電報、至急其地ヨリ差立方可被取計、此旨相

達候也、

十年八月二十九日

鹿児島県

都城出張所

御中

別紙

賊徒人吉地方ヘ出沒ニ付、取締方千三百四十九号御達ノ旨委細拝承、依テ直ニ区戸長呼寄夫々説諭仕、且遠方トモ速ニ取計仕ル可ク、此旨御答申上候、

鹿児島

十年八月廿九日

岩村県令

373 本月廿七日第三十二号ヲ以テ布達候通、賊徒巨魁等遁逃候処、以来

各所ニ出沒致シ士民ヲ脅從セシメ、或ハ金穀ヲ掠奪候哉ニ相聞ヘ、
実以テ可惡事ニ候、既ニ官軍追撃十分嚴備相立居候得共、士民共右
様危難ニ遭候節ハ、賊徒捕獲ハ勿論討取候共不苦候条、此旨為心得
布達候事、

但本文捕獲等ノ節ハ、速ニ其筋ヘ可届出事、

明治十年八月三十一日 鹿兒島県令岩村通俊

374 学事再興ノ都合モ有之ニ付、各校ノ教員并学校掛ノ者、今般賊徒ニ
加ハリ、或ハ戦死、或ハ出兵中、或ハ帰順自宅謹慎ノ向共、左ノ表
式ニ照シ至急取調可届出、此旨相達候事、

明治十年八月三十一日 鹿兒島県庁第一課

何国何大小区何郷何学校旧教員并学校掛姓名調書

郷名	校名	住所	族籍	職名	拜命年月	帰順	出兵中	戦死	姓名
	何小学	何町村	士族	準訓導	何月何日	何月何日 帰順	出兵中	戦死	姓名 年令
							押伍	兵卒	又ハ何々 又ハ何々
							小隊長		何誰 何月何日

(小隊長ノ次ニ会計長 中隊長 大隊長 分隊長 半隊長 ト続く)

375 別紙之通、小野支庁長ヨリ通達有之候ニ付、直ニ及通知候也、

十年九月四日 宮崎支庁

高鍋

宮崎支庁出張所

別紙

支庁管下各出張所称呼、是迄区々相成居候処、向後本県管轄内ニ於
テハ、何処宮崎支庁出張所ト相唱候様、各出張所ヘ達方可取計候也、
明治十年九月一日 小野支庁長

宮崎支庁中

376 区戸長

細島ヨリ加治木迄架設有之電信線路折々断線ニ及ヒ、剩ヘ数間銅線
ヲ取捨候等ノ義有之、必用ノ通信遲滞シ軍機ニ關係不尠旨、在高岡
軍用電信掛ヨリ申来候趣モ有之候条、各村持地ニ断線有之時ハ、見
付次第左ノ電信取扱所ヘ急報可致旨、区内ヘ無漏可申達、此旨相達
候事、

明治十年九月三日 宮崎支庁

軍用電信取扱ケ所

細島 高鍋 高岡 都城 加治木

377 鹿兒島ヘ賊徒襲来ノ際県令遁去候旨、該賊兵ヨリ各郷ヘ回達セシ趣
相聞ヘ、以之外ノ事ニ候、全ク右様ノ義無之候条、賊徒ノ詐言妄信
シ、心得違ノ挙動無之様区内無洩可申達、此旨相達候事、

鹿兒島県

明治十年九月五日 宮崎支庁

378 本月一日賊徒鹿兒島ヘ乱入ニ付、県庁拳テ一旦汽船ニ立退キ、本日
加治木出張致候、既ニ官軍諸道ヨリ攻撃、賊徒等重圍ノ中ニ有之、
不日平定勿論ノ義ニ付、士民共聊動揺致間敷、此旨相布達候事、
但賊徒貴島清鹿兒島ニ於テ戦死、逸見十郎太重傷致候条、此段為

心得申添候事、

明治十年九月五日

鹿児島県令岩村通俊

379

番外志号

本月一日鹿児島へ賊徒乱入致シ、目今官軍攻撃中ニ付、当分ノ内加治木出張所内ニ、仮ニ県庁ヲ設ケ事務取扱候条、願伺届等ハ同所へ可差出、此旨布達候事、

明治十年九月六日

鹿児島県令岩村通俊

380

鹿児島県庁

過日来脱賊鹿児島地方へ入込候ニ付、去ル三日官軍七道ヨリ同所へ突入、同所屯在官軍ト相合シ攻撃中ニ有之、然ルニ脱賊共回文ヲ以テ重富・加治木・国府・福山其他各郷ニ相宛、己等鹿児島へ突入候処県令逃去、兵隊巡查引色ニ相成十分ノ勝利ニ付、巡查ハ見当次第捕縛シ、尚有志ノ者ハ鹿児島及ヒ蒲生へ可駆付旨相触候趣、右ハ人民ヲ煽動スル妄誕不経ノ詐言ニテ無謂事ニ候条、各地人民右詐言ノ為メ不被致誑惑様、厚ク為相心得置可中、尚前文ノ如キ賊ノ書状等ヲ取扱、又妄誕不経ノ虚説申触候者於有之ハ、屹度取糺候筈ニ付、補縛ノ上当本営へ可申出、且帰順人ノ内重テ賊徒ニ党与候者ハ、去月廿六日付ヲ以テ相達候通嚴罰ニ可処候条、心得違無之様大至急管内へ可相達、此旨相達候事、

明治十年九月五日

征討総督有栖川熾仁

前書之通征討総督宮ヨリ御達有之候条、此旨布達候事、

明治十年九月六日

鹿児島県令岩村通俊

381 飛信継立所之義、是迄当庁より直ニ其出張所へ継立候所、以来学木山之口へ右取扱所ヲ設置候ニ付、本日佐藤五等属学木へ出張、取扱方戸長へ相達候筈ニ付、山ノ口ノ方ハ其出張所より官員差立、右同様扱方戸長へ相達、不都合無之様可取計、此段相達候也、

十年九月七日

小野支庁長

都城

宮崎支庁出張所

382

細島ヨリ加治木迄架設有之電信線路、折々断線ニ及ヒ候ニ付、見付次第電信取扱所へ急報可致旨、本月三日相達置候処、今日ニ至ルマテ銅線取去リ、夫カ為メ軍機ニ関係不尠、殊ニ柳瀬町近傍ハ別テ甚敷、就テハ電信掛ヨリ日々監守人差出、見付次第取押処分ニ及ヒ候旨掛合有之候条、線路ノ右区ニ於テハ別テ注意シ、若シ断線スルカ或ハ銅線持去ルモノヲ身受ケ候ハ、取押へ、電信取扱所力又ハ最寄警視分署、又ハ巡查派出所へ届出可中、此旨布達候事、

十年九月九日

宮崎支庁

383

其出張所臨時病院出張所ニ於テ、治療致候負傷患者等、別紙雛形之通正副取調、当庁へ差出候様達方可取計、此旨相達候事、

十年九月九日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

頭部	面部	頸部	胸部	脇部左右	腹部	背部
腰部	臀部	上膊部左右	肘間節部左右	前膊部左右		

手関節部 左右 手背部 左右 手掌部 左右 手指部 左右
 肘関節部 左右 上腿部 左右 膝関節部 左右 下腿部 左右
 足関節部 左右 足跗部 左右 足趾部 左右 足趾部 左右
 右ノ内、銃創及創貫穿時入留丸・放丸、骨傷ノ有無等ヲ区分スベシ、又退院ノ内全治・半治・死亡ヲ分記スヘシ、

職員表

医員	何人	姓名表共
傭医	同	同
事務掛	同	同
看病人	同	同
小使	同	同

外来患者病名人員表

右之通同表御製被下度候也、

九月七日

延岡臨時支病院

都城

臨時支病院出張所

御中

384 豊後国大分より鹿児島迄電信線架设ニ付、本県ヨリ別紙之通達有之候条、右線路沿道区戸長へ、諸事差支無之様達方可取計、此旨相達候也、

明治十年九月十日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

豊後国大分より鹿児島迄電信線架设ニ付、工部省出張長沢俊平外一名より別紙ノ通掛合ニ付、右線路沿道材木其他用度向之儀、兩名ヨリ照会有之節ハ、諸般無差支可取計、此旨相達候也、

十年九月七日

鹿児島県令岩村通俊

宮崎出張所

(別紙)

今般豊後国大分より御県下鹿児島迄、延岡・宮崎・都城ヲ經テ電線架设起工ニ付、即今大分県下重岡迄着手中ニ有之、不日御管内ヘ向ケ施業可致ニ付、線路沿道材木其他用度、無差支相弁候様向々ヘ御達被下度、且拙者共儀其最寄支庁ヘ出頭、諸事御協議之上取計中度ニ付、非常御繁忙ノ際ニハ候得共、自然相對ニテ運ヒ兼候事情有之節、支庁御官員衆中宅名派出、御直会被下候様致度、此段御依頼旁御照会および候也、

十年八月卅一日

工部八等属戸島 礪

三等技手長沢俊平

鹿児島県令岩村通俊殿

385

支庁ヨリ各出張所ヘノ諸達及指令文、并出張所ヨリ差出候諸伺届等ノ結文、是迄一定ノ規則無之区々相成不都合ニ候間、別紙ノ通当分仮定候条、此旨相達候也、

十年九月十日

宮崎支庁

高鍋救恤取扱所

別紙

支庁ヨリ各出張所ヘ達文例

廉立タル事ニ用ユル例

何出張所

何々ノ義云々取計、此旨相達候事、

宮崎支庁

尋常ノ事ニ用ユル例

何々ノ義云々可申出、此旨相達候事、

宮崎支庁

何出張所

同伺へ指令文例

書面云々^{取計心得候}可申事、

宮崎支庁

出張所ヨリ支庁へ伺届文例

何々ノ義云々可然哉、此段相伺候也、

同上中文例

何々ノ義云々<sup>何々ノ義ニ付届
此段及御届</sup>(開申具状等)候也、

386

番外三号

此般賊徒ニ与シ、一時方向ヲ誤リ官軍ニ抗敵スト雖トモ、先非ヲ悔悟シ帰順自首スル者ハ、其罪ヲ輕免セラレ候筈ニ候処、追々帰郷ソノ俣潜伏シ、既ニ捕縛ノ際ニ臨ミ不得止帰順願出ル者往々有之、甚以不宜次第ニ付、来ル三十日迄ニ自首セサルモノハ、其罪ヲ有メス捕縛ノ上可処嚴科候条、心得違ノ者無之様管下一般へ無洩布達可致、此段相達候事、

明治十年九月十一日

征討総督本営

鹿児島県令岩村通俊殿

追テ、本文潜伏為致候者モ、本犯同様処分可致候条、此旨添達

候也、

右之通被相達候条、此旨布達候事、

明治十年九月十二日

鹿児島県令岩村通俊

387

番外五号

県下各地へ架設ノ電信線へ妨害致候者有之、屢々破損不通ニ相成、此際甚不都合ノ事ニ候、今後右等ノ所業有之ニ於テハ、屹度取糺嚴科ニ可処候条、心得違ノ者無之様、区戸長ハ勿論於人民モ、其所有地内ハ銘々注意致候条^{様カ}可相達旨、征討総督本営ヨリ御達相成候条、一同堅相守、何方ニテモ妨害ノ所業有之ヲ見聞致候ハ、当庁及警視分署巡行巡查へ可届出、此旨布達候事、

明治十年九月十四日

宮崎支庁

388

電信線破損ノ義ニ付、是迄度々相達候義モ有之処、今般番外五号ヲ以テ及布達候通ニ有之候条、其出張所郡下右線路有之場所へ官員宅名派出セシメ、別紙ノ請書一村限連名ニ相認メ、捺印ノ上為差出可中、此旨相達候也、

十年九月十四日

宮崎支庁

高鍋

宮崎支庁出張所

沿道御架設相成居候電線妨害ノ義ニ付、毎々御達御座候処、今以其弊不相改、向後右等ノ妨害致候者ハ嚴科ニ可被処旨、御嚴達ノ趣奉畏候、私共地内ノ義ハ一層注意可仕、其他何方ニテモ右所業ノ者有之ヲ致見聞候へハ、早速御庁及最寄警視分署巡行巡查中等へ御届可

中上、若シ存知ナカラ其俣ニ致置、後日露顯致候ハ、如何様ノ御
処分相成候テモ、毛頭申分無御座候、依テ御請書如件、

明治十年何月

第何大区何小区何番地

士族
平民
何ノ某印

宮崎支庁

御中

前書之通相違無之、此段御請中上候也、

何大区何小区

区戸長

何ノ某印

沿道御架設相成居候電線妨害ノ義ニ付、毎々御達御座候処、今以其
弊不相改、依之向後右等ノ妨害致候者ハ、嚴科ニ可被処旨御嚴達ノ
趣奉畏候、私共持区内ハ一層注意可仕、其他何方ニテモ右所業ノ義
有之ヲ致見聞候得ハ、早速御庁及最寄警視分署巡行巡查等へ御届可
仕、衣テ御請書如件、

何大区戸長

何ノ某印

宮崎支庁

御中

389

小林救恤取扱所出張宮田伸吉、其出張所へ本月九日罷越候趣、今以
滞在致居候ハ、該救恤所へ再出張ニ不及候条、直ニ帰庁候様本人
へ可申通、此旨御達候也、

十年九月十四日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

追テ、本人若シ不在ニ候ハ、其出張先へ可相通、此旨添達候
也、

390

沽券税施行ノ各市街及郡村トモ、今般兵乱ニ付損地相成候場所取調
方、別紙該所管区戸長江達方可取計、此旨相達候也、

十年九月十四日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所御中

日向国

区戸長

沽券税施行ノ各市街地及郡村トモ、今般兵乱ニ付破毀焼亡ニ罹リシ
宅地、又者台場ヲ築キ、又ハ踏荒シ、又ハ無仕付ノ場所等調査トシ
テ、不日官員派出致サセ候条、別紙雛形ニ例ヒ、一村限り詳悉取調
置、右官員着之節可差出、尤派出日限ハ追テ可相達、此旨相達候事、

明治十年九月十一日

宮崎支庁

美濃紙堅帳
(表紙)

兵乱ニ付家屋焼亡ノ地所取調帳

第何大区何小区

何々
何番
一田何程 無仕付 何ノ某印

此高何程

此真米何程 何斗何升何合代

所有主姓名ノ下ヘ一筆毎ニ捺印スヘシ、

何所
何番
一畑何程 何々損地 何ノ某印

此高何程

此貢雜穀何程 何斗代

台場或ハ土取場等ノ損地ヲ記載ス可キモノトス、

何々
何番
一田何程 踏荒地 何ノ某印

此高何程

此貢米何程 何斗何升代

何々
何番
一宅地何程 破毀地 何ノ某印

此高何程

此貢米何程 何斗代

宅地ハ畑ヘ編入アルハ通常ナレトモ、万一田ヲ宅地ニシテ其

俣田方ニ編入アレハ、田宅地ト記スヘシ、

同
何番
一宅地何程 同 何ノ某印

此高何程

此貢米何程 何斗何升代

何々
何番
一畑何程 踏荒地 同人印

此高何程

此貢雜穀何程 何斗代

内大豆何程 二十分一大豆納

何所
何番
一田何程 何ノ某印

此高何程

此貢米何程 何斗代

如此一筆限取調遺漏ナカラシムヘシ、且他村ノモノ持地ナレハ
姓名ノ肩ヘ何郷何村ト記スモノトス、

合反別何程

此高何程

此訖

田反別何程

此高何程

此貢米何程 何斗何升何合代
内反別何程 無仕付

此高何程 此貢米何程

反別何程 踏荒地

此高何程 此貢米何程

反別何程 何々損地

此高何程 此貢米何程

畑反別何程

此高何程

此貢雜穀何程 何斗代

内大豆何程 二十分一大豆納

無仕付・踏荒地・胸壁地等、内書ニ記載スルハ田方ニ同シ、

宅地何程 破毀地 燒亡地

此高何程

此貢米何程 何斗代

田ヲ宅地トシ、其俣田方へ組入アル分アレハ、左ノ如ク内書ニ

区分スヘシ、

田宅地何程

此高何程

此貢米何程

何斗代

畑宅地何程

此高何程

此貢米何程

何斗代

右者今般兵乱ニ付、何国何郡何郷何村無仕付、或ハ踏荒地、或ハ損
地等取調候處、前記之通相違無御座候也、

第何大区何郷

副戸長

年月日

何ノ某印

戸長

何ノ某印

鹿児島県令岩村通俊殿

391 賊徒ニ与シ一時方向ヲ誤リ候者、米ル三十日限り自首セサル者ハ其

罪ヲ宥メス、捕縛ノ上可處嚴科段、番号第三号^{九月十日}ヲ以總督本營ヨ

リ御達相成、既ニ布達相成候事ニテ、固ヨリ忽諸ニ看過スヘキ筈ハ

無之候得共、若一人ニテモ達洩レ有之候テハ憫然ノ至リニ付、各大

区ニ戸長宅名宛^{区長不在等ハ重立候町村戸長}、其出張所ニ呼立、区内民士心得違無之

様可致段懇篤説諭可致、此旨相達候也、

十年九月十五日

都城出張所

宮崎支庁

392

各区

正副区長

学区取締

正副戸長

各区学校之義ハ、区戸長及該有志ノ者共御趣意ヲ奉戴シ、将ニ昌盛
ナラシメントスルノ折柄、当二月以来ノ兵乱ニ付自然閉校相成、実
ニ不堪遺憾、然ルニ賊勢日々窘蹙、現今唯鹿児島城山ノ殘賊而已ニ
付、不日鎮定ニ可至ハ必然ノ事ニ候条、各学校從前ノ通開校相成度、
於区内モ兵乱後諸事難決ノ義モ可有之候得共、一層致憤発開校ノ意
見早々可申出、此旨諭達候事、

明治十年九月十六日

宮崎支庁

393

其出張所部下第七大区五小区高崎郷神官諸經費下渡之儀ニ付、別
紙之通願出候處、右ハ^郷村社何々之神社ト端書シ、且旧鹿児島県より
民費賦課相廢シ候、以来該社ニ關スル一切ノ願書類及從前民費賦課
之方法等巨細為取調、早々可申出旨達方可取計、此段相達候也、

十年九月十七日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

神官諸入費御下渡願

第百七大区五小区高崎郷

明治九年九月十五日ヨリ同十二月卅一日迄

一金七円五十銭

九月大祭并神饌日供料

一同貳円廿銭

三度遙拝并大被費

一同五十四銭

神前毎夜燈油料

一同十四円

祠官名月給

一同四十式円

祠掌四名月給

一同貳拾壹円

神官附属六名月給

一同三円六十式銭八り

社務所筆紙墨油及郵便切手料

一同八円七十五銭

社務所使役給銭

一同九円

村社十一月大祭料

一同三円六十銭

右同遙拝并大被費

小計百拾貳円廿壹銭八厘

明治十年一月一日ヨリ同七月三十一日迄

一金拾壹円

三月大祭并神饌日供料

一同三円三十銭

五度遙拝并大被費

一同壹円九銭貳厘

神前毎夜燈油料

一同貳拾八円

祠官名月給

一同八十四円

祠掌四名月給

一同四十式円

神官附属六名月給

一同七円廿五銭九厘

社務所筆紙墨油及郵便切手料

一同十七円五十銭

右同使役給銭

一同五円四十銭

村社遙拝并大被費

小計百九拾九円五十五銭壹厘

惣計三百拾壹円七十六銭九厘

先般宮崎県廃合ノ際民費課出之儀、正副区戸長月給、其他学校費・
宮繕堤防費・地租改正諸費ヲ除ノ外詮議ノ訳有之、一時下渡ノ旨県
庁ヨリ御布達相成候ニ付、直ニ御伺上申候処、員数取調差出候ハ、
可下渡旨承知仕、本年二月第六課官員鎌田市兵衛江願書差出候処、
御請取相成候得共未タ御指令無之、然ルニ昨九年九月十五日ヨリ本
年七月三十一日迄、諸費右之通相及候間御下渡被下度、此段奉願候
也、

祠掌

永友敬蔵印

祠官

迫間道英印

副戸長

永山軍平印

明治十年八月十六日

鹿児島県令岩村通俊殿

神官諸入費下渡願

第百七大区五小区高崎郷

金三百拾壹円七十六銭九厘

右者、当小区長尾神社諸費、昨九年九月十五日ヨリ本年七月三十一
日迄右之通相及申候ニ付、御下渡被下候様去八月十六日付ヲ以テ上
申仕候得共、未タ御指令無之、仍テ再志上申仕候間、至急御指揮被
下度、此段奉願候也、

長尾神社祠掌

明治十年九月十日

永友敬蔵印

同社祠官

迫間道英印
副戸長
永山軍平印

鹿兒島県令岩村通俊殿

394 其出張所經費別紙ノ通り区分致シ、各月勘定書支庁へ可差出、此旨相達候也、

十年九月十七日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

一金

仕払高

内訳

金

俸給

金

給与庁中費

金

旅費

金

當繕

金

病院費

ノ

其出張所部下元民費賦課ノ分、昨九年九月以来十二月迄、月々ノ現費旧鹿兒島県ヨリ官給相成候云々伺出之趣ハ、該費口々廉限リ取調早々可申出、此旨相達候也、

十年九月十八日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

395 甲第十七号ヲ以テ、兵難ノ者・家屋其他取調方ノ布達書兼テ及送致置候処、右ハ調査日限決定無之ニ付、米ル十月十五日迄ニ、部内無洩取纏方差出候様可取計、此旨相達候也、

十年九月十八日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

396

各区

正副区長

其区学区取締并教員之人数及宅人別月給共、往復ヲ除之外七日限取調可届出、此旨相達候事、

明治十年九月二十日

宮崎支庁

397

往第十九号

近來県下谷山郷辺に（コレラ）病俗ニコロに罹り斃る、もの数名有之、右病は伝染蔓延する悪症ニ付、銘々注意予防のため、別紙予防法相示し候間、各自撰生可致、付テハ未熟之果物類売買候儀一切嚴禁候条、此旨布達候事、

明治十年九月二十日

鹿兒島県令岩村通俊

別紙

此頃長崎より米港の品川丸号乗合の者に、「コレラ病」俗ニコロにかゝり斃る、もの之あり、よりて其船中ニ乗組の人を悉く知林島に送りたれとも、此病一端近傍に侵入し、若し宅人たり共此病に

感する時ハ、追々伝染蔓延するものなれハ、世に恐るべき悪病なり、よりにて各自予防法を守りて、吾人ともに此害を免るべきよふ心得の爲にしめす事左ノ如し、

第一条

食物ハなるたけ新鮮の品、飲水ハ清純の物を撰ふへし、聊たりとも腐敗の気味あるもの、あるひは混濁臭気ある水を用ゆへからず、又焼酎酒等を多量に用ゆへからず、尤通常ハ食物にて不消化のものハ、過食せざるよふ注意すへき事、

第二条

柿・梨子・西瓜の類、総テ生物ハ食すへからざる事、

第三条

身体ハなるたけ清潔にすへし、若し雨水等にて衣を湿したれハ速ニ着換へ、肌着ハ時々洗濯すへし、尤着物ハ感冒・下痢等を予防せんが爲、常服の外にフランク・木綿帔にて小腹ヲ巻き、足ニハ毛布の股引の類を穿を良とす、

但雨風にさらし、夜氣を侵し、寝冷えさるよふ別して注意すへし、

第四条

住所家屋近所ハ常に掃除をよくすへし、厠圍ハ糞の積らざるよふにし、掃ための塵芥ハ速に取除き、都て健康を害する臭気なきよふ、精々注意すへし、

第五条

此頃下痢を發バ速ニ医者の診察を乞ひ、若し「コレラ病」ニ相似たる病あらは、輕症なりとも直ニ区戸長へ届け出へく事、

第六条

若し此病に係り死する者あれハ、人家遠隔之地ニ於テ火葬となし、

亦ハ墓地を十分に深く掘りて埋むへき事、

第七条

此病ニ染て死する人の病中に着用したる衣類、其外病者ニ触たるものハ総て焼捨へし、若し焼捨を要せざる品類ハ、医者ニ乞ふて除毒の薫法を施すへし、

398

今般本庁建築取調ニ付、在来ノ建物ノ内不用ニシテ、本庁官舎等ニ可用立建物可否取調可相廻旨、本庁ヨリ別紙ノ通達有之候条、右写ニ照搬シ、其地ニ在来ノ官舎アレハ取調、至急当庁へ可相廻、此旨相達候事、

明治十年九月二十日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

今般本庁建築取調候ニ付、其地ニ在来ノ建物ノ中不用ニシテ、本庁官舎等ニ可用立建物ノ可否至急取調、可相廻候事、

十年九月十九日

岩村県令

小野支庁長殿

追テ、都ノ城其他二モ、全ク官有ノ分ニテ右ニ可用建物有之候ハ、取調可中越候也、

399

是迄飛信ノ断書無之書状、該使ニテ通達之義間ニ有之哉ニ相聞へ、右ハ郵便規則ニモ抵触候条、向後右断書無之向ハ通達不致様注意可致旨、取扱人へ相達可中候也、

十年九月廿日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

400

宮崎支庁

各区正副戸長之内、今般之騒乱ニ付不都合之聞へ有之候者ハ、速ニ免職可申付筈ニ付、其行状篤卜取調、且右代員之義モ見込相添早々可申出、此旨相達候事、

十年九月廿一日

鹿児島県令岩村通俊

401

其部下志布志郷ハ、須知彦太郎巡廻懸リ滞在之由ニ付、本庁へ申立此度五等属大江逼出張相成候段申来候条、為心得申達候也、

十年九月廿一日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

402

区戸長

今般各地配置ノ巡查へ、銃器携帯為致候旨、警視支出張所ヨリ申越候条、心得トシテ此旨相達候事、

明治十年九月廿二日

宮崎支庁

403

四等属蒲原敬路、這般飯野筋へ出張申付候旨本庁ヨリ達来候条、為心得此段相達候也、

十年九月廿二日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

404

鹿児島開戦以来、支庁始各出張所ニ相詰候者ハ、官費ヲ以テ相賄来リ候処、逐日平定ニ移リ候条、自後官費ヲ以費出候儀相廢止候条、此旨相達候事、

明治十年九月廿四日

宮崎支庁

都城出張所

405

区戸長

本日午前ヨリ鹿児島進撃ノ処、西郷・桐野・村田ノ三名ヲ打留候段電報有之候条、為心得此旨相達候事、

十年九月廿四日

宮崎支庁

406

本日早晚ヨリ官軍鹿児島城山エ攻撃相成候処、賊魁西郷隆盛・桐野利秋其他打取或ハ致降伏候条、一同可致安堵、此旨布達候事、

明治十年九月廿四日

鹿児島県令岩村通俊

407

出第号

昨廿四日布達候通、官軍鹿児島城山へ攻撃、賊魁西郷隆盛・桐野利秋、其他村田新八・逸見十郎太・別府新介・桂久武・池ノ上四郎等百数十名打取、且残党悉ク降伏致シ管下一般平定候条、此旨布達候事、

明治九年九月廿五日

鹿児島県令岩村通俊

408

商用其他病痾等ノ為、他ノ管下へ旅行之義是迄差止来候処、今般鹿児島表平定ニ帰シ候上ハ、右旅行無差支允許可致、此旨相達候也、

明治十年九月廿五日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

409

鹿兒島県庁兵燹ニ罹リ悉皆焼失ニ付、同所へ再ヒ建築之儀相伺候処
許可相成、依テ速ニ木材等手当之上、其着手可致候条、此旨為心得
相達候事、

明治十年九月二十五日

鹿兒島県令岩村通俊

区戸長へ

410

今般田ノ浦ニ当県出張所ヲ相設候条、最寄士民願伺届等、拙者宛名
ヲ以テ右出張所へ可差出、此旨布達候事、

十年九月廿六日

鹿兒島県令岩村通俊

411

区戸長

兵乱中商船出津不相成候処、此程賊徒尽滅致候ニ付、自後通船差許
候条、当分之内積荷物之品目并ニ乗客姓名、最寄警視分署ニ相届、
差図を受ケ出港可致、此旨相達候事、

十年九月廿六日

宮崎支庁

412

総督本営鹿兒島へ被遷旨、別紙之通細島出張所ヨリ申来候条、為心
得此旨相達候也、

十年九月廿七日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

這般鹿兒島地平定候ニ付、総督宮本営ヲ該地ニ被移、明二十六日テイ
ボール号汽船ニテ、当湾御拔錨相成候旨、総督本営ヨリ達有之候間、
此段及上申候也、

細島

宮崎支庁仮出張所

宮崎支庁

御中

413

其出張所へ、是迄戸長等終日詰切候節者一日金七錢、一昼夜詰切候
ハ、金拾錢五厘、ノ割ヲ以テ九月中マテ給与候条、渡方取計可申候、
此段相達候也、

明治十年九月廿九日

宮崎支庁

都城出張所

414

賊徒暴拳来、拾得候牛馬之儀ハ追々届出候処、万一不心得ニテ不届
出者有之哉モ難計ニ付、猶細密取調之上、有無共来月十日限り可申
出、此旨相達候事、

明治十年九月廿九日

宮崎支庁

区戸長

415

各区

賊徒暴拳来、為メニ耕牛馬紛失致候者ハ、其毛色及ヒ寸尺等詳細取
調、来月十日限り可届出、此旨相達候事、

明治十年九月廿九日

宮崎支庁

正副区戸長

416 一ホート 壹艘

長サ 貳丈貳尺五寸

但カジ カイ付

一同 壹艘

長サ 壹丈五尺位

但カジ カイ付

右ハ、長崎陸軍運輸局雇上ノ汽船ラウント丸、去ル八月廿五日該港ヨリ肥後百貫石ニ航海ノ節、暴風雨ノ為メ右端船流失ノ趣通知有之候条、最寄海岸ヘ漂着候ハ、其段当庁ヘ早々可届出候、此旨相達候也、

明治十年九月廿九日

宮崎支庁

各区

区戸長

417 出乙第貳号

各区戸長

今般賊徒征討ニ付、各軍団人民之家屋舎營致候宿料等下与之儀ニ付、別紙之通軍団本營ヨリ達有之候条、各区ニ於テ無洩取纏メ、所轄庁又ハ出張所ヘ可差出、此段相達候事、

明治十年九月廿九日

鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

今般賊徒追討ニ付、進軍及滞陣之際、軍団各部・各旅団等、其県之市街村落人民之家屋ヘ舎營為致候、就而者相当之宿料可下渡候条、其県ニ於テ詳細取調、証拠書等相添取纏メ可申出事、但飯米其外取換品等有之者ハ、其代価等無遺漏取調、宿主申出書

二証拠書相添、戸長奥印ヲ捺シ可差出事、

九月廿九日

岩村鹿児島県令殿

軍団本部

418

各区戸長

先般相達候区戸長履歷、雛形之通相認、此達到着ノ日ヨリ往復日数ヲ除クノ外三日限差出可申、此旨更ニ相達候事、

明治十年九月

宮崎支庁

419

区戸長

自今諸願伺届等ハ、総テ三通宛差出可申、此旨相達候事、但人民他出届等些細ノ事件ハ、不及三通候事、

明治十年九月三十日

宮崎支庁

420

区戸長

行旅人管下止宿中、病ニ罹リ死去候節、間々右所持品共悉皆致候埋候向モ有之、不都合之至リニ付、自今所持品ハ本人親族ノ者為請取差越候迄、事務取扱所ニ於テ預リ置可申、此旨相達候事、但死亡届出ノ節ハ、其所持品詳細可致記載事、

明治十年九月三十日

宮崎支庁

421

甲第四十二号

宮崎支庁

本年五月行在所太政官第十二号ヲ以、当県下諸港船舶出入当分禁止ノ義御達相成候処、即今電信ヲ以廢止ノ旨御達相成候条、此旨布達

候事、

明治十年十月二日

鹿児島県令岩村通俊

422

甲第四十三号

宮崎支庁

軍人軍属人夫等、放免ノ後病氣ニ罹リ、其元籍へ通送致シ米候者、コレヲ病者ニ限り伝染ノ恐れ有之候ニ付、通送相禁候条、右患者又ハ死体等有之節ハ、其土地人家隔絶ノ場所ニ於テ、兼テ相達置候予防法ニ照準シ、直ニ処分致シ追テ可届出、此旨布達候事、

明治十年十月(四日)

鹿児島県令岩村通俊

423

甲第四十四号

今般堺県下堺港ニ灯台ヲ設置シ、竣功相成、本年九月十五日夜ヨリ点火致候趣中越候条、為心得此旨沿海各区へ布達候事、

明治十年十月(五日)

鹿児島県令岩村通俊

堺港灯台

一明治十年九月十五日、即チ西曆一千八百七十七年九月十五日ノ夜ヲ初トシテ、以後毎夜日没ヨリ日出マテ、堺港入口ノ南端ヲ示ス為メニ、同港南方波戸場ノ極端ニ設築シタル灯台ニ於テ、五等不動緑色灯ヲ点ス、

一右灯台ハ、英国海軍局第十六号兵庫并大坂ノ海図ニ依レハ、北緯三十四度三十五分十二秒ニシテ、「グリーンウイッチ」ヨリ東徑百三十五度二十七分四十四秒ニ当ル、

一灯台ハ木製白色ニシテ其形六角ナリ、但基礎ヨリ灯籠ノ中央マテ高サ三丈二尺五寸ナリ、右灯台ハ満潮ノ時、水面ヨリ高サ二丈一

尺ノ円形台石ノ上ニ設立ス、

一該灯ハ海面二百七拾度ヲ照暉シ、一方ハ南十四度三十分西、又一方ハ南七拾五度三十分東ノ方位ニ於テ蔽陰ス、但真方位ナリ、一灯火ハ水面ヨリ高サ五丈三尺五寸ニシテ、光線凡十里_海ニ達ス、

424

甲第四十五号

軍団及各旅団ニテ一時使役セラレ候人夫ノ内、右使役中賃金等ノ義ニ付出願致度者有之候ハ、米ル十五日迄ニ可申出、此旨布達候事、

明治十年十月二日

鹿児島県令岩村通俊

425

甲第四十六号

加治木出張所ヲ廃シ、当分福山・菱刈・宮城ニ出張所ヲ設置シ、且田ノ浦出張所ヲ鹿児島ニ移シ、夫々区分ヲ立事務取扱ヲナス件、但日向国ニ關係ナキ布達ニ付之ヲ略ス、

鹿児島ニ移シ、自今左之通区分相立事務取扱候条、諸願伺届等其出張所へ可差出、此旨布達候事、

加治木仮庁直轄

(明治十年十月十日)

鹿児島県令岩村通俊

加治木 国分 清水 襲山 踊 横川 溝辺 帖佐 山田 蒲生

重富 吉田 硫黄島 竹島 黒島 口ノ島 諏訪瀬島 中ノ島

西岩島 臥蛇島 平島 宝島

鹿児島出張所所轄

鹿児島 谷山 郡山 伊集院 桜島

福山出張所所轄

福山 敷根 恒吉 末吉 岩川 財部 百引 市成

菱刈出張所所轄

菱刈 牛山 太良 栗野 吉松

宮ノ城出張所所轄

宮ノ城 鶴田 佐志 黒木 大村 入来 山崎 樋脇 蘭牟田[△]

426

区戸長

人馬賃錢ニ付、兵乱中一時仮定ノ義、出張官員より口達ノ向モ有之候所、此程鎮定ニ帰シ候ニ付、都ヲ平常ノ賃錢ニ可引直、此旨相達候事、

明治十年十月三日

宮崎支庁

427

乙第十四号

正副区戸長

取調之儀有之候条、別紙雛形ニ照シ、来ル廿日限り各所管庁又ハ出張所へ可届出、此旨相達候事、

十年十月三日

鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

明細書

某国何大区何小区

某郷某村何番地居住

士族
平民
何ノ誰印

年令

一何年何月何日、某所^{区長・副区長}・^{戸長・副戸長}拜命、

一月給何^石被下置、官給・民費・課出力、

但何年何月分迄請取申候、

一役分地又ハ元庄屋浮免高何石、

一何年何月何日勤向相伺候処、従前之通可相勤旨御指令、

一何年何月何日左之通拜命、

何ノ誰

第何大区某郷^{区長・副区長}・^{戸長・副戸長}心得申付、一ヶ月金何^金出給与云々、辞令ノ金[□]ヲ記ス可シ、

但月給何月分迄請取申候、一受持左ノ通

何大区何小区

何小区

戸数何程
反別何程
戸数何程
反別何程
合
反別何程

右之通御座候也、

明治十年十月 月 日

428

宮崎支庁

近頃コレラ病流行ニ付、予防法等夫々布達及置候処、右流行之地方避病院之儀ハ、成丈人家隔絶之場所ヲ撰定シ、在来之家屋ヲ借受可相設、尤可借受家屋等無之候得ハ、仮ニ家相建、右病症ニ類似スル患者共連々該避病院へ送付治療可為致、此旨相達候事、

明治十年十月三日

鹿児島県令岩村通俊

虎列刺病予防法心得

第一条 外国地方ニ虎列刺病流行シテ、内務省ヨリ檢疫規則ノ施行ヲ課スルトキハ、開港場アル地方長官ハ医員・衛生掛・警察官吏等ヲ撰定シテ其委員トナシ、外国領事ニ協議シ、該規則ヲ遵奉シ

テ予防拒絶ノ事ヲ担任セシムヘシ、

第二条 虎列刺病流行ノ地方ヨリ米ル船舶ハ、港外一定ノ地ニ於テ検病委員其船ニ就キ、船長並ニ医官及患者、或ハ死屍ノ有無ヲ尋問檢索シ、該病者ニ罹レルモノ、或ハ疑似ノ症状アルモノハ之ヲ避病院ニ移シ、病者ナキモノト雖トモ、若干ノ時日ヲ限リ入港ヲ許サ、ルコトアルヘシ、

第三条 港口に於テ、離島或ハ人家隔絶ノ地ヲ撰ビ、臨時避病院ヲ設ケ、入港船舶ノ「虎列刺」病患者ヲ入ル、ニ供シ、或ハ便宜ニ従ヒ、該地方ニテ此病ニ罹リタルモノモ入院セシムルコトアルヘシ、

但避病院ハ其構造極メテ輕易ヲ主トシ、三棟ヲ建ルカ、或ハ一棟にシテ三室ニ区画シ、輕症・重症・恢期ノ患者ヲ分チ置クヘシ、

第四条 避病院ニハ黃色ノ布ニ字ヲ黒記シタル標旗ヲ建テ、其境界ニハ制止榜ヲ立テ、嚴シク外人ノ交通ヲ絶ツヘシ、且ツ該院ニ需用スル一切ノ物品ハ、使丁ヲ定メテ購求シ、其使丁ハ決シテ病室ニ入り、或ハ病毒汚染ノ物品ニ触レシムヘカラス、

第五条 避病院ノ病者全快シタルトキハ、委員ヨリ全快ノ証書ヲ与ヘ、衣服其他一切ノ什具ニ消毒法ヲ行ヒ退院セシムヘシ、病者輕快ニ赴クトモ、委員ノ許可ヲ得ルニ非サレバ、決シテ院外ニ出ルヲ許サス、

第六条 避病院ニ於テ死亡シタルモノ、埋葬地ハ、委員ニ於テ相定シ、妄リニ埋葬スヘカラス、但該地方ニ墓地ヲ有スルモノ、委員ノ許可ヲ得、消毒法ヲ行フノ後ハ運搬スルモ妨ナシ、

以上六条、開港場アル地方ニテ檢疫規則ニ參酌シ、施行スヘキ

モノトス、以下、流行ノ時地方一般ノ予防法ニ係ル、

第七条 地方官ハ、管内ニ亜細亜虎列刺病者アルコトヲ医師ヨリ届ケ出タルトキハ、其病性ノ真偽ト諸症ノ緩劇トヲ詳カニシ、若シ真ノ亜細亜虎列刺病ナルヲ確認スルトキハ、委員ヲ命シ予防法ヲ着手シ、内務省ニ申報シ、且ツ管内近隣ノ地方庁ニ報告スヘシ、

第八条 医師ハ虎列刺病者ヲ診察スルトキハ、其時々直チニ区戸長或ハ医務取締ヲ經テ、地方庁ニ届出ヘシ、

第九条 地方庁ハ、医師ヨリ日々出ス所ノ申牒ヲ集メ、患者ノ数ト死者ノ数トヲ記シ、毎土曜日之ヲ内務省ニ申報スヘシ、

第十条 地方長官ハ、虎列刺病流行ノ勢盛ナルトキハ、日々二十四時間ノ死亡員數ヲ管内ヘ告示スヘシ、

第十一条 貸家・旅店・滯泊ノ船・學塾及ヒ諸製造所ノ主等、總テ衆人ヲ管スルモノハ、若シ其内ニ虎列刺病ニ罹ルモノアル時ハ、二十四時間内ニ委員・区戸長或ハ医務取締ニ届クヘシ、

第十二条 陣營ノ主將・軍艦ノ艦將モ、其配下ニ虎列刺病者アルトキハ、二十四時間内ニ其地方庁ニ通知スヘシ、

第十三条 虎列刺病者アル家族ハ、看護ニ緊要ナル人ノ外ハ成丈他家ニ避ケシメ、妄リニ往來スルヲ許サズ、患者快復或ハ死亡ノ後消毒法ヲ行ヒ、十日ヲ經ルニ非サレバ学校ニ入ルヘカラス、

第十四条 虎列刺病流行ノ時ニ際シ、地方長官ハ祭礼・開市等、無益ナ他方ノ人ノ群集スル事件ヲ禁スヘシ、

第十五条 前条ノ場合ニ於テハ、地方官ハ病勢緩急ト人口ノ多寡トニ応シ、管内各市區ニ於テ、特ニ「虎列刺」患者ノミヲ療養スル仮病院ヲ設ケ、旅店ノ貸家等多人数同居ノ患者ヲ探シ入ルヘシ、

第十六条 委員ハ「虎列刺」病者アル家宅・船舶ノ門戸・入口ニ、

著シク「虎列刺」伝染病アリノ数字ヲ記シテ之ヲ貼布シ、成丈ケ無用ノ人ノ交通ヲ絶ツヘシ、

第十七条 委員ハ特ニ「虎列刺」病者ノ吐汚物ニ注意シ、該病者アル家ハ一々其処置ヲ示諭シ、決シテ便所・下水・芥溜・田圃・河海等ニ投棄セシムヘカラス、附録、消毒法ヲ參酌スヘシ、

第十八条 委員ハ「虎列刺」病者アル家屋・船舶・器具類等消毒法ヲ行ヒ、或ハ器具ノ極メテ汚レタルモノハ、買上ケテ之ヲ焼却・埋却スル等、總テ病毒傳播防制スル便宜ノ方法ヲ設ケ、地方長官ノ許可ヲ得テ之ヲ施行セシムヘシ、同上、

第十九条 「虎列刺」病流行ノ時、或ハ其恐れアルトキハ、委員ハ便所・芥溜・下水・溝渠等、總テ一般ノ清潔ニ関スル事件ニ注意スヘシ、但シ掃除ハ既ニ流行ノ時ニ及テハ、或ハ行フテ却テ害アルコトアリ、消毒法ヲ行フヘシ、同上、

第廿条 「虎列刺」病者ヲ運搬シ、或ハ該病ニ罹リテ後他行シ、或ハ患者若クハ屍体ニ触レタル物品ヲ、消毒法ヲ行ハサル前贈与受用スル等、總テ不注意ニ由テ、病毒ヲ他ニ傳播スヘキ事件ヲ禁スヘシ、

第廿一条 「虎列刺」病者ヲ病院或ハ其自宅ニ送ルニハ、各地方ニ於テ此規則ニ參酌シ、相当ノ手續ヲ定メ、妄リニ運搬轉移スルヲ禁ズ、且ツ其運搬器ハ世間公用ノモノヲ用ユルヲ許サス、運送後ハ消毒法ヲ行ハシムヘシ、

排泄物或ハ病毒ニ汚染シタル器具ヲ、消毒法施行ノ場所ニ送ルトキ、亦其手續ヲ定メ注意ヲ加フヘシ、同上、

第廿二条 「虎列刺」病者ノ死屍ハ、該地方ニテ定メタル埋葬地ニ非サレバ、他ニ運送スルヲ許サス、運送ノ器モ再ヒ生人ニ用フル

ヲ禁ス、而シテ其通路ハ最捷近ナルモノヲ撰フヘシ、

第廿三条 内國ノ港湾ニ於テ、往來ノ船舶ニ「虎列刺」病者アルカ、或ハ八十日以内ニ此病ニ斃レタルモノアルトキハ、緊泊前其舟師ヨリ該地ノ委員或ハ区戸長ニ届出テ、其差図ヲ受タル場所ニ碇泊シテ、全ク外人ノ交通ヲ絶チ、消毒法ヲ行ヒ、其許可ヲ得ルノ後ニアラサレハ其所ヲ移スヲ許サス、

第廿四条 「虎列刺」病流行ノ地方ニ在リテハ、便宜ノ場所ニ消毒藥販売ノ所ヲ設ケ（在來ノ藥店ニ命シ、若シ藥店ナキハ、新ニ此販賣所ヲ假設ス）委員ニテ其藥価ヲ一定シ、購求スルモノニハ施行方法ヲモ伝示セシムヘシ、貧困ノモノハ無費ニテ給与スルコトアルヘシ、

内務省衛生局報告第五号

明治十年八月二十四日發行

虎列刺病ノ流行スルヤ、其勢甚タ迅疾ニシテ、殆ント耳ヲ掩フニ及バサルモノアリ、其時ニ当リテハ、官庁ヨリ予防救済ノ注意アルベシト雖トモ、其養生法ト吐汚物ノ洗淨法トノ如キハ、各人予テ之ヲ心得置キ、深ク戒慎スルニ非レハ、膏ニ其一身ヲ非命ニ殪スニ止マラス、必ズ其慘毒ヲ他人ニ延蔓シテ、底止スル所ヲ知ラザルニ至ルベシ、因テ今其方法ヲ記シテ左ニ報告ス、

コレラ病流行之節各自に注意すへき養生法

附吐汚物洗淨法

コレラ病ハ同じく其病毒に触る、人と雖も、悉皆之に感染するものに非ず、外襲病毒の外更に其体中に於テ之に應ずるものあり、始めて病を發するものなれば、消食機病殊に下利に罹るものは

最も危く、且つ其常住座臥を同しくする人にても、毎に腸胃の健康なるものにハ感染スること希れにして、虚弱なる人に多きが故に、其流行の時に際しては、別して飲食を節用し、労働を慎しみて消食機を健全にし、感冒・食傷等をなさざる様に用意をなし、若し輕き下利、或ハ他の消食機病を発することあれば、速に医師に就き大切に養生すべし、食物ハ一つ一つの品を定めて其良否を致さんよりハ、其調理ト節用トに注意するを肝要なりとす、如何なる良品にても生物を食し、或ハ多食するときハ、下利其他の腸胃病を発して伝染を招き、或ハ伝染するものなり、其外各人の慣習に因りて、常に下利を発する物ハ同様の害あれば決して用ふべからず、偕其用ふべき食料にハ、穀物及ヒ牛・犢・羊・鶏の鮮肉を最上とす、家鴨・雁・豚の肉ハ脂肪多くして宜しからず、又魚介を厳禁するといふことあれども、海浜にてハ常食になすか故に、之か為に差支を生ずし、渾底新鮮なる者ハ差して禁ずるに及ばず、野菜ハ蒿莖の類を捨て、馬鈴薯の如き澱粉を含める根類(蕃薯及ヒ芋類)を食すべし、魚介・蔬菜ハ勿論統て何品にてても、煮蒸焼炙等の調理を経たる物に非れハ用ふべからず、又成熟せる菓実・桃・李・梨・橘・葡萄・莓の類を少許ツ、食するハ害なしと雖も、不熟のものハ必ず之を忌むべし、

飲水ハ不潔或ハ疑ハしきものを忌むべし、凡て此際に於てハ何れの水をも皆不潔なるものと想ひ定め、一とたひ者沸て後ちに用ふるを良しとす、但し煮沸て後ち復た冷せし水ハ、其新鮮活発の味を失ふものなるか故に、少量の茶或ハ葡萄酒を加へて其味を直すべし、抑飲水を清淨にするに、過満俺酸加里といふ薬を称用する者あれども、之を化して僅に赤色を帯ぶるを度とし、決して多量

加ふべからず、若し此酸を滴らして、其水茶褐色となるものハ、夥しく有機物を含有するの証にして、飲料に適せざるものと知るべし、又茶酒等を適用すべしと雖、酒ハ極めて少量に限り、又酸氣を帯びたる乳并酸味の飲料ハ勿論、冷水・氷製の如きも禁忌すべき物とす、

以上、飲食の適用と心得誤りて、全く穀物・野菜を食はず、只々肉と羹汁とのみを限り、或ハ粥のみを以て常用とし、飲料にも赤葡萄酒のみを用ふる等ハ、大なる過ちなりとす、又最良の飲食たりとも其用ふる分量を平日より少しく減ずべし、然れども甚だ空腹に至るときハ、却て害あるものなり、

衣服ハ感冒・下利を予防せんが為に、常服の外にフネル・木綿等にて小腹を巻き、足には毛布の股引の類を穿くを良とす、若し全身湿濡せし時ハ速に乾きたる衣服に着換、早朝深夜の湿氣を避くべし、

冷水を以て、常に全身を洗拭するの習慣ある人ハ、流行中に於ても之を休むるに及ばざれども、其冷浴の如きハ止むるを以て良とす、過度の運動(盛宴不眠・非常の奔走等)、精神及ヒ身体の疲労、憂愁・憤怒の如き神思の感動を避けて、居常活発爽快ならんことを務むべし、総して衰弱・遺伝・病後・労働等に由るの別なく、皆伝染病の感応性を増加するものなり、

コレラ病者の見舞ハ成丈ケ之を避くべし、仮令躬ら之に感染せざるも、更に他に伝及するの媒となるの恐れあるものなり、然れども止むことを得ずして見舞ふときハ、必ず空腹にて往く可からず、已に見舞ひし後にハ、即ち石炭酸水(二分の結晶石炭酸を百倍の水に溶したるもの)を以て漱き、又ハ此水に半量の浄水を和して

顔面をも洗ひ、次て石鹼にて洗浄すへし（石炭酸を和して製したる石鹼ハ便利なりとす）、

居所を清潔にし、寢室の空気を乾燥ならしめ、糞尿を除去すべし、是等の汚穢物ハ伝染の媒となるものなれば、深く注意して禍を招くこと勿れ、

流行地方に居住せざるも、敢て差支なき人にして、甚しくこの病を恐るゝものハ避けて、人迹の少なき山郷に赴くに如くハなし、然れども此病を感受するの日より、発病までに至る間ハ甚ダ不同にして、其短き者ハ二十四時に於て発すべしと雖も、長きハ二十一日に至ることもありて、其発証ハ至て幽微なるが故に、既に気分悪しく下利する時ハ、最早旅行すべからず、

吐汚物洗浄法

コレラ病者あるの家に於て消毒の法を行ふハ、委員并ニ医師の指示を受くべしと雖も、今心得の為に吐汚物掃除の方法を示すべし、抑コレラ病の伝染毒ハ其吐汚物に舍どれるものなるが故ニ、特に其掃除に注意すへし、元來邦人の習慣にてハ、斯る病毒の舍どれる吐汚物にても、或ハ之を河海に投じ、或ハ之を下水に投すれハ、其病毒ハ既に消滅したりと誤り認めて、早晚其水に混して伝播し、又ハ地中に浸潤し井泉にまで透竄して、病毒の伝染するに至るを知らざるもの多し、人々善く之を心得置き、消毒薬を買求め、予め吐汚物を受ける器にハ此薬を容れおき、已に使用せし後ハ直ちに屋外に持出して洗浄し、又其消毒薬を入れ置くべし、偕此吐汚物并に其器を洗浄せし水ハ、決して之を他人の用ふる糞池に混すべからず、悉皆之を取分け、住家及び井戸を距ること六間半余の地に於て、深く其土を掘りて之を埋め、或ハ焼捨つべし、若シ自宅に

此の如き余地なき者ハ、前ノ如く消毒法ヲ行ひ置き、一日に二度或ハ三度程ツ、一定の場所（一定の場所とハ、委員或ハ区戸長ヨリ予て吐汚物等を処分する地を定め置くものを云ふ）に送るべし、尚ほ詳細ハ委員及ヒ医師・区戸長の指図を受けて、精々手拔けなき様に処分すべし、

予防法附録 消毒薬及其方法

「虎列刺」病ノ真因ト其蔓延ノ実況トハ、未タ明了ナラスト雖モ、其病毒ノ特ニ患者ノ吐汚物ニ舍トレルコトハ諸説ノ一定ニテ、復タ疑ヲ容レサル所ナリ、

而して此吐汚物モ、排泄ノ後直チニ伝染ノ毒ヲ逞フスルモノニ非ラサルニ似タリ、少時ヲ経テ泡醗腐敗ニ陥リ、然ル後始テ一種ノ伝染毒ヲ醸成スルモノナリ、故ニ吐汚物ヲ他ノ腐敗シタル物ニ混スルトキハ、其腐敗スルコト最タ速ニシテ、病毒ヲ発止スルコト最甚シ、「虎列刺」病者ノ吐汚物ヲ他人ノ糞戸ニ混スルヲ常ノ便所・投棄スルノ類トキハ、大ニ其蔓延ノ勢ヲ熾ニスルモノナリ、

右ノ如クシテ發生シタル病毒ノ人体ニ侵入スルハ、飲水「虎列刺」病ノ媒介トナル近傍ノ水源、或ハ井食物「虎列刺」病者ノ排泄物ヲ食ヒタル魚介・家畜ノ肉、或ハ該排泄物ヲ培養ニ供タル蔬菜、或ハ病毒ノ氣中ニアリテ之レニ□□、或ハ小虫、或ハ消毒法ヲ行ハサル便所等汚物ヲ齎シテ附点スル等ヨリ伝フルニ由ル、或ハ消毒法ヲ行ハサル便所ニ上ル等ナリ、而シテ人体・器具モ亦能ク病毒ヲ播伝スルノ媒介トナルモノナリ、

此故ニ、海陸ノ檢疫規則ヲ以テ、全ク此病ヲ拒絶スルノ企望ハ、其目的ヲ達スルコト極メテ難シトス、而シテ消毒ノ法ハ、近來「虎列刺」病予防方法中最大緊要ノ事件トナリ、其予防ノ実績ヲ奏シケルハ各国ノ音ナク実験スル所ナルヲ以、此方ヲ施行スルハ、之

ヲ人民各自ノ注意ニ任セテ足レリトスヘキモノニ非ラス、必勸奨或ハ強迫シテ、嚴重ニ奉行セシムルハ保護ノ要件ナラトス、是レ此方法ハ直ニ病毒ヲ撲滅スルノ力アルカ故ニ、精密ニ注意シテ施行スルトキハ能ク其蔓延ヲ制シ、且ツ該地ノ病根ヲ永遠ニ絶ツコトヲ得ルモノナレバナリ、輒近欧州諸国伝染病流行ノ時ニ際シテハ、一般ニ之ヲ施行シ、之カ為メニ莫大ノ國費ヲ要スト云フ、消毒藥中最有力ノモノハ石炭酸ヲ第一トス、近來消毒法ノ声誉ヲ得タルハ職トシテ此發明ニ由ルナリ、之ニ次クモノハ亜硫酸瓦私ナリ、綠礬ノ單用ハ防臭ノ能アルノミ、病毒ヲ撲滅スルニ足ラス、亦タ石炭酸ヲ配用スヘシ、

消毒藥方

(第一) 粗製石炭酸

四十五分ヨリ六十分ノフェニル酸^{即チ結晶石炭酸}ヲ含ムモノニシテ、稍色ヲ帶ヒ流動シ、水ニ溶化シカタシ、「テール」ヲ化スレバ不快ノ臭氣ヲ發ス、

(第二) 石炭酸末

右ノ粗製石炭酸ニ、木炭・砂・灰・鋸屑等ノ粗末ヲ化シタルモノ、

(第三) 結晶石炭酸^{即チ「フェニル酸」又「フェニルアルコール」}

無色ノ結晶酸ニシテ、全ク水ニ溶解スルモノ^{十八分至廿分ノ水ニテ既ニ溶解ス}

(第四) 石炭酸水

結晶石炭酸一分ヲ百倍ノ水ニ溶シタルモノ、

(第五) 石炭酸溶液

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ和タルモノ、

(第六) 硫酸鉄ト石炭酸トノ混和溶液

一「キロ」ノ礬綠ヲ十五「リトル」ノ水ニ和混シ、三百ガラム至三百五十ガラムノ粗製石炭酸ヲ加ヘタルモノ^{此合劑ハ久シク貯フヘカラス、用ニ臨テ調合スヘシ}

(第七) 石炭酸蒸氣^{用ニ從テ、粗製或ハ結晶酸ヲ用ユ}

石灰酸ヲ皿ニ盛り、文火ニ上セ蒸散セシム、

(第八) 亜硫酸瓦私

硫酸ニ火ヲ点シ、燒テ瓦私ヲ發ス、

消毒用法

消毒法ヲ施行スルニハ、(第一) 其汚物・吐物、及ヒ此吐汚物ヲ以汚シタル衣服・夜具・紙屑・布片等、及ヒ其屍體、(第二) 患者ノ消息シタル居室・船室若クハ病院・陳營等、(第三) 便所・塵芥・下付等、一切不潔ノ淨除ニ注意スベシ、

(第一) 病毒ニ汚染シタル物品

(排泄物) 吐汚物ヲ受ル器ハ、予メ礬綠ニ石炭酸ヲ混タルモノ^(第六)一合余ヲ入レ置キ、用ヲ終ルノ後ハ直チニ屋外ニ持出シ洗淨シテ、又右ノ消毒藥ヲ入レ用ニ備フヘシ、

吐汚物並ニ其器ヲ洗淨シタル水、及ヒ吐汚物ニ染ミタル紙屑・布片ハ、溝渠・下水・芥溜・田圃等ニ投棄スヘカラス、且ツ此吐汚物、他ノ腐敗物ニ混スルトキハ、其病毒ヲ釀成スルコト殊ニ甚シキヲ以テ、決シテ之ヲ尋常ノ便所ニ投シ、健康ナル人ノ糞尿ニ混スヘカラス、總テ「虎列刺」病者ノ排泄物ハ悉皆之ヲ取分ケ、深ク土ヲ掘リテ之ヲ埋メ、十分ニ石炭酸末^(第二)ヲ撒布シ、然ル後土ヲ覆ヒ雜草ヲ種ユヘシ、又排泄物ヲ燒却スルハ殊ニ良トス、深ク穴ヲ掘リ、底ニ乾キタル藁或ハ鉋屑ヲ布キ、吐汚物ヲ其上ニ投シ、再ヒ藁或ハ鉋屑ヲ覆ヒ、石炭油ヲ灌キ火ヲ点ス、火勢滅ス

ルトキハ之ヲ攪セ、再ヒ油ヲ注キ、全ク灰燼トナルノ後穴ヲ填メ、
雜草ヲ種ルコト前ニ同シ、

但シ排泄ノ度毎ニ斯ク埋却・焼却スルヲ要ス、積テ若干ノ容量ニ
至テ燒棄シテ可ナリ、

排泄物ハ、家屋・井戸・用水等ヲ距ルコト七間以上ノ場所ニアラ
サレバ埋ムヘカラス、且ツ一穴ニ多量ヲ収ムヘカラス、

自宅ニ吐洩ヲ埋メ或ハ燒タノ余地ヲ有セサルモノハ、前段ノ如ク
消毒法ヲ行ヒ置キ、一日二回或ハ三回、一定ノ場所ニ送ルヘシ、

委員ハ予メ之カ為メニ恰當ノ地ヲ定メ、排泄物ヲ処分スル所トナ
シ、各家ヨリ送ル所ノ排泄物ヲ、前法ニ從テ燒キ或ハ埋ムヘシ、

紙屑・布片等ノ汚物ニ染ミタルモノハ、排泄物ト共ニ燒却スヘシ、
(衣服・夜具)洗濯ニ堪ユベキ衣服ハ桶ニ入レ、石炭酸溶液(第五)

ヲ濯キ浸シ置クコト一昼夜ニシテ、更ニ熱湯ヲ注キ煮ルコト四分
時後水ニテ洗淨ス、洗濯ニ堪ヘサル衣服ハ、其品柄ニヨリテ亜硫

酸瓦私(第八)或ハ石炭酸蒸氣(第七)ヲ以テ薰蒸スヘシ、
「虎列刺」病者或ハ其死屍ニ触レタル人ノ上衣ハ、吐洩物ニ汚染

シタルニ非ザレバ、汚染シタルモノハ勿論前法ニ從フヘシ、石炭酸溶液(第五)ヲ吹掛ケ、
或ハ海綿ニ浸シテ拭ヒ、然ル後刷淨シテ空氣ニ晒スヘシ、

(夜具)ノ類モ石炭酸溶液ヲ浸シ、後煮沸洗淨スルコト衣服ニ同
シ、其洗濯スベカラサルモノハ、十分ニ石炭酸ノ蒸氣ヲ薰シ、或

ハ溶液ヲ布片・海綿ニ浸シテ洗刷スヘシ、
總テ衣服・夜具・畳・蓆等ノ甚シク汚レタルモノハ、買上ケテ燒

却スヘシ、

(家具)木材ノ具・飯膳ノ具等ハ皆石炭酸水(第四)ヲ濯キ、然ル
後石鹼水ニテ洗淨シ乾カスヘシ、其洗フベカラザルモノハ亜硫酸

瓦私(第八)或ハ石炭酸蒸氣(第七)ニテ薰シ、或ハ石炭酸溶液
(第五)ヲ海綿・布片ニ浸シ拭淨スベシ、

總テ日常ノ家具ハ、病室ニ入レテ一時ニ薰蒸シ、石炭酸水ヲ以テ
洗淨スルヲ最良トス、

書籍・新聞紙ノ類病室ニアリタルモノハ、開キテ石炭酸蒸氣ヲ薰
スヘシ、

(器械)外科・産科ノ道具、職人手道具ノ類ハ、石炭酸水(第四)
ヲ以テ洗フヘシ、

(食物)ノ汚タルモノハ投棄スヘキ者^(註)居多ナリ、或ハ消毒法ヲ行
フテ足ルモノアリ、委員ノ指図ニ隨フヘシ、

(死屍)「虎列刺」病ニ斃レタルモノハ成丈ケ速カニ片付け、十分
ニ石炭酸溶液(第五)ヲ浸入シタル木綿ヲ以テ之ヲ包ミ、健康ナ

ル人ヲ近ツカシムヘカラス、棺ノ内ニ多量ノ石炭酸末(第二)ヲ
充テ、時々石炭酸溶液ヲ濯クヘシ、

(第二)家屋・船舶・病室等
(部屋)「虎列刺」病者アル部屋並ニ死屍ヲ置ケル部屋ハ、十分ニ

石炭酸蒸氣(第七)結晶酸^{此品ハ別ニ相當}ヲ薰シテ之ヲ満室ニ籠ムヘシ、患者
全快シ或ハ埋葬ノ後ハ、先ツ室中ノ金銀器・書画・彩色物・絹物

等ヲ取除ケ^{此品ハ別ニ相當}ノ消毒法ヲ行フ、窓戸ヲ密閉シ、火鉢ニ火ヲ盛リ、其上
ニ硫黃ヲ置キ入口ヲ閉ツヘシ、薰蒸スルコト六時至八時ニシテ、

火鉢ヲ除キ窓戸ヲ開キ、少時ヲ經テ室内ノ諸物ヲ大氣中ニ持出シ、
敲キ払フヘシ、天井・建具等木製ノモノハ石炭酸水(第四)ヲ注

キ、石鹼水ヲ以テ洗淨シ、後空氣ニ晒スヘシ、

(運搬器具)「虎列刺」病者或ハ其死屍ヲ運送シタル舟・車駕等ハ、
用フル度毎ニ石炭酸水(第四)ヲ以テ洗ヒ、或ハ石炭酸蒸氣(第七)

亜硫酸瓦私（第八）ヲ薫スヘシ、右ノ駕車中ニ具ヘタル器具ハ、前条ノ消毒法ヲ參酌シテ行フヘシ、

（第三）便所・芥溜・下水等

（便所）ハ日々其糞池ヲ掃除シ、十分ニ緑礬・石炭酸ノ合剤（第六）ヲ撒布シ、再ヒ汚臭ヲ放ツヲ見ハ直ニ之ヲ撒スヘシ、

（芥溜）ハ流行前ニ掃除スベシ、既ニ流行ノ時ニ及テ掃除スルハ、攪擾シテ其悪氣ヲ揮發シ、却テ害アルコトアリ、靜定シテ時々其上ニ石炭酸末（少シ）撒布シテ之ヲ覆フヘシ、或ハ掃除ノ時ニ臨ミ、石炭酸・緑礬ノ合剤（第六）ヲ灌クモ亦良シ、
（下水溝渠）ハ日々之ヲ流通シ、水ヲ灌テ洗淨スヘシ、甚シク汚穢ノ滯塞シタル所ハ、石炭酸水（第四）ヲ注クヲ良トス、

429
往第八十七号

宮崎支庁

各区正副戸長ノ内、賊徒ニ党与シ或ハ私罪等ヲ犯シ就縛ノ者ハ、直ニ職務差免シ、右人名可届出旨九月廿二日付ヲ以相達置候処、右ハ取除候条、同廿一日相達候通可相心得、此旨更ニ相達候事、

明治十年十月四日 鹿兒島県令岩村通俊

430

区戸長

過般兵乱ノ際、賊徒薪用或ハ木砲製造用トシテ、道路並木ヲ伐採スル分有之、右ハ賊徒ノ所為ニシテ無余儀次第二付、伐木清遺残ノ木材有之候ハ、詳細取調、処分方可伺出、此旨相達候事、

明治十年十月七日 宮崎支庁

431

鹿兒島県士族

大山綱良

其方儀、鹿兒島県令奉職中、朝憲ヲ憚ラス西郷隆盛等ノ逆意ヲ佐ケ、少警部中原尚雄等隆盛ヲ暗殺セント謀リシ由、私学校ノ者共擅ニ取捨タル口供ヲ隆盛ヨリ受取り、直ニ之ヲ印刷シ、右ノ故ヲ以、隆盛等政府ニ尋問ノ為上京、旧兵隊ノ者多人数随行聞届タル旨管下ニ布達シ、尚ホ人心ヲ煽動スル為メ專使ト称シ、各府県鎮台ニ属官等ヲ派遣シ、又ハ各課ノ属官等ヲシテ賊用ニ供セシムル而已ナラス、県庁現在ノ官金十五万円余ヲ隆盛等ニ相渡シ、且県庁内式ケ所ニ焚出場ヲ設ケ、官米ヲ以糧食ヲ給スル科ニ依リ、除族ノ上斬罪申付ル、

明治十年九月廿日

右之通、去九月三十日、九州臨時裁判所ニ於テ処断行刑済ニ付、此旨及揭示候事、

明治十年十月七日

鹿兒島県令岩村通俊

432

往第百廿七号

宮崎支庁

其地出張病院医員并区内医術營業之者、及負傷患者・平常病者ノ員数等、左ノ雛形ニ準シ詳細取調、至急可申出、此段相達候事、

追テ、毎区医務取締入用ニ候条、出張医員ハ協議之上、各区内医員之治術優劣ヲ察シ、甲乙ヲ附シ可申出事、

明治十年十月七日

鹿兒島県令岩村通俊

雛形

臨時病院出張医員

誰 某
誰 某

都合何名
誰 某

外ニ出張先ニ於テ雇医アレハ、其属籍・姓名ヲ記スヘシ、

一現今入院負傷患者
何拾何人

一同 外来負傷患者
何拾何人

一同 外来平常病者
何拾何人

右、何郷何村出張病院

何大区何小区何郷何町カ士族或ハ平民

医者 誰 某

一負傷患者
何拾何人

一平常病者
何十何人

右、於自宅治療、

433

区戸長

商船出津ノ節、当分之内積荷物品目并ニ乗客姓名、最寄警察分署へ相届、差図ヲ受出港可致旨、九月廿六日付ヲ以相達置候所、今般本県甲第四十二号布達有之ニ付、最前達ノ義遵守ニ不及候条、此旨相達候事、

十年十月十日

宮崎支庁

434

往第百十九号

宮崎支庁

軍人・軍属・人夫等、放免之後コレヲ病ニ掛候者通送ヲ禁シ、其土地ニ於テ処分可致旨、本月三日往第八十六号ヲ以テ相達シ候処、今以テ右病者ヲ本籍へ通送候者有之趣、熊本県より申越候、右ハ各地

処理堺ニテ発病之者、又ハ其病症ヲ誤認シ送付候儀モ有之哉ト被察候条、各出張所官員之内ヨリ至急巡回、右等之不都合無之様、精々取締方注意可致、此旨相達候事、

明治十年十月十日

鹿児島県令岩村通俊

435

支第百十六号

区戸長

昨九年十月一日ヨリ本年六月三十日迄ノ清酒・焼酎日々相場、至急取調可差出事、

明治十年十月十一日

宮崎支庁

436

甲第四十七号

今般西征ノ役ニ服シ戦死ノ者、来ル十四日ヨリ十六日迄、於熊本鎮台招魂祭施行相成候ニ付、右親族ノ者参拜可為勝手旨、同台ヨリ電報有之候条、此旨布達候事、

明治十年十月

鹿児島県令岩村通俊

437

往第百廿七号

宮崎支庁

本月乙第十四号ヲ以テ、正副区戸長へ相達候明細書之儀ハ、式通ツ、取立、迄通ハ該支庁又ハ出張所ニ留メ置、迄通ハ本庁戸籍掛へ郵送可致儀ト可相心得、此旨相達候事、

明治十年十月十二日

鹿児島県令岩村通俊

438

往第百廿九号

宮崎支庁

往第廿号・同四十一号・同八十七号ヲ以、各区正副戸長ノ内、今般之騷乱ニ付不都合之聞ヘ有之者所分方之儀相達候処、右達書中正副之下、戸長ノ上ニ、区ノ字ヲ加入候条、此旨相達候事、

明治十年十月十二日

鹿児島県令岩村通俊

439

甲第四十八号

鹿児島裁判所宮崎支庁本日開庁候条、訴状等所長判事寛元忠代理判事鶴峯申敬名宛ヲ以、同庁ヘ可差出、此旨布達候事、
但宮崎支庁ハ日向一國ヲ所轄候事、

明治十年十月十三日

鹿児島県令岩村通俊

440

甲第四十九号

艦内教授役以下水火卒名簿取調候条、国郡大小区町村姓名及家族扶助金、何年何月迄受領、以降何月ヨリ何月迄未領等明細記載、布達到着ヨリ二十日ノ内、日向地方ハ宮崎支庁、其他ハ本庁并各出張所ヘ無遅滞可差出、此段布達候事、

明治十年十月十三日

鹿児島県令岩村通俊

441

往第百四十三号

宮崎支庁

日向地方区戸長給料官費支給方之儀、先般内務省ヘ上申致置候処、今般別紙写朱書之通御指令相成候条、為心得此旨相達候事、

明治十年十月十三日

鹿児島県令岩村通俊

別紙

發第百五十九号

区戸長給料ノ義ニ付上申

当県下区戸長給料ノ義、官費ヲ以支給致シ度段、本年四月十三日付ヲ以相伺候処、当分伺ノ通り可相心得云々御指令有之、尚赴任後追々取調候処、旧宮崎県ニ於テハ既ニ民費賦課方法モ相立居候赴ニ候得共、日向地方ノ儀ハ、目今多ク賊徒ノ占拠スル所トナリ、且戦鬪ノ地ニ係ルヲ以テ、人民ノ困厄亦他ノ諸戦地ニ異ナルナキハ今更申上候迄モ無之、到底民費課出ノ義ハ差向一般行ハレ難ク存候、就テハ当分旧同県下ノ分モ前ノ御指令ニ準拠シ、官費支給致シ候間、為念此段上申仕置候也、

明治十年七月廿七日

鹿児島県令岩村通俊

内務卿大久保利通代理

内務少輔前島密殿

書面ノ趣当分開置候条、鎮靜次第可成速ニ改正候様可致事、

明治十年九月廿四日

内務卿大久保利通



442

支第廿八号

区戸長

軍団本営ヨリ別紙之通被相達候条、左ノ雛形ニ照準シ届書差出可申、此旨相達候事、

明治十年十月十三日

宮崎支庁

別紙

○ (兵乱之為メ立退出居宅、旅団之宿営ト相成候者ノ雛形)

居宅御宿営ノ儀ニ付御届書

一 建家 何坪

右ハ私所有ノ居室ニ候処、今般之兵乱ニ付、何月何日何処ニ立退
居候処、何月何日ヨリ、何旅団何番隊何掛御宿ニ相成居、何月何日
何月何日帰宅ノ処御出発相成候、尤宿料ハ受取不申候、此段御届申上候、以上、

年号月日

何大区何小区何町何番地

士族
平民

何ノ誰印

区戸長

何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

○ (在宅ノ者居室、旅団ノ宿営ト相成候者ノ雛形)

居室御宿営ノ儀ニ付御届書

一 建家 何坪

内何坪御宿営

右、私所有ノ居室ニ候処、何月何日ヨリ何旅団何番隊何掛御宿ニ
相成、何月何日御出発相成候、尤宿料ハ受取不申候、此段御届申
上候、以上、

年号月日

何大区何小区何町何番地

士族
平民

何ノ誰印

区戸長

何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

○ 御用米ノ儀ニ付御届書

一 玄米 何石

此代金何程 但玄石ニ付金何円相場

右、何月何日旅団何番隊ヨリ御需用相成候ニ付、一時繰替御用立
仕候、依テ証拠書相添此段御届申上候、以上、

年号月日

何大区何小区何町何番地

士族
平民

何ノ誰印

区戸長

何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

○ 御用品ノ儀ニ付御届書

一 何品 何程

此代金何程

一 何品 何程

此代金何程

右ハ、何月何日何旅団何番隊ヨリ御需用相成候ニ付、御用立仕候、
尤代金ハ受取不申候、依テ証拠書相添此段御届申上候、以上、

年号月日

何大区何小区何町何番地

鹿児島県令岩村通俊殿

士族
平民

何ノ誰印

右戸長

何ノ誰印

○

御用竹木ノ儀ニ付御届書

一板竹木材 何枚本 但 壹枚ニ付金何程

右者、何月何日何旅団何番隊ヨリ御需用相成候ニ付、御用立仕候、尤代金ハ受取不申候、依テ証拠書相添此段御届申上候、以上、

年号月日

何大区何小区何町何番地

士族
平民

何ノ誰印

右戸長

何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

443

往第百三拾八号

軍人・附属^(軍カ)・人夫等放免之後病氣ニ罹リ、其元籍へ通送致来候者、コレヲ病者ニ限リ、伝染ノ恐有之候ニ付通送相禁候旨、本月三日往第八十六号ヲ以相達候処、若シ其病症ヲ誤認シテ、全ク余病ノ者モ通送差止候儀有之候テハ、本人難儀ニ可及ト被察候条、右等一層注意致シ、医師之診断儘ニ余病ニ相違無之分ハ通送可為致、此旨相達

候事、

明治十年十月十四日

宮崎支庁

鹿児島県令岩村通俊

444

往第百五号

宮崎支庁

大分県ヨリ、管下士民ノ内国事犯免罪ノモノ、延岡出張所へ向ケ送致ノ趣、別紙之通申来候条、為心得此段相達候事、

明治十年十月

鹿児島県令岩村通俊

写

御県下士民之内国事犯免罪之者六百貳拾六人御引渡之儀ニ付、本月七日附ヲ以御照会之趣致承知候、右ハ本月一日之電報ハ不相達候得共、同六日電信ニテ御回答相達候間、病患者ヲ除ノ外ハ、本月八日以来陸地ヨリ、追々延岡御出張所ヲ向ケ、巡查差添及御送致候条、此段御承知相成度、右及御回答候也、

明治十年十月十三日

大分県権令香川真一

鹿児島県大書記官渡辺千秋殿

445

支第百九号

区戸長

本年貢米ノ儀ハ、出願次第石代金納差許候、尤旧宮崎県中相定到リ、中村町・広瀬町・高鍋町・延岡町・富高町・高千穂三田井村・飫肥町・外ノ浦・福島町・都城町・高城町・小林町以上十二ヶ所、本年十月十五日ヨリ同十二月十五日マテ日数六十二間^(日脱カ)、日々ノ相場平均ヲ以石代金收入候条、石代納致シ村々ハ大区事務所ニ於テ取纏、来

ル十二月十日限願書可差出、且赤米其他雜穀ハ総テ金納ト相心得、
区内無漏可相達、此旨相達候事、

但正米納致シ候村々ト雖、米ル十二月十日限、其旨可申出事、

明治十年十月十六日

宮崎支庁

446

九拾四六 大区

区戸長

本月十二日以来、高鍋より当地迄ノ電信線屢々断線致候者有之、夫
レカ為通信不通相成候而已ナラス、剩銅線ヲ盗去候趣、其筋より掛
合有之、右者^{本年九月}支庁番外沓号ヲ以及布達置候通、直ニ当庁及警視
分署巡行巡查ヘ可届出筈之所、無其儀等閑ニ相通候段以の外ノ事ニ
候、自今心得違之者無之様一層注意、区内無洩告示可致、此旨更ニ
相達候事、

十年十月

宮崎支庁

447

支第六十七号

甲第三十四号

從來当県士族家禄元持高ノ儀ハ、定免米三斗八升七合ノ内八升壹合
ハ、年々県庁限收入致シ、家禄税・学校費其他適宜ノ道ニ遣ヒ払有
之候処、本年ヨリ禄制御変革ニ付、右八升壹合米ハ金禄公債証書算
出ノ元高二結ヒ込、而シテ其利子ヲ支給セラレ候義ニ付、右家禄ノ
内自作地・自作高ノ儀ハ、自今一般百姓持地同様、定免三斗八升壹
合宛貢納候儀ト可相心得、此旨元鹿兒島藩士族ヘ布達候事、

但シ、本文自作地・自作高ノ儀、自今一般百姓持地同様相成候ニ
付テハ、該地荒蕪ニ属シテ除税地ニ相成、又ハ検見等ニ依テ減租

448

出乙第三号

戸長

等ニ相成候手續ノ儀ハ、是又一般百姓持地同様可相心得候事、
明治十年十月十七日 鹿兒島県令岩村通俊

取調之筋有之候条、別紙雛形ニ照シ、米ル二十八日限リ無遅滞取調、
該所轄庁又ハ出張所ヘ可届出、此旨相達候事、

明治十年十月十七日

鹿兒島県令岩村通俊

(別紙)

第何大区	町	村	反別	士族戸数	平民戸数	戸数合計
一小区	一	五	何反何畝何歩	何戸	何戸	何百戸
二小区	、	、	、	、	、	、
三小区	、	、	、	、	、	、

右之通相違無之候也、

何大区某郷

明治十年十月何日

戸長心得 何ノ誰

〇

同

副戸長心得何ノ誰

〇

449

達甲第三十七号

客歳十月熊本県下騷擾ノ際、戦死或ハ傷夷ニ源由シテ竟ニ死ニ至ル
軍人ノ寡婦・孤児ハ、恩給令ニ因リ扶助料可下賜之処、尔来引続春
米ノ形勢ニ立至リ、取調方遷延候ニ付、右寡婦・孤児等□□モ特別

ヲ以、本年大坂陸軍事務所高尾中将達丁第四百十九号ニ準拠シ、右同様手当給与候条、出願ノ手續等総テ右達ニ準シ、軍人・軍属ノ遺族ヘ無洩漏速ニ可相達、此旨相達候事、

陸軍卿山県有朋代理

明治十年九月十五日

陸軍中将西郷從道

甲第五十号

右之通被達候条、寡婦・孤児或ハ父母・幼少ノ弟妹ノミアリテ、之ヲ養育スル親族無之者ニ限り手当金給与候条、戦死年月・官等并遺族姓名・年令・男女ノ別等、事故明細書相添印形持参金子受取方、日向地方ハ宮崎支庁、其他ハ本庁第一課ヘ申立、願書ノ義ハ陸軍省丁第四百十九号達但書ニ倣ヒ、追テ差出候義ト可相心得、此旨布達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十月十八日

鹿児島県大書記官渡辺千秋

450

甲第五十一号

先般軍団輜重部ヨリ、各旅団ニテ一時使役セラレ候人夫ノ内、右使役中賃金等ノ義ニ付願致度者有之候ハ、可申出旨通知有之、依テ甲第四百十五号ヲ以、本月十五日迄ニ可申出旨布達致置候処、右ハ該区戸長及使役中ノ百人長連印ノ上、其地名・時日・旅団名号等詳細記載シ、若シ百人長死亡或ハ事故有之連印難相成分、又ハ百人長無之モノ等ハ其原因詳細記載候様、今般軍団輜重部ヨリ再ヒ申来候間、既ニ差出済ノ者モ前件ノ通、更ニ取調差出候義ト相心得、往復ヲ除クノ外十五日間ニ、必ス本支庁及出張所ノ中ヘ可差出、此旨更ニ布達候事、

451

明治十年十月十九日

鹿児島県令岩村通俊

支第四十八号

其地ヘ官軍進入ノ際、賊徒捐棄シタル治療器械、其他支病院ニ格護有之分、至急本県ヘ送付方可取計、此旨相達候也、

十年十月廿日

宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

452

甲第六十二号

本年太政官第十一号公布鳥獸獵規則第二条ニ準拠シ、有害ノ鳥獸ヲ除ク向キ銃砲規則、別紙ノ通仮定候条、此旨布達候事、但右免許ヲ付与スルハ無税ノ儀ト可相心得事、

明治十年十月廿一日

鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

太政官 第十一号 正月廿三日

鳥獸獵規則別紙之通改正候条、此旨布告候事、

鳥獸獵規則

第一条 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスルモノヲ職獵トシ、遊樂ノ為ニスル遊樂トス

第二条 銃獵免許ナキモノハ、総テ銃獵スルヲ禁ス、

但有害ノ鳥獸ヲ除クカタメニハ、地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ与フヘシ、

第三条 銃獵免許ヲ得ント欲スル者ハ、願書ニ族籍・職分・住所姓名年令ヲ詳記シ、東京府下ニ於テハ内務省、其他ハ該地方官庁ヘ

差出スヘシ、

第四条 免状ハ其切一期限ニ止マルモノトス、免状ハ貸借シ、売買シ、若シクハ授与スルコトヲ禁ス、

第五条 免状ヲ願受ルモノハ、左之通免許税ヲ納ムヘシ、

一 職獵税 金壹円

一 遊獵税 金拾円

第六条 水火盜難其他ノ事故ニ依リ免状ヲ毀失スル時ハ、速ニ東京府下ニ於テハ内務省、其他ハ該地方官庁ニ届出ツヘシ、再ヒ免状ヲ願受ル者ハ、更ニ税金ヲ納ムルニ及ハスト雖モ、手数料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ、

第七条 左ニ記列シタル者ニハ免状ヲ附与セサルヘシ、

一 拾六歳未満ノ者

一 白痴・風癪等ノ者

一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八条 左ニ記列シタル場所ニ於テハ、銃獵ヲナスヲ禁ス、

一 都府市街ハ勿論、衆人群集ノ場所、

一 銃丸ノ達ス可キ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所、

一 禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃ニ挺ヲ交叉シタル図ノ下ニ、銃獵禁制ノ四字ヲ

記シ掲ケ置クヘシ、

一 作物植付ケアル田畑内或ハ社寺・人家等ノ構内、

但該地又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス、

453

甲第五十二号

県下加治木電信局ニ於テ、本日ヨリ私報音信取扱候旨申越候条、為

心得此旨布達候事、

但鹿兒島・都ノ城・宮崎三局ノ私信ハ、未タ不取扱旨ニ付、此段添テ相達候事、

明治十年十月廿二日

鹿兒島県令岩村通俊

454

乙第七号

府県

当省所轄下士以下、移籍・改名其他戸籍上ニ係ル届出方ノ義ニ付、明治七年八月記三奪第四十四号ヲ以及布達候趣モ有之、婚姻生死等ヲ始、総テ戸籍上変換ノ節ハ、其都度無遅滞可届出ノ処、中ニハ徒等閑ニ付シ、年月ヲ経テ届出候向モ有之、右家族扶助金下渡ニ付、金銭出納年度期限モ有之、且兵籍上不都合不尠候条、自今右等ノ節ハ其都度無遺漏区戸長調印ノ上、各管庁ヨリ当省軍務局ヘ可届出、此旨更ニ相達候事、

但本文届出方及遷延候向ハ、尔来届出ノ年月ヨリ起算、扶助金支給候義ト可相心得事、

明治十年九月廿六日

海軍大輔川村純義代理
海軍少将中牟田倉之助

甲第五十三号

右ノ通海軍省ヨリ被達候条、移籍改名其他婚姻死生等ヲ始、総テ戸籍上変換ノ節ハ、其都度区戸長調印ノ上速ニ可届出、若シ年月ヲ経テ届出候向ハ、同省達但書ノ通候条、等閑無之様可相心得、此旨布達候事、

明治十年十月廿三日

鹿兒島県令岩村通俊

455 往第二百十号

本年太政官第五十八号布告、先般夫々頒布致候処、揭示洩之分モ可有之哉ニ付、更ニ揭示可取計、此旨相達候事、

明治十年十月廿三日 鹿兒島県令岩村通俊

宮崎支庁中

456 乙第十五号

各区々戸長

県下兵乱ニ際シ、朝廷士民ノ困弊ヲ憐ミ賜ヒ、屢御賑恤ノ特恩ヲ蒙リ、誠ニ難有次第ニ有之、平定ノ上ハ銘々奮起、自存ノ道可相立ハ勿論ニ候得共、目下大乱ノ後ヲ承ケ流離顛沛、殆ント寒饑ヲ免レサルモノ十二八九ト存候、就テハ興業授産ノ道最大急務ニ可有之、然レトモ輕忽着手、万一蹉躓候テハ実ニ恐懼ニ堪サル儀ニ付、此際広ク衆議ヲ取り、其利害得失講究致度、依之区戸長一同此旨ヲ体認シ、苟クモ空論ニ涉ラス、其方法・計算・規則等詳密取調可差出、尚筆紙ニ尽ス能ハサル者ハ、拙者親シク承知候条、無忌憚開陳可致、此旨相達候事、

明治十年十月 鹿兒島県令岩村通俊

457 往第二百十四号

宮崎支庁

今般乙第十五号ヲ以テ区戸長へ相達候ニ付テハ、仍ホ反覆審査ノ上、往第百九十一号達ノ廉々ト一集ニ取纏メ、無遺漏可届出、此旨相達候事、

明治十年十月廿四日 鹿兒島県令岩村通俊

458 支第百貳号

各出張所

其出張所詰官員、以來本庁亦ハ支庁へ出頭之節、前以其事由中上、許可ノ上出頭可致候事、

但持区内巡回・出張等ハ、出張所詰上席之者見込ヲ以可取計、且急務有之難差延節ハ、直ニ出張其事由可届出事、

明治十年十月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

459 支第百三号

乙第十八号

区戸長

国事犯ニテ、先般熊本県ニ於テ入檻相成候者ノ内、今般放免ノ際、所持之金品等当人へ下戻ノ節、数人ノ所持品ニテ相混シ、調落之分有之ニ付、追テ詳細取調ノ上郵送可相成様該県ヨリ申来候条、所持品受取落ニテ帰籍致候者有之候得者、右之趣予テ可中聞置、此段相達候事、

明治十年十月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

460 甲第五十四号

明廿六日、鹿兒島裁判所仮庁ヲ、鹿兒島山ノ口馬場島津左衛門邸内へ移庁候旨、同裁判所ヨリ通知有之候条、此旨布達候事、

明治十年十月廿五日 鹿兒島県令岩村通俊

461 甲第五拾五号

往第三百式十六号

先般兵火ニ罹リ家屋焼燼、一時小屋掛相営ミ候者、去ル八月廿六日暴風雨ノ為メ右小屋掛蕩壊シ、目下雨露ヲ凌兼候者共ヘハ、成規ニ照シ小屋掛料金五円ハ等輕キ三円貸下候条、無利息五ヶ年賦返納ノ積ヲ以可願出、且借家人及ヒ同居人ヘハ貸下ザル成規ノ処、再ヒ小屋掛ヲ営ム者ヘハ、特別ヲ以家持同様貸下候条、此旨布達候事、

明治十年十月廿六日 鹿兒島県令岩村通俊

宮崎支庁

今般甲第五十五号ヲ以テ布達候ニ付テハ、明治八年第百廿二号宛民一時救助規則ニ照シ、貸下方取計証書取纏メ、尚救助施行済之分ハ悉皆別紙表面ニ照シ、無遺漏記載シ、鹿兒島出張救恤掛ヘ送付可致、此旨相達候事、

明治十年十月廿六日 鹿兒島県令岩村通俊

明治十年八月廿六日 暴風雨ニ付 第何大区某郷救恤施行表					某所官 姓名印	
戸主姓名	人員	同内訳	救恤米施行高	小屋掛料 貸付高	農具代 貸付高	
何人	何人	男何人 女何人 男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	
何人	何人	男何人 女何人	何円石	何円	何円	

甲第五十六号

今般管内中学本部左之通相定候条、此旨布達候事、

第十九中学区 鹿兒島

第二十中学区 国分

第廿一中学区 隈之城向田町

第廿二中学区 垂水

第廿三中学区 加世田

第廿四中学区 大島名瀬間切

第廿五中学区 宮崎

第廿六中学区 延岡

第廿七中学区 都ノ城

明治十年十月廿七日 鹿兒島県令岩村通俊

支第六十九号

区戸長

詮議之趣有之候条、左之廉々、往復ヲ除ク之外七日限取調、無遅滞所管支庁又ハ出張所ヘ可届出、此旨相達候事、

明治十年十月 鹿兒島県令岩村通俊

一士民等方向ヲ誤ラス、官庁ノ為メニ尽力セシ者、

右ハ、実地尽力ノ景況巨細ニ取調、確証ニ充ツ可キ廉ハ精々明挙シ、奥章之上可差出事、

但當時出張ノ県官又ハ軍団等ヨリ、賞与米金等ヲ拝受セシ向有之候ハ、其米金高無遺漏記載スヘキ事、

一非職ノ士民誤テ銃丸、刀鎗ニ触レ死傷セシ者、

右ハ、実地ノ景況巨細ニ取調、死者ハ家族人員書相添、負傷者ハ医療之輕重ヲ精々審密ニ記載シ、奥章之上可届出事、但當時出張ノ県官又ハ軍団等ヨリ、手当米金等ヲ拝受セシ向有之候ハ、其米金高無遺漏記載ス可キ事、

乙第二十号

区戸長

管下士民之内、先般暴挙ニ際シ各地ニ出兵遂ニ戦死致候者、及ヒ出兵ノ俣生死不明之者等、別紙表面雛形之通、往復ヲ除キ二十日間ニ無洩取調、本支庁・各出張所ヘ無遅滞可差出、此旨相達候事、

明治十年十月廿七日

鹿兒島県令岩村通俊

暴挙之際戦死及生死不明之者取調表

戦死ノ地名	生死不明	大小区	郷	居住地ノハ平民	年令	戸主カ或ハ二男ノ別等肩書ニスヘシ苗氏名
、	出兵ノ俣生死不明	、	、	何町村又ハ何馬場	、	
、	又ハ行方不知		何通り			

右之通、取調候処相違無御座候也、

明治十年 月 日

第何大区何郷

正副区戸長氏名印

鹿兒島県令岩村通俊殿

466 甲第五十七号

県下暴挙ノ際、各所ノ学校一時休業、実ニ不得已ノ事情ニ候処、学事ノ義ハ一日モ忽ニスヘカラサルノ次第ニ付、明治五年七月第貳百拾四号ニ、分布ノ趣ヲ厚ク体認シ、士民困弊ノ折柄ニハ候ヘ共、抑々

教育ハ父母タル者、子女ヲシテ開智興産ノ基ヲ開カシムルノ本務ニ候条、各自奮勵戮力、学資支給ノ方法及各校開業ノ日限等取調、十一月三十日限可届出、此旨布達候事、

但各校ノ内、本文之通見込不相立者有之候ハ、其旨委細書面ヲ以申出、指図可受事、

明治十年十月廿七日

鹿兒島県令岩村通俊

467 甲第五十八号

各区戸長

去ル廿六日甲第五十五号ヲ以、本年八月廿六日暴風雨ノ為メ家屋蕩壊又ハ流失セシ者、小屋掛料貸下ノ義ニ付云々及布達置候処、借家人及同居人等従来ノ成規ニ泥ミ、別ニ小屋掛ヲ営ミ候者ニテモ出願不致哉ニ相聞ヘ候、右ハ兼テ布達ノ通、今般限特別ノ訳ヲ以、家持同様貸下相成候筈ニ付、為念此旨更ニ布達候事、

明治十年十月三十日

鹿兒島県令岩村通俊

468 乙第二十二号

各区戸長

各区内沿海ノ地ニ於テコレラ病流行ノ節、出入ノ船舶取締方左条ノ通、該地方面警視分署ノ巡查ニ於テ取扱候条、一般ヘ至急伝達可致、此旨相達候事、

十年十月

鹿兒島県令岩村通俊

第一条

一 各区内沿海ノ地ニ於テコレラ病流行中ハ、其地分署巡查ノ内ヨリ船着場ヘ出張シ、出入ノ船ヲ改ムルニ付、伝染者ヲシテ隠匿等ノ

弊ナキ様專ラ注意スベシ、

第二条

一出船入船トモ、右病者アレハ陸地ニ於テ治療セシメ、又船中ヘハ必ス消毒法ヲ行ナハシムヘシ、

第三条

一前条ノ病者ハ、出張ノ巡查其他ノ戸長ト協議シ、区内或ハ近郷ノ医師ヲ以テ速ニ治療ヲ為サシムヘシ、

但治療ノ場所ハ、成丈ケ人家隔リタル処ノ建物ヲ見立テ、一時借受ケ用ユベシ、

第四条

一該病治療ニ属スル費用償却法方ハ、治療ヲ受ル者ヨリ相当ノ代価ヲ取立ツベシ、若シ極貧窮ニシテ其費金ヲ償フ能ワサル者ハ、戸長ニ於テ取調之上伺出ベシ、

469

往第三百五十四号

宮崎支庁

日向国富高町平民市五郎三男鈴木文吉儀ニ付、別紙写之通福岡県ヨリ通知有之候条、原籍江相達、別冊途中入費操替帳ニ記載方之諸費取立、当庁江可相廻、此段相達候事、

明治十年十月廿日

鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

御県日向国^{郷名不詳}富高村平民市五郎三男鈴木文吉ナル者、当県ニ於テ犯罪有之、別紙中渡書之通処刑済、客月三十日原籍郵送取計候処、県下博多駅ニテ逃亡致候段、別紙之通届出候ニ付、該通運取扱人ハ相当可及処分候得共、不取敢此段及御通知候也、

明治十年九月七日

福岡県令渡辺 清

鹿児島県令岩村通俊殿

追テ、別帳本人ニ所関之入費、原籍ヨリ御取立、速ニ^(可脱力)御償却有之候也、

(別紙)

郵送人脱走者

鹿児島県日向国郡名不詳

富高村平民市五郎三男

鈴木文吉

右之者、御処刑済復籍ニ付、八月三十日午後五時頃福岡通運分社ヨリ郵送致来候処、二日市駅迄^里程遠隔ニ付夜中郵送難相成候間、同夜当駅ニテ止宿為致候処、同三十一日曉ニ至リ、不寐番為引払護送人足手当之際、私居宅門口脇ヘ小用ニ罷越候俟脱走致スニヨリ、早速手ヲ分ケ諸所及探索候得共、在所不相分中候条、不束ノ始末何共奉恐入候、依テ御書類相添此段御届仕候也、

筑前国博多下新川端町

内国通運分社

明治十年九月一日

青柳正次郎[㊦]

福岡県令渡辺清殿

前章之通相違無之候也、

戸長

浜田九郎[㊦]

鹿児島県日向国郡名不詳
富岡村平民市五郎三男

鈴木文吉

其方儀、筑前国那珂郡博多橋口町井口甚助方へ投宿中、明治十年六月三日夜、相客宗像郡下西郷村池浦丈平所持之金八円七拾錢窃取スル科、賊盜律窃盜条ニ照シ、懲役六十日申付ル、

明治十年六月廿五日 長崎裁判所福岡支庁

470 乙第二拾八号

区戸長

新潟県管下佐渡国雑太郡二見村中道丸ヨリ、同国二見港字沓ヶ鼻海岸へ、自費ヲ以燈明台ヲ築設シ、本年五月廿三日ヨリ点燈候ニ付、右建築入費消却ノ為メ、該港入津ノ諸船ヨリ別紙ノ通り取立候趣、同県ヨリ掛合有之候条、此旨管下航海營業ノ者へ相達候事、

明治十年十月三十日 鹿児島県令岩村通俊

別紙

入港船舶ヨリ点燈費取立金額

一式百石以上

帆船中沓反ニ付金四厘
向中沓反ヲ除ク

一百石以上

右同断 同三厘
右同断

一五拾石以上

沓艘ニ付金沓錢五厘

一式拾石以上

沓艘ニ付金沓錢

471 支第百三十六号往第三百五十六号

従来県令へ宛差出候書状、至急ヲ要セサルモノモ至急ト表シ、秘密ニ涉ラサルモノモ親展ト題候有之、文書取扱上錯誤ヲ生候ニ付、尔来時日ヲ限ル程ノ事件ハ至急ト書シ、機密ニ涉ル事件ハ親展ト書シ、

其他ハ右等ノ文字ヲ濫用セサル様可致、此段相達候事、

明治十年十月三十日

鹿児島県令岩村通俊

472 乙第廿四号

米蔵取払役へ

当県下各郷米蔵取払役ノ儀、自今一般廃止候条、事務ノ儀ハ現在米穀高及在来書類等取調、其米蔵所在地ノ区戸長へ引渡可中、此旨右米蔵取払役ノ者へ相達候事、

但本年一月以来、勤務手続及給料受取済否等ノ儀ハ、事務引渡済ノ上至急可届出候事、

明治十年十月廿一日

鹿児島県令岩村通俊

473 乙第二十五号

区戸長へ

今般当県下各郷米蔵取払役廃止候条、右事務ノ儀ハ当分其米蔵所在地ノ区戸長ニ於テ兼勤之儀ト相心得、米蔵現在ノ米穀高及在来書類等、右取払役ノ者ヨリ受取可中、此旨相達候事、

但事務受取済ノ上ハ、其旨可届出候事、

明治十年十月廿一日

鹿児島県令岩村通俊

474 往第三百六十三号

宮崎支庁

来ル十一月三日 天長節ニ付、其支庁詰判任官ハ、当日賀表ヲ可差出、此旨相達候事、

明治十年十月三十一日

鹿児島県令岩村通俊

文
書
目
録

文 書 目 録

明治五年ヨリ九年ニ至ル

番号	底本ノ番号	年 月 日	文 書 題
一		五年 一〇月	戊辰戦争傷病者ノ取扱変更
二		一〇月	鎮西鎮台歩兵三〇人募集
三		一〇月	県内右高届ノタメ持高調査
四		一二月一五日	旧軍役高所務米ノ渡方ヲ変更
五		一二月二〇日	旧軍役高所務米ノ手形下渡
六		六年 一月三〇日	都城県廃止、大隅国ハ鹿児島県ガ管轄
七		二月二七日	人力車数増加、運送会社支配トス
八		三月 八日	県内人馬賃錢ノ払渡シ変更
九		三月一九日	所持ノ鉄砲ヲ改メ割印ヲ付ス
一〇		四月 三日	紙幣ノ交換期限ハ来ル十日迄
一一		六月二五日	新曆使用ト家禄賞典禄ノ明細書提出
一二		七月二〇日	県庁廃止ト再開庁
一三		七月一九日	地券方ヨリ願書届書ノ提出ニツイテ
一四	第一号	七月三一日	緑米ノ渡方ヲ九月以降ニ延期
一五		八月 九日	戊辰戦争傷病者ノ再発症ハ扶助打切
一六		五年 九月一八日	戊辰戦争ノ戦病死者ト斃人へ賞典緑続願
一七		六年 四月 五日	右願ニ大蔵大輔井上馨ガ給米廃止ヲ指令
一八		一〇月 四日	地券方ヨリ持高届ノ提出ヲ命ズ
一九		八月	戸長役所ノ設置場所ト役務
二〇	第一六号	五月	駅通寮ノ役員ガ出張シ郵便ノ利用ヲ広メル
二一	第一七号	九月二九日	庁下取締組ノ屯所ヲ大区毎ニ、巡邏強化
二二		一〇月二二日	大島四島ノ物々交換ヲ廃シ金銭利用ヲ認ム
二三		七年 三月 七日	江藤新平脱走ス探索シテ捕エヨ
二四		四月 七日	家禄所務米ノ半分渡シ日割
二五		五月 八日	免職ノ近衛兵ノ調査

二六	第二六号	五月 四日	沽券税ヤ地租等前期分ヲ納入セヨ
二七		五月二三日	地租ノ上納方法ニツイテ
二八	第三一号	五月二五日	新旧銅錢ノ交換ニツイテ
二九		五月二七日	旧藩札引換ノ混乱ヲ正ス
三〇	第三九六号	六年 一二月 二日	地券書替ノ印税収納法変更 右大臣通達
三一	第二九号	七年 五月一九日	右ノ通達ヲ県庁ヨリ移達
三二		五月	海兵徴募布告
三三		七月二五日	上築地ニ救盲院設立
三四		八月	島津家家令ニヨル戦死者調
三五		八月 七日	宅地ノ使途変更届
三六		月日欠ク	住民ノ生死出入調査
三七		一二月 九日	発砲取締リ違反者ニ嚴重注意
三八		月日欠ク	名寄帳紛失届
三九		一二月二〇日	家録所務米ノ残高渡日割
四〇		一二月二四日	持高売買等高直シ処理ニツイテ
四一	第二号	八年 一月一〇日	新旧錢交換比率改变
四二	第三号	二月 三日	太政官札民部省札ノ通用ハ五月末迄
四三		二月	家伝葉ノ製造販売許可
四四	送第四三二号	二月一九日	信州産桑苗木等販売願
四五		一月二五日	近衛兵ノ兵役延長ヲ解ク
四六		二月 三日	城下三町ノ証券印税ノ帖簿調査ヲ施行ス
四七	第二一号	四月一〇日	地券書替料ニツイテ以前ノ布告ヲ取消ス
四八		月日欠ク	無税地規則ノ内第三条
四九	第一八号	三月一八日	公債証書ノ名義替手續ヲ改变
五〇	第一九号	月日欠ク	医院へ種痘課ヲ新設シ以外ノ種痘ヲ禁ス
五一	第二二号	三月 九日	平民ニ苗字ヲ許ス
五二		六月一二日	極貧ノ難病者救済ヲ告グ
五三		六月一五日	旧藩札ノ交換期限ヲ七月二〇日トス
五四	第九〇号	六月 七日	太政官札・民部省札等一部通用延期
五五		七月二〇日	士族ノ緑高売買後ハ高直シ願ヲ提出セヨ

五六	家禄・賞典禄米手形渡日再通告	九月 三日	第五〇号	五六
五七	太政官公布第百三拾八号ヲ移達	九月二七日	第四号	五六
五八	地租半額上納方法	一〇月二三日	第五〇号	五八
五九	他府県へ他出ノ者ハ父兄親族ノ許可必要	九月二七日	第四号	五九
六〇	牛馬売買規則改正	一〇月 四日	第五〇号	六〇
六一	家禄・賞典禄米等ノ払渡シ期日	一〇月二八日	第四号	六一
六二	教部省ノ公布ヲ移達	一〇月一七日	第五〇号	六二
六三	大門口料理屋辺へ人力車ノ出入ヲ禁ズ	一〇月二二日	第四号	六三
六四	借金ノ抵当トシタ家禄米、払渡シ法	一二月二二日	第五〇号	六四
六五	家禄ノウチ禄米渡シノ分ハ売買ヲ禁ズ	一二月 八日	第四号	六五
六六	時鐘ヲ改メル	一九年 二月 九日	第五〇号	六六
六七	市街地土地丈量法	五月二九日	第四号	六七
六八	松原神社ノ再建ニツキ寄付志願者へ	六月	第五〇号	六八
六九	学令児ノ就学ヲ督励	五月一五日	第四号	六九
七〇	開拓願書ノ提出ヲ延期ス	六月一五日	第五〇号	七〇
七一	石油ノ売買ハ日没後トス	七月二八日	第五〇号	七一
七二	地租改正デノ屋敷ハ市街地ト郡村ニ分ケル	月日欠ク	第六八号	七二
七三	医師ノ死亡届書ノ提出規定	七月 八日	第六八号	七三
七四	家督等明細書ノ提出ヲ命ズ	一〇月二四日	第六五号	七四
七五	家禄所務米ノ払渡シニツイテ	一一月二四日	第六五号	七五
七六	家禄所務米ノ渡シ日割	一二月一五日	第六五号	七六
七七	家禄六石抵当ノ借銀ニツキ承恵社ヨリ	一二月二九日	第六五号	七七
七八	家禄所務米ヲ代金受領希望ノ者へ	一二月 六日	第六五号	七八
七九	地租改正ニ着手、終了予定ハ一〇年五月	一一月一四日	乙第一号	七九
八〇	家禄・賞典禄石数届	一〇年 一月 七日	乙第一号	八〇
八一	家禄所務米ノ手形渡シ日割	一月 八日	乙第一号	八一
八二	金禄公債発行ノタメ高直シ願ハ二月迄	一月一〇日	甲第二号	八二
八三	西郷出京ニ随行シタ者ヲ戸長ヨリ届出ヨ	二月一九日	甲第二号	八三

八四	鹿兒島行幸マデ県庁ハ休日ナシ	五年 六月	九二
八五	兵学寮ヲ県庁支配所ト改称	六月	九三
八六	田之浦陶器会社設立	六月	九四
八七	二ツ以上ノ名前ハ一ツトセヨ	五月	九五
八八	県庁職員服務規定	六月一九日	九六
八九	士族ノ改称願ハ戸長ヲ經由セヨ	六月	九七
九〇	鹿兒島県・都城県・美々津県ノ管轄変更	五月一九日	九八
九一	靖献神社へ宣命・金幣下賜	六月二三日	九九
九二	靖献神社へ宣命文	六月二三日	一〇〇
九三	旅人ノ取締リヲ厳重ニセヨ	六月	一〇一
九四	指宿郡治所ヲ山川へ設立	七月	一〇二
九五	人別方ヲ廃止	七月	一〇三
九六	大区小区名ヲ改称スル	七月	一〇四
九七	近衛兵ノ退役願ヲ厳シク審査	七月	一〇五
九八	郵便取扱所開設	七月	一〇六
九九	僧侶ニ肉食妻帯等ヲ許ス	五月一八日	一〇七
一〇〇	居屋敷ノ地租ヲ改定	八月	一〇八
一〇一	皇太神宮ノ大麻配布	八月	一〇九
一〇二	楮ノ売買ト殖産ヲ計ル	八月	一一〇
一〇三	華士族ノ子弟ガ平民身分ナルノハ自由	五月	一一一
一〇四	布告類ハ早急ニ遅滞ナク回達セヨ	八月	
一〇五	拾円・五円・二円ノ新紙幣発行	八月	
一〇六	諸産物ノ代金納ト上納廃止ヨリ目	八月	
一〇七	靖献神社祭ノ日ヲ休日トス	九月	
一〇八	出水野間原ソノ他辺路番所廃止	九月	
一〇九	居屋敷・自作地等ノ反別制限ヲ解ク	九月	
一一〇	砂糖や禽獸類ノ売買ヲ自由トス	九月	
一一一	郡長・里正ノ呼称ヲ区長・戸長ニ改称ス	九月	

明治五年六月ヨリ六年十二月迄

一一二	九月	糧餉方ヲ諸賤蔵ト改称
一一三	九月	戊辰戦争傷病者ノ取扱変更
一一四	一〇月	屋敷地ノ畝歩ヲ勝手ニ広メルコトヲ禁止
一一五	一〇月	士族・附士・卒ノ救助米ヲ増加
一一六	一〇月	近在五村ノ士族屋敷ヲ無代銀デ払下ゲル
一一七	一〇月	他郷ニ所有スル自作地ノ売買法ヲ変更
一一八	一〇月	桑苗ヲ希望者ニ無料配布
一一九	一〇月	家禄ヲ所務米払ニ変更、赤米モ支給ス
一二〇	一〇月二〇日	所務米二石以下ハ真米ヲ給ス
一二一	一〇月	家禄売払後ノ八石家禄ノ措置
一二二	一〇月	旧諸局長ト一代卒等ハ平民トス
一二三	一〇月	兵器方ヲ廃止ス
一二四	一〇月	諸郷ノ土着卒族ハ郷士族ト称ス
一二五	一〇月	諸願書類ハ三八日ニ二通提出セヨ
一二六	一一月	士族ト改称シタ附士・卒ノ勤務ハ従前通り
一二七	一一月	触役所ヲ廃止ス
一二八	月日欠ク	太陽曆ヲ採用
一二九	月日欠ク	朝廷・島津忠義久光父子ハ拝賀手続
一三〇	八月 八日	給地高所務米払イハ損高モ含ム
一三一	八月 八日	廢官後ノ者ハ俸禄ヲ支給スルカ否カ
一三二	二月二七日	人力車ハ運送会社支配トス
一三三	二月二七日	人力車ニ課税ス
一三四	三月 七日	藩札仙位比較表ト諸物仙定メ
一三五	三月 八日	新銭ニヨル人馬賃錢定メ
一三六	三月 九日	米・大豆・粟ナド新銭相場定メ
一三七	三月一三日	市中ノ諸取引ニハ新曆ヲ使用セヨ
一三八	月日欠ク	旧藩札ト新円ノ引替表
一三九	三月二五日	県内金相場改定、両替料百文トス
一四〇	二月二七日	徴兵告諭ヲ移達
一四一	五月一〇日	旧藩札ノ押印ナキハ通用ヲ禁ズ

一四二	五月一九日	五月五日ノ皇居炎上ヲ知ラセル
一四三	五月二二日	島津久光ヲ従二位様ト称ス
一四四	五月二七日	神職ヲ教導職トス
一四五	六月一三日	外国船入港時ノ諸対策
一四六	六月一七日	窃盜被害ノ者ハ必ズ届出ヨ
一四七	六月一七日	鬪鶏ナドノ賭博ヲ禁ズ
一四八	六月二三日	地券発行ノタメ標札ヲ掲ゲヨ
一四九	七月二七日	願書・届書ノ提出手続、県庁廃止
一五〇	七月二七日	県庁ヲ再ビ開庁ス
一五一	七月二七日	県庁ノ出仕・退出時刻定メ
一五二	七月二七日	戸長役所ヲ設置ス
一五三	七月二七日	県庁ハ願届書ナドハ戸長ヲ經由スベシ
一五四	八月 三日	郡治所廃止、支庁設置
一五五	八月 四日	諸伺ナドハ罫紙ヲ使用セヨ
一五六	八月 四日	島津忠義ハ休暇ヲ帰鹿予定
一五七	八月 七日	廢官ノ者ハ五年間養料四石ヲ与エル
一五八	八月 七日	夏期休暇規定
一五九	八月 四日	支庁設置ニ伴ナイ本支庁管轄割替
一六〇	八月 八日	出張職員ノ服務規定
一六一	八月 九日	戊辰戦争傷病者ノ再発ハ扶助打切
一六二	八月 九日	区内角力・芝居ナドノ遊芸興行ヲ禁ズ
一六三	八月一四日	霧島神社ヲ県社トス
一六四	六月一四日	島津忠義實典米ヲ学校資金ニ充当願書
一六五	七月 三日	文部省ハ右ノ願書ヲ許可
一六六	六月	右ノ許可ヲ鹿児島県令へ通知
一六七	八月	各郷戸長へ布達ノ条々
一六八	八月一五日	島津忠義帰鹿、祝儀ハ家令ヲ經由セヨ
一六九	八月一八日	地券ヲ発行ス
一七〇	八月一八日	戸長ト副戸長ノ役割従前通り
一七一	八月二三日	大札服貸与

一七二		八月二日	旧兵衛兵ノ遺族へ賞典下賜
一七三		八月二四日	旧兵衛兵満期退役者へ賞典米下賜
一七四		七月二日	華士族家督相続法ノ改正追加
一七五	第一四号	八月二七日	藩札引替割合ノ変更
一七六		八月二八日	朝官ノ家族へ藩ノ養棒米ヲ廃ス
一七七		九月二日	大山権令休暇通知
一七八		九月二日	各鎮台ノ除隊者ヲ補充セヨ
一七九	第一六号	九月	郵便規則ノ徹底ヲ促ス
一八〇	第一七号	九月二九日	庁下ニ取締組ヲ設ク
一八一		一〇月二日	台風ノタメ早速ヲ認ム
一八二		一〇月三日	支庁へ差出ス書類ハ同案三通ニ変更
一八三	第三二一号	一〇月七日	皇子誕生後死去、歌舞音曲停止三日間
一八四		一〇月八日	磯山ヤ鹿倉デノ狩獵ヲ禁ス
一八五		一〇月九日	教導職ノ各郷巡回ノ便利ヲハカル
一八六		一〇月二二日	道路ヤ溝川ニ塵芥ヲ捨テル者ヲ処罰ス
一八七		一〇月二三日	瓶島へノ役所使ハ月二回トス
一八八		一〇月一九日	七島ノ管轄ハ第五支庁カラ第六支庁へ
一八九		月日欠ク	四ヶ所支庁取立ノ申合セ
一九〇		八月一八日	各郷戸長へ達示ノ条々
一九一		七月	各郷地券掛人名ト職務概略
一九二		一月二七日	大蔵省官員ヲ諸県へ派出、撫民ニ当ル
一九三		一月	区長地券取調兼職務概略
一九四		一〇月二七日	郵便開業路線ト諸規則・手続ナド
一九五		六年 二月二七日	祭日・祝日定メ

明治拾年壹

一九六	甲第一号	一月四日	鹿児島裁判所長大塚五等判事上京
一九七	無号	一月九日	演劇夜際禁止
一九八	無号	一月九日	旅人取締ノ儀第六大区へ
一九九	無号	一月九日	同上 第七 第八 第九 第十五大区へ

二〇〇	甲第二号	一月一〇日	金禄公債証書下賜ニ付持高取調
二〇一	番外	一月二日	国民軍年令相当ノ者取調
二〇二	甲第三号	一月二日	盗難届雛形
二〇三	無号	一月五日	渡船橋梁ヶ所賃錢等取調
二〇四	無号	一月五日	宮崎仮病院廃止
二〇五	無号	一月五日	同上ニ付雇医并吏員へ達
二〇六	無号	一月一六日	官省達移達
二〇七	甲第四号	一月一六日	正院修史局ニ於テ藩史編輯ニ付云々ノ儀
二〇八	無号	一月一八日	鹿児島医院分局設置
二〇九	番外	一月二〇日	士族婦省ノ節発着届ノ儀
二一〇	無号	一月二〇日	英語学校生徒六拾名募集
二一一	無号	一月二二日	英医ウ井リス宮崎出張
二一二	無号	一月二二日	中村町・松山町貸坐敷米客届出方
二一三	無号	一月二二日	鹿児島裁判所宮崎支庁へ差出何届名宛ノ儀
二一四	番外	一月二二日	内国勸業博覧会出品試験ノ儀
二一五	番外	一月二二日	度量衡発完施行期限
二一六	乙第一号	一月二三日	古川城之助捕縛ノ儀
二一七	番外	一月二三日	違式註違条例ノ内施行期限
二一八	番外	一月二三日	隠充罰則更正
二一九	甲第六号	一月二四日	説教法談等興行取締ノ儀
二二〇	無号	一月二一日	医院分局長三田村一出張
二二一	番外	二月二日	県税則科目鑑札等ノ儀
二二二	無号	二月三日	医院分局葉仙上納期限
二二三	無号	二月八日	是迄警察十分署へ届ノ事件当分上町屯所へ差出シム
二二四	無号	二月日欠	当庁下出張巡査引払
二二五	甲第九号	二月二日	陸軍大將西郷隆盛外二名上京并中原尚雄等口供
二二六	無号	二月三日	本月十二日第九号布達中取消ノ件
二二七	番外	二月六日	各分署詰警部当分区長兼務
二二八	無号	二月一七日	皇大神宮大麻頒布ニ付主典八羽光謙出張
二二九	甲第一〇号	二月一八日	管下地租改正猶予

二三〇	番 外	二月一九日	西郷隆盛上京ニ付随行ノ面々取調雛形
二二一	番 外	二月二〇日	諸達布達等此涯郵便局引払ニ付各区直持
二二二	無 号	二月二八日	奉職薄山分進達ニ不及各区戸長江達
二二三	無 号	二月 日欠	巡查募集ニ付人名申出シム
二三四	(無 号)	二月	野村綱口供
二三五	無 号	三月 一日	至急御用状村継ノ儀 第一六七八九大区へ
二三六	無 号	三月 三日	鹿兒島裁判所宮崎支庁閉庁
二三七	無 号	三月 三日	各小学督視トシテ旧中属桜井忠徳巡廻
二三八	無 号	三月 三日	此涯郵便局引払ノ処宮崎郵便局ノ分ハ措置ノ儀同
二二九	無 号	三月 五日	過般巡查募集ノ達取消第九大区へ
二四〇	無 号	三月 五日	同上 第十三大区へ
二四一	無 号	三月 五日	同上 第三大区へ
二四二	無 号	三月 五日	同上 第十二大区へ
二四三	番 外	三月 五日	帶刀禁制屹ト不守ノ儀有之間敷ノ儀
二四四	無 号	三月 八日	先般達示郵便局伺ノ通閉局ノ儀
二四五	番 外	三月 九日	鹿兒島裁判所当分閉庁
二四六	無 号	三月一〇日	陸軍大尉西郷隆盛等上京途中兵端相聞ケ云々ノ儀
二四七	無 号	三月一〇日	鹿兒島表へ差越者鑑札所持セシム
二四八	番 外	三月一二日	磯邸・山下邸へ勅書
二四九	番 外	三月一二日	中原尚雄等上国へ護送
二五〇	番 外	三月一二日	大山綱良勅使随行出京
二五一	番 外	三月一六日	此涯為取締通行鑑札付与
二五二	無 号	三月一七日	勅使臨降逆徒征討云々ノ儀
二五三	番 外	三月二〇日	方今不良ノ徒嚴重取締ノ儀
二五四	無 号	三月二八日	各小学督視トシテ旧中属桜井忠徳巡回
二五五	番 外	三月二九日	各区へ警部巡查出張
二五六	無 号	四月 四日	本線路郵便局ニ限り開設
二五七	無 号	四月一三日	区戸長欠員右之人当見込申出シム
二五八	番 外	四月一六日	大書記官出畑常秋死去
二五九	第七九号	四月一九日	残賊脱逃ノ儀総督本営ヨリ達ノ移達

二六〇	無 号	四月二四日	大書記官死去ニ付諸願伺ハ鹿兒島県庁宛ニ差出シム
二六一	無 号	四月二七日	警部巡查被廢總督本営達ノ移達
二六二	無 号	四月二七日	岩村通俊県令、渡辺千秋大書記官宣下
二六三	無 号	四月二七日	大山綱良官位褫奪 西郷隆盛外一名同断
二六四	無 号	四月二七日	県下囁集ノ暴徒云々總督本営ヨリ達ノ移達
二六五	無 号	四月二九日	区戸長出営ノ儀總督本営達ノ移達
二六六	無 号	四月二九日	軍艦十一艘來艦兵隊上陸
二六七	無 号	四月三〇日	通行馬場ノ儀總督本営ヨリ達ノ移達
二六八	無 号	五月 一日	肥後表へ出張ノ者等取調
二六九	無 号	五月 一日	賊徒ニ党与スル者婦順スル者寛大ノ御処分云々ノ儀
二七〇	無 号	五月 一日	海軍大佐仁礼景範県令心得
二七一	無 号	五月 一日	大小船出入ノ儀總督本営ヨリ達ノ移達
二七二	無 号	五月 五日	諸願伺届名宛ノ儀

岩村通俊県令以後ノ分(目録原本ハ月日ヲ欠ク)

二七三	第一号	五月 二日	岩村通俊鹿兒島県令ニ宣下
二七四	第二号	五月 二日	前県令大山綱良ヨリ布達セシ旨趣ヲ委信シ心得達無之様可致旨諭達
二七五	第三号	五月 二日	賊ノ脅迫ヲ受米金ヲ出シ或ハ難役ニ使用セラレシ者ヲ寛ス
二七六	第四号	五月 二日	病院設置官費療養
二七七	第五号	五月 二日	賊軍入吉ニ遁逃日向路ニ潰走
二七八	第六号	五月 二日	人民安堵營業散乱不致様諭達
二七九	第七号	五月 二日	鹿兒島県裁判所開庁
二八〇	第八号	五月 二日	海軍大佐仁礼景範鹿兒島県令ノ心得ヲ解カル
二八一	第九号	五月 三日	当直軍艦標旗雛形
二八二	第一〇号	五月 三日	反正帰順ノ者速可申出
二八三	第一一号	五月 三日	海軍造船所前通往還通行差止
二八四	第一二号	五月 三日	県庁構内第四課中ニ帰順掛ヲ置
二八五	第一三号	五月 四日	暴徒襲撃哉ニ候条哨兵線外ノ人民立退カシム
二八六	第一四号	五月 四日	哨兵線ノ往來ヲ禁シ且船舶入港差止
二八七	第一五号	五月 五日	今晚開戦已來火災ニ罹リ目下凍餒ニ迫ル者へ救恤

二八八	第一六号	五月三日	反正帰順告諭
二八九	第一七号	五月四日	従軍ノ者帰順并療養願
二九〇	第一八号	五月七日	目下飢饉ニ迫リ救助ヲ受度者ハ可申立
二九一	第一九号	五月八日	通行印鑑引替
二九二	第二〇号	五月九日	前ノ浜へ營業者通船差許
二九三	第二一号	五月一〇日	撫育・承恵両社発行金券禁止
二九四	第二二号	五月九日	救恤出願者哨兵線通行ノ儀
二九五	第二三号	五月一〇日	救恤取扱所へ護送ノ儀
二九六	第二四号	五月一〇日	十歳以下七十歳以上ノ男子及婦人無鑑札ニテ哨兵線通行
二九七	第二五号	五月一日	此混食物ヲ除ノ外線外へ荷物持出禁止
二九八	第二六号	五月一日	賊徒家族擾乱等ノ儀無之様可致
二九九	第二七号	五月一二日	玄米二百一十一俵県庁内ニ取入置候ニ付所有主ハ申出ベシ
三〇〇	第二八号	五月一二日	汐見町元郵便局へ救恤所ヲ開ク
三〇一	第二九号	五月一四日	家賤等取纏メノ儀
三〇二	第三〇号	五月一五日	家屋焼失者へ小屋掛料貸下
三〇三	第三一号	五月	西京御免釐還幸
三〇四	第三二号	五月二二日	還幸御延引
三〇五	第三三号	五月二〇日	帰順願書式ノ儀
三〇六	第三四号	五月二四日	桜島ノ内赤水村へ当分仮出張所ヲ設
三〇七	第三五号	五月二三日	同上所へ救恤所ヲ仮設
三〇八	第三六号	五月二五日	本月三日第十一号布達書中第四課ヲ第一課ニ改
三〇九	第三七号	五月二六日	引続御救助ノ儀
三一〇	第三八号	五月二七日	当分ノ内一般ノ患者ヲモ治療為致候条可願出
三一一	第三九号	五月二八日	救恤所移転
三一二	第四〇号	五月三〇日	現今帰省休暇ノ者神速帰宮候様佐倉宮所ヨリ昭会
三二三	号 外	(五月二八日)	開戦ニ付人民米穀買入差支ノ者へ玄米払下
三二四	第四一号	六月三日	当分赤水村当県出張所内ニ於テ郵便取扱
三二五	第四二号	二月一五日	上族所務米請取残金切符所持ノ輩届出シム

明治拾年式			
三一六	甲第一号	六月一八日	庁下学校病院等当分廃
三一七	甲第二号	六月二七日	日向国区名改称
三一八	甲第三号	六月二七日	薩摩大隅ヲ本庁日向ヲ宮崎支庁ノ所轄トス
三一九	甲第四号	六月二七日	当分ノ内各出張所ヲ設置
三二〇	甲第五号	六月二八日	人民一般哨兵線通行ノ儀
三二一	甲第六号	六月二九日	再ビ賊徒ニ迫ラザル様諭達
三二二	甲第七号	七月四日	賊徒并手負ノ者其速ニ改心致サ、ルモノハ重罪ニ行フヘキ旨
三二三	甲第八号	七月五日	救恤米及小屋掛料等拝借願手續
三二四	甲第九号	七月六日	賊徒追々敗走官軍引続追討漸次平定
三二五	甲第一〇号	七月二二日	東京警視庁出張所設立、第四課当分閉止
三二六	甲第一一号	七月二二日	東京警視庁出張所設立、(帰順願処理)
三二七	無 号	七月二二日	同上本日開庁
三二八	甲第二二号	七月二三日	本年五月第十二号布達帰順掛ヲ廃ス
三二九	甲第二三号	七月一九日	県下郵便線路復活、郵便局開設
三三〇	甲第二四号	七月二三日	県下港道路出入願ハ東京警視出張所へ
三三一	甲第二五号	七月二五日	特別小屋掛料下賜
三三二	甲第二六号	七月二五日	借家及同居人へ特別小屋掛料下賜
三三三	甲第二七号	七月二五日	罹災者へ特別御救助ニ付取調
三三四	乙第五号	七月二五日	甲第十五号同十六号達ノ義取調雛形
三三五	乙第六号	七月二五日	甲第十七号布達ノ義取調
三三六	甲第一八号	七月二五日	征討総督有栖川宮本日鹿児島御着
三三七	甲第一九号	七月三一日	盗難ニ逢フ者訴出方
三三八	甲第二〇号	七月三〇日	失火届出方
三三九	甲第二一号	八月一日	郵便路線開通
三四〇	番 外	八月三日	賊徒発行ノ偽札所持ノ者八届出サシム
三四一	番 外	八月三日	御用掛小野修一郎宮崎支庁長申付
三四二	番 外	八月三日	宮崎支庁所管ノ区ヲ定ム
三四三	番 外	八月三日	兵火ニ罹者へ特別小屋掛料

三四四	番 外	八月 三日	賊徒ノ布達ハ都テ其効ナキモノトス
三四五	番 外	八月 三日	宮崎ニ臨時病院ヲ設ケ官費療養
三四六	無 号	八月 四日	追々潰走ノ賊徒云々本營ノ移達
三四七	無 号	八月 四日	戦争ノ為メ閉局ノ郵便本日ヨリ継立
三四八	無 号	八月 四日	本庁布達頒布
三四九	無 号	八月 五日	人馬繼立軍団輕重部ノ指揮ヲ受シム
三五〇	甲 [▽] 第三二号	八月 五日	開戦後渡シタ印鑑ヲ返納セヨ [△]
三五一	甲 [▽] 第三三号	八月 五日	管下鎮定ニ付防禦線ヲ解ケ [△]
三五二	甲 [▽] 第三四号	八月 五日	皇后京都發海路還御ノ移達 [△]
三五三	甲 [▽] 第二五号	八月 六日	本月二日宮崎支庁開庁
三五四	甲 [▽] 第二六号	八月 六日	本支庁所轄区分
三五五	無 号	八月 七日	分捕ノ米穀品物届出シム
三五六	無 号	八月 九日	正副戸長ノ内志名ッ、上野事務扱所ヘ詰 シム九十四大区ヘ達示
三五七	甲 [▽] 第二七号	八月 一二日	今般征討ノ役戦死云々陸軍中將ヨリ達ノ移達
三五八	無 号	八月 一七日	征討總督有栖川宮明十八日宮崎御着
三五九	無 号	八月 一九日	区戸長給料処分
三六〇	無 号		救恤事務取扱順
三六一	無 号	八月二〇日	征討總督有栖川宮明廿一日宮崎御出立
三六二	甲 [▽] 第二九号	八月 二三日	臨時支病院出張所ヲ設ケ
三六三	乙 [▽] 第二三号	八月 二四日	家禄賞典祿渡方
三六四	無 号	八月 日欠	賊徒ノ布達ハ無効ニ付賊徒ヨリ申付正副 戸長モ同様ノ儀
三六五	無 号	八月 二六日	賊徒ノ暴命ニ応セサル様諭達
三六六	甲 [▽] 第三二号	八月 二七日	賊徒巨魁日州三田井筋ヘ遁逃云々
三六七	無 号	八月 二八日	負傷者送附手續
三六八	無 号	八月 二八日	甲第三十二号布達ニ付各出張所ヘ達
三六九	無 号	八月 二八日	区戸長給料渡方差控
三七〇	無 号	八月 二九日	正副戸長履歷書差出サシム
三七一	甲 [▽] 第三三号	八月 二九日	征討總督ヨリ達ノ移達
三七二	無 号	八月 二九日	細島總督本營ヘノ電報
三七三	無 号	八月 三一日	危難ニ逢候節ハ賊徒討取候共不苦ノ儀

三七四	無 号	八月 三一日	各校教員并学校掛ノ者取調
三七五	無 号	九月 一日	各出張所称呼
三七六	無 号	九月 三日	細島ヨリ加治木迄ノ電線切断有之時ハ急 報スベシ
三七七	無 号	九月 五日	県令過去ノ旨賊兵ノ回達ハ賊徒ノ詐言
三七八	無 号	九月 五日	賊徒乱入汽船ニ立退本日加治木ニ出張
三七九	番 外 一 号	九月 六日	当分加治木ニ仮県庁ヲ設ケ
三八〇	無 号	九月 六日	總督本營達ノ移達
三八一	無 号	九月 七日	飛信繼立所ノ儀
三八二	無 号	九月 九日	細島ヨリ加治木迄電線云々儀
三八三	無 号	九月 九日	臨時病院出張所患者取調難形
三八四	無 号	九月 一〇日	豊後国大分ヨリ鹿兒島迄電信架設ノ儀
三八五	無 号	九月 一〇日	諸達及指令并伺届等結文例
三八六	番 外 二 号	九月 一二日	總督本營ヨリ達ノ移達
三八七	番 外 一 号	九月 一四日	各地ヘ架設ノ電線ハ妨害者有之云々
三八八	無 号	九月 一四日	電信破損云々ニ付一村限請書差出サシム
三八九	無 号	九月 一四日	小林救恤所出張宮田伸吉ヘ帰庁セシム
三九〇	無 号	九月 一四日	兵乱ニ付家屋焼亡ノ地所取調
三九一	無 号	九月 一五日	賊徒ニ号シ一時方向ヲ誤リ候者ヘ説諭ノ儀
三九二	無 号	九月 一六日	各学校開校ノ意見申出サシム
三九三	無 号	九月 一七日	高崎郷神宮諸経費ノ儀
三九四	無 号	九月 一八日	元民費賊課ノ分取調都城出張所ヘ達
三九五	無 号	九月 一八日	甲第十七号布達ノ儀取調期限
三九六	無 号	九月 二〇日	学区取締并教員人数及月給取調
三九七	往 第 一 九 号	九月 二〇日	虎列拉流行ニ付予防
三九八	無 号	九月 二〇日	本庁建築ニ付建物取調
三九九	無 号	九月 二〇日	飛信書状ノ儀
四〇〇	無 号	九月 二二日	騒乱ニ付不都合ノ正副戸長ハ免職セシム ルニ付行状取調
四〇一	無 号	九月 二二日	五等属大江退志布志郷ヘ出張
四〇二	無 号	九月 二二日	各地巡查ヘ銃器携帯セシム
四〇三	無 号	九月 二三日	四等属蒲原敬路飯野筋ヘ出張

四〇四	無 号	九月二四日	官費賄口後廃止
四〇五	無 号	九月二四日	本日西郷桐野村出ノ三名打留電報
四〇六	無 号	九月二四日	本日賊魁西郷隆盛桐野利秋其他打取或ハ降状
四〇七	出第一号	九月二五日	殘党悉ク降伏管下一般平定
四〇八	無 号	九月二五日	商用病痾等ニテ他管旅行差止置候処今般差支ナシ
四〇九	無 号	九月二五日	鹿兒島県庁建築ニ付木材等手当
四一〇	無 号	九月二六日	出ノ浦ニ出張所ヲ設ク
四一一	無 号	九月二六日	兵乱中商船出津不相成処今通船差許
四一二	無 号	九月二七日	総督本営鹿兒島へ被遷
四一三	無 号	九月二九日	戸長等終日詰切金七錢・晝夜詰切金拾錢五厘給与
四一四	無 号	九月二九日	賊徒暴拳來拾得牛馬届出シム
四一五	無 号	九月二九日	同上耕牛馬紛失取調
四一六	無 号	九月二九日	陸軍雇上ノ汽船端舟流失
四一七	出乙第二号	九月二九日	賊徒征討ニ付人民家屋舎營宿料ノ儀先般相違候区戸長履歷往復ノ外三日限差出サシム
四一八	無 号	九月二九日	自今諸願届ハ三通ツ、差出サシム
四一九	無 号	九月三〇日	行旅人病ニ罹リ死去ノ節所持品取扱ノ儀
四二〇	無 号	九月三〇日	諸港船舶出入当分禁止ノ処即今廃止
四二一	甲第四二号	一〇月二日	コレヲ病者通送禁止
四二二	甲第四三号	一〇月二日	コレヲ病者通送禁止
四二三	甲第四四号	一〇月二日	コレヲ病者通送禁止
四二四	甲第四五号	一〇月二日	コレヲ病者通送禁止
四二五	甲第四六号	一〇月二日	コレヲ病者通送禁止
四二六	無 号	一〇月三日	人馬賃錢兵乱中一時仮定ノ処並非常ノ賃錢ニ引直サシム
四二七	乙第一四号	一〇月三日	区戸長拜命月日及給料等調
四二八	無 号	一〇月三日	コレヲ病者防法及避病院等ノ儀
四二九	往第八七号	一〇月四日	正副戸長ノ内賊徒ニ党与シ云々
四三〇	無 号	一〇月七日	道路並木伐木造遺殘ノ木材取調
四三一	無 号	一〇月七日	大山綱良処刑
四三二	往第一二七号	一〇月七日	臨時病院出張医員并出者取調
四三三	無 号	一〇月一〇日	商船出津ノ節届方

四三四	往第一一九号	一〇月一〇日	コレヲ病者送送禁止ノ儀精々取締方注意セシム
四三五	支第一六号	一〇月一〇日	昨九年十月一日ヨリ本年六月三十日マテ清酒焼酎相場取調
四三六	甲第四七号	一〇月二日	今般戦死ノ者熊本鎮台ニ於テ招魂祭施行
四三七	往第一二七号	一〇月二日	本日乙第十四号達明細書ハ式通ツ、取立
四三八	往第一二九号	一〇月二日	正副戸長ノ内不都合ノ間アル者処分方達書中戸長ノ上区ノ字ヲ加フ
四三九	甲第四八号	一〇月二日	鹿兒島裁判所官崎支庁本日開庁
四四〇	甲第四九号	一〇月二日	艦内教授役以下水火卒名簿取調
四四一	往第一四三号	一〇月二日	日向地方区戸長給料官費支給ノ儀
四四二	支第二八号	一〇月二日	居室御宿営ト相成候者届出雛形
四四三	往第一三八号	一〇月二日	コレヲ病者送送禁止ノ儀二付一層注意セシム
四四四	往第二〇五号	一〇月二日	大分県ヨリ国事犯免罪ノモノ送致
四四五	支第二〇九号	一〇月二日	本年貢米出願次第石代金納差許
四四六	無 号	一〇月二日	高鍋ヨリ当地マテ電線断線云々
四四七	甲第三四号	一〇月二日	家禄持高定免等ノ儀元鹿兒島藩士族へ達
四四八	出乙第三号	一〇月二日	町村反別戸数等取調
四四九	甲第五〇号	一〇月二日	軍人寡婦孤兒等手当金給与
四五〇	甲第五一号	一〇月二日	一時使役セラレ候人夫ノ内賃金云々ノ儀
四五一	支第四八号	一〇月二日	賊徒相違候ノ治療器械本県へ送付
四五二	甲第六二号	一〇月二日	鉄砲規則仮定
四五三	甲第五二二号	一〇月二日	加治木電信分局本日ヨリ私報音信取扱
四五四	甲第五三二号	一〇月二日	海軍少将ヨリ達ノ移達
四五五	往第二一〇号	一〇月二日	本年太政官第五十八号布告更ニ掲示セシム
四五六	乙第二五号	一〇月二日	興業授産ノ道無忌憚開陳致スヘシ
四五七	往第二四四号	一〇月二日	乙第十五号達ノ儀無遺漏届出シム
四五八	支第一〇二号	一〇月二日	出張所詰官員支庁へ出頭ノ儀
四五九	乙第一八号	一〇月二日	国事犯放免ノ際所持ノ金品下渡ノ儀
四六〇	甲第五四号	一〇月二日	鹿兒島裁判所仮庁移庁
四六一	甲第五五号	一〇月二日	八月廿六日暴風雨ニ付小屋掛料貸下
四六二	往第三二六号	一〇月二日	甲第五十五号布達救助施行済ノ分無遺漏救恤掛へ送付
四六三	甲第五六号	一〇月二日	管内中学本部ヲ定ム

四六四	支第六九号	一〇月 日欠	士民等向ヲ謬ラス官庁ノ為ニ尽力セシ者其他取調
四六五	乙第二〇号	一〇月二七日	暴挙之際戦死及生死不明ノ者取調
四六六	甲第五七号	一〇月二七日	各校開業ノ日限等取調
四六七	甲第五八号	一〇月三〇日	暴風雨ニ付小屋掛料貸下ハ借家人同居人 モ同様ノ儀
四六八	乙第二二号	月日欠	コレヲ病流行ノ節出入船舶取締方
四六九	往第三五四号	一〇月三〇日	犯罪人鈴木文吉途中入費取立ノ儀
四七〇	乙第二八号	一〇月三〇日	新潟県佐渡国燈明台建築
四七一	徒第三五六号	一〇月三〇日	至急親展ノ字濫用セサル様致スベシ
四七二	乙第二四号	一〇月三一日	各郷米蔵取払役廃止
四七三	乙第二五号	一〇月三一日	同上付米穀書類可受取旨区戸長へ達
四七四	往第三六二号	一〇月三一日	天長節ニ賀表ヲ差出サシム

鹿児島県史料集刊行一覽

集	史 料 名	執 筆 者	集	史 料 名	執 筆 者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫	23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)	原口虎雄
2	丁丑日誌(上)	村野守次	24	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)	原口虎雄
3	丁丑日誌(下)	芳 即正	25	三州御治世要覽	宮下満郎・桑波田興
4	薩摩国新田神社文書	五味克夫	26	桂久武日記	村野守次
5	一向宗禁制関係史料	桃園恵真	27	明赫記	宮下満郎
6	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光	28	要用集(上)	芳 即正
7	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真	29	要用集(下)	芳 即正
8	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光	30	桂久武書翰	村野守次
9	御登御道中日帳御下向・列朝制度	原口虎雄	31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)	桐野利彦
10	明治元年戊辰戦役関係史料	村野守次	32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)	宮下満郎
11	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	増村 宏	33	江夏十郎関係文書	山田尚二
12	管窺愚考・雲遊雜記傳	五味克夫	34	示現流関係史料	宮下満郎
13	川上忠塞一流家譜	五味克夫・桑波田興	35	樺山玄佐自記並雜 「未隨筆」 ・樺山紹劍自記	晋 哲哉
14	本藩人物誌	桃園恵真	36	島津世録記	山田尚二
15	薩陽過去帳	宮下満郎	37	島津世家	畠中 彬
16	備忘抄・家久公御養子御願一件	五味克夫	38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
17	鹿児島縣地誌(上)	桐野利彦	39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
18	鹿児島縣地誌(下)	桐野利彦	40	薩藩字事一・鹿児島県師範学校史料	宮下満郎
19	薩藩舊土文章	五味克夫・桑波田興	41	薩藩字事二・薩藩字事三	畠中 彬
20	薩藩先公貴翰(乾)	五味克夫・桑波田興	42	薩藩名勝志(その一)	吉元正幸
21	薩藩先公貴翰(坤)	五味克夫・桑波田興	43	薩藩名勝志(その二)	吉元正幸
22	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歷・小松公之記事	芳 即正	44	薩藩名勝志(その三)	吉元正幸・塩満郁夫

鹿児島県布達（上）

（鹿児島県史料集 第四十五集）

平成十八年三月

発行

鹿児島市城山町七一
鹿児島県立図書館

電話 ○九九―三四―九五二一

FAX ○九九―三四―五八二四

印刷

鹿児島市上之園町十七の二
濱島印刷株式会社

電話 ○九九―二五五―六二二